魔法少女リリカルなのはA's～夜天の王と無窮の魔王～

Cry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＡ' ｓ～夜天の王と無窮の魔王～

【Ｎコード】
Ｎ２８３８Ｍ

【作者名】
Ｃｒｙ

【あらすじ】
ある世界の魔王が勇者を庇い光にのまれた
気がついたらベットの中、となりには見知らぬ少女、しかも記憶も感情も欠けている！？
優しい少女の家族となった魔王は、何を見て、何を思うのか。
この作品はオリ主最強主義ですので、苦手な人はスルーして下さい。
作者は小説初心者ですのでアドバンスなんかもらえると嬉しいです

第0話

～ＰＲＯＬＯＧＵＥ～

とある世界「魔界」と呼ばれる場所で二人の男が対峙していた。
共に魔界を二分する勢力の頂点、
「魔王」と「覇王」。
二人は元は一つの存在であったが有り余る力を押さえるためにその魂を二つに分けた。
「覇王」は破壊衝動が強い変わりにたしかな感情があり、
「魔王」は破壊衝動が無い変わりに喜怒哀楽といった感情がわからない。
強大な力を持つ二人は‘力こそが正義’それだけがルールである魔界において、その力によって頂点に君臨し、一時の平和を築いた。
だが、今対峙しているこの兄弟とも言える二人を包む空気はとても穏やかとは言い難かった……
「覇王よ、なぜだ、なぜ今になってこんなことを‥」
永い沈黙のあと零れた言葉
「俺にはもう時間が無い、方法もな‥」
もう言葉は必要ないと言うかのように
「そうか‥」
動き始めたのは二人同時、響くのはぶつかりあう〈破壊〉と〈破壊〉頂上同士の〈力〉と〈力〉この空間には二人だけその他全てが形を保てず崩れていく。
その戦いは一瞬とも一分とも思え、一時間とも一日とも、あるいはもっとかもしれない。
だが全ての物に終わりがあるようにこの戦いにも終わりが訪れた。
「これで、終わりだ…！」
覇王は迫る強大な魔力を見て
「ありがとう、あとは頼む」

言葉を残し魔力にのまれていった
立っているのはただ一人
「なぜ、なぜなんだ…」
魔王は覇王の残した言葉の意味を理解出来ず、虚空に向けて呟いた。
その後覇王の領地は覇王の部下により安定を取り戻し、魔界はもとの平和な姿に戻った。
ただ、魔王の心と体に傷を残して。
覇王との戦いから一ヶ月ほどたった頃、魔王の部下の一人である魔将軍デュランが反旗を翻した、
「覇王との戦いで傷付いている今、貴方を葬り、私が魔界の王となる！」
野心をむき出しにしたデュラン、傷付いた今は部が悪いと悟った魔王は魔の立ち入れない結界をはり、しのいでいた。
「この結界が厄介ですね・・・」
デュランも想像以上に強力な結界に阻まれ手を出せずにいた。
「！いい事を思い付きました」
デュランは人間ならば結界の中に入れると考え部下に命じて王国の姫をさらわせて勇者をおびき出し、魔王と戦わせる作戦に出た。
- - - - - - - - - - - - - - - -
魔王は考えていた、覇王は何に礼をいい、なぜあんな行動に出たのか、なぜデュランは平和を壊そうとするのか、答えの出ない自問自答を繰り返しているとき
「お前が魔王だな！姫を返して貰うぞ！」
声のした方を見ると聖剣らしき剣を持った青年と後ろに三人、あわせて四人が立っていた。
それを見た魔王はデュランの仕業だと言う事、戦いは避けられないだろう事を悟ると
「：来い、相手をしてやる」
激しい攻防の後、とうとう魔王は聖剣に切裂かれ力尽きてしまう
「人間の皆さんご苦労様でした、お陰で邪魔な魔王を始末出来たよ

うです」
現われたデュラン
「お礼に貴方達を葬って差し上げます」
勇者達に攻撃を始めるデュラン、聖剣があるとはいえその差は歴然、
瀕死の魔王は戦うデュランの姿を見てある事にきずく〈操られている〉と、
「‥そういう事か、覇王よ」
そして
「これで終わりにしてあげます」
絶望的な魔力が勇者達に迫った時
「俺が押さえている間に奴を倒せ！」
デュランの攻撃を魔王が受け止めた
「なに！？死に損ないめ！！」
一瞬のスキを突いた勇者キックーの聖剣がデュランを切裂き打倒す
事に成功した。

そして魔王は光にのまれて姿を消した……

イヤー小説って大変ですね（泣
次こそリリカルしたいです！
誤字、脱字、分かりずらい表現、こうした方がいいというアドバンス、感想なんかあると嬉しいです！
初めての作品ですけど完結に向けて頑張りたいと思います！

第０話（後書き）

頑張りますので指摘、アドバンスなどありましたら遠慮せずお願いします

第1話～出会いは必然～

魔王は光にのまれながら覇王の残した言葉を思い、呟いた
「：ようやく少しわかったと思ったんだがな」
魔王には喜怒哀楽が分からなかった、だが今は少し違う。
唯一の兄弟との死別、長年共に戦ってきた部下の裏切り。それらは魔王の心に傷を負わせた、きっとこれが〔哀しみ〕
そして、その両方のきっかけを作ったであろう何者かに対する思い、きっとこれが〔怒り〕
だがもう手遅れ、何を想ったとしてもこの状況は覆らない。
「：頼むと言われたんだがな、スマン」
約束は守れそうに無いと呟き、勇者がデュランを切裂くのを見て
「：ここまでか」
魔王はこの世界から姿を消した。

空は暗く、数多もの星が輝いていた。そしてここに空を見上げる少女が一人、少女は足が悪いのか車椅子に乗っていた。立派な家だが少女以外に人はいない、何処かに出かけているのでは無く、少女が幼い時に無くしていたのである。家をよく見ると車椅子でも生活しやすいようにバリアフリー住宅となっている、少女は相当前から足を悪くしているらしい。見た目は１０歳くらい、こんなに幼い子供がたった一人で生活しているのは信じがたい事である。財産の管理は父の友人を名乗る人がやってくれていて、資金については心配は無かった。
だが、やはりひとりぼっちは寂しいのか少女の顔は暗い…
「ハァ～」
もう何度目か分からないほど溜め息を付いている自分が嫌になり、また溜め息を付いた。
「ハァ～やっぱり一人は寂しいもんやな：」

呟いた言葉は少女の本心。それも仕方の無い事少女はまだ9歳なのである。泣かないのは泣いたらもっと辛くなるから、ネガティブな考えを振り払うかのように少女は再び空を見上げた。星を見て少し落ち着いた少女は、それ、を見つけた

「あっ流れ星や！」

願い事をすれば願いがかなうと言われている流れ星を見て少女は

「ど、どないしよ」

迷いは一瞬

「そうや！かっ家族が欲しい！！」

紡がれた言葉、現実的では無い。故の願い。

「ちょっと無理な願いやったかな？」

冷静さを取り戻した少女が見たものは自分向い迫りくる、流れ星、

「なっ、なんでやーーー！！」

流れ星は叫ぶ少女の上をいき、家にぶつかった

ドゴォ！！

大きな音と共に何かが家に落ちてきた。

少女が何かが落ちた部屋に行くとそこには自分と同じ位の少年が倒れていた。

「なっ、なんや！もしかして、願いが叶ったんか！」

少女はパニック状態の頭で先程の願いを思い出した

「――――う…こ、ここは？」

少年に意識があった事にきずいた少女はパニックと現実逃避から抜けだし、少年を抱き起こした。

「大丈夫ですか！」

「だ、誰だ…」

「私ははやてっていいます。それより喋らんといて！今人呼ぶから！」

そう言い、少女、はやて、は救急車を呼ぶか、警察を呼ぶか迷った後、自分の担当の石田先生に連絡した。

「自分の名前とかいえる？」

石田先生に余り動かさない方がいいと指示されたはやてはとりあえず名前を聞いてみた。

「――オレ…は、マ…オ――」

少年ははやての質問に答えようとして、意識を手放した。

第2話～決定は必然～

男は夢を見ていた。
光にのまれた自分。そしてその光の中でオレに微笑む‘ダレカ’
オレはその‘ダレカ’を知っている筈だった、だけど分からない、
思い出せない。そんなもどかしさを感じている時その‘ダレカ’は
微笑ながら呟いた…
「お前は、生きろ・・」
優しく、けれども力強く呟いた‘ダレカ’は手に刀を持っていた。
オレはその刀に見とれていた。曇りの無い刃は見ているだけで切ら
れてしまうと錯覚させ、纏う〈気〉はオレを安心させる。
そしてその‘ダレカ’は刀を振るい光を切裂いた。
「俺はお前と共にある」
言葉を残し、‘ダレカ’は消えた…

ここは病院の一室。この部屋には今、二人の子供がいた。一人は少
年、一人は少女。少年はベットの中で寝ていて、少女はその隣りで
車椅子に乗っていた。
少女の名は“八神はやて”彼女は昨晩流れ星のように空から降って
きた少年を病院に連れて行ってもらったあと、病院で眠り、朝一番
で少年の様子をみにきていた。
「昨日は暗くてよく見えへんかったけど、綺麗な顔やな～」
「髪もサラサラやし・・」
はやては少年の黒い髪を撫でながら呟いた。
しばらく見つめていると何だか恥ずかしくなってきたはやては少年
の髪を撫でていた事に気付き
「こっ、これは違うんや／／手が勝手に！」
と、一人でうろたえ始めた。

「此所は…？」

オレが目を覚ました場所はやけに綺麗な部屋だった。部屋を見渡そうと横を向いたら、隣りには一人身悶えている少女がいた。
「：どうした：」
取り敢えずここがどこなのか、なぜここにいるのかという疑問より隣りの少女が気になったので声をかけてみた。
「あっ！気がついたんやね！どこか痛いところとかあらへん？」
少女はさっきまでとは打って変わって元気に声をかけてきた。
「：ああ、問題ない。：ところで、此所は何処でお前は誰だ」
少女の笑顔を見て悪い人間では無いと判断して、質問してみた。
「私の名前は“八神はやて”、ほんでここは鳴海大学病院の病室や」
案の定丁寧に説明してくれたが分からない事が多すぎる。
「：八神、ここは地上なのか？」
八神は少し不満そうな顔をしたがオレの質問について答えた
「地上？確かに地上といえば地上やけど…ここは日本やよ」
：聞いた事が無いな、
「：そういえば八g「は？や？て！」……はやて」
いきなり言葉を遮られたと思ったら何か得体の知れないオーラを纏ったはやてが名前を強調してきた。
気迫に圧倒されたオレは逆らえないと感じ取り、名前を呼んでみた。するとはやては満面の笑みを浮かべうなずいた。……どうやら名前で呼ばれなかったのが不服だったらしい…。
「オレはなぜここにいるんだ？」
先程言おうとした質問をしてみた。すると、とんでもない返答が返ってきた
「昨日いきなり空から降ってきたんよ」
…どうやらオレは空からはやての家に落ちて、意識を失い、この病院に運ばれたらしい。

そしてオレは気付いた…
「‥オレは‥誰だ…？」
そう、記憶が無いのだ。
「え！記憶がないん！？」
「‥いや、元いた世界の事は覚えているんだが…自分の事が何一つ分からない…」
「えっ、でも昨日名前聞いたら“マオ”って名乗ってたで？」
「‥‥昨日の事も覚えて無いんだ」
「あっ、そうか‥じゃあマオって呼んでもええ？」
‥マオか、何故か懐かしい響きな気がする‥きっとこの名前であっているんだろう。
「‥ああ、そう呼んでもらって構わない」
「うん♪じゃあマオって呼ぶな♪」
‥‥‥なんか、笑顔が眩しいな‥
「ところでマオ、聞いてええ？元いた世界ってどういう意味？」
‥話してもいいか
「‥恐らくオレは別の世界からきたのかもしれない」
‥この部屋もみた事が無いものばかりだ
「‥オレの世界はここまで発達していなかったからな」
「じゃあマオはこの後行き先どうするん？石田先生は今日中に退院出来るっていうてたけど」
‥さて、どうするか‥見知らぬ場所で記憶喪失、八方塞がりだ‥
オレが今後について考え、俯いていると、
「もしかして、行くあてないんか？」
‥‥‥‥‥‥痛いところをついてくるな、はやては…
「‥‥‥ああ」
オレが頷くとはやては顔をさらに明るくして提案してきた
「じゃあ、私と一緒にくらさへん！！」
‥この子は…
「‥もう少し考えてから言うんだな…初対面でしかも得体の知れな

いオレなｎ「ストップ！！」……またか」
「マオなら大丈夫や！それに困ってる人は助けなあかんよ？」
……はやては優しすぎるな…まあいいか。
「…わかった。…ありがとう…はやて」
…あんな顔されたらな…
「決定♪これからよろしゅーな！マオ！」

第３話～喜びは必然～

はやては今とても上機嫌だった。
それもその筈である、
なぜなら彼女に、
新しい家族ができたのだから…
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
彼女は幼い頃に両親を失ってしまっていた。
故に今まで一人で生活してきた。
病院にくれば検査はおっくうだが、石田先生にあえ、それなりに楽しい時間になる。
だが、やはり基本はいつも一人なのである。
さらに、足を悪くしているため、小学校も休学している。
まだ幼い彼女には家族も友達もいないという状況は耐え切れない筈である。
はやてを心配する人間は石田先生を含め何人もいる。彼女らは、はやての足を早く治してあげようと検査を繰り返すが、一向に足は良くならない。
そしてはやてが不安がらないようにと、なるべく自然に振る舞う。
それを知ってか知らずか、はやてはいつも笑顔でいた。
周りの人に安心してもらう為に、私は大丈夫だと思ってもらえるように。
悲しみは自分の胸にしまい、他人の笑顔の為に彼女は明るく振る舞う――――
そしてその笑顔は、確かに医師達の励みとなっていた――――――――――
はやては辛い時、
いつも夜の星空を眺めていた。
夜空を見ていると、まるで夜の闇が不安を拭ってくれるかのような、

輝く星が自分を励ましてくれるかのような、何ともいえない不思議な感じがして、とても安心するのである。
そしてある夜、少女に贈られた夜空からのプレゼント。
流れ星に願いを託し、有り得ない事を夢想して、そして現実に戻った時に、音と共にそれはやってきた。
なんと、少年が降ってきたのだ。
それは悲しみを耐える彼女への励ましか、はたまた只のイタズラか。
理由も経緯もどうでもいいのだろう、なぜならこれはきっと《運命》なのだから。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「‥どうした？なぜそんなに上機嫌なんだ？」
オレが共に暮らす事を了承した途端、はやては今まで以上の笑顔を向けてきた。
「だって、家族ができたんやもん！嬉しすぎて泣いちゃいそうや！」
そう言ったあとはやては少し表情を暗くして、呟いた‥
「‥‥私‥今までずっと一人やったから‥」
いい終わるとはやては少し俯いてしまった。
（‥‥‥‥？）
最後の方は声が小さくなっていたが、確かに聞こえた。
「‥一人？」
普通、子供には二人の親がいるはずだ、ならば一人という事はまずありえ無い。
だがはやては一人といった‥つまり‥
「うん‥お父さんとお母さんは、私が小さい時に‥‥」
（‥‥‥‥）
「‥そうか」
（‥地雷を踏んでしまったらしいな‥）
（‥‥どうするか‥）
オレがなんと言葉をかけるべきか少し悩んでいると
「でも、もう大丈夫や！‥‥マオが‥一緒にいてくれるんやろ？」

はやては先程までの重い空気を振り払うかのように上目遣いで聞いてきた。その瞳の奥には微かな不安が見え隠れしている。
だから…オレは…
「‥ああ、ずっと一緒にいてやる」
自然とそんな言葉がもれていた。しかも、自分でも驚く程優しい声……
だが悪い気はしていない、
‥何故かこの少女を守りたいと思ったんだ。
‥一体なぜだろうか？
すると、
「／／ほっ、ホンマか？ずっ、ずっと一緒にいてくれるんか？」
顔を真っ赤にしたはやてが身をのりだして聞いてきた。どうやら‘ずっと’という単語に反応したらしい。‥考えてみるとずっとは言い過ぎたかもしれない。だが、今さら訂正はきかなそうだった。
まあ、いいか‥‥。
それにしても
‥‥はやては時折、得体の知れないオーラを放つな‥
「‥はやて、顔が近い‥‥」
とりあえず今にも衝突しそうなくらい顔を近付けているはやてに声をかけてみると、
「はわっ、はわわわ／／こっ、これは、ちっ、ちがうんや／／」
‥素早くて身を引いたかと思えば、手をぶんぶんと振りながら何かを否定していた。
‥‥なんだ？
「‥大丈夫か？」
はたから見ると余り大丈夫そうではないが‥
はやてはだいぶうろたえていたが、しばらくすると落ち着きを取り戻したようだった。
「だっ、大丈夫や、嬉しくってついな／／」
まだ顔は紅いが呼吸を整えながらはやては答えた。

……

「……嬉しい……か……」

「……嬉しい……か……」

マオは少し表情を暗くして呟いた。

どうしたんやろか？

変化は少しだったけど気になった私は聞いてみる事にした。

「どうしたん？」

私はマオの言葉を聞いてビックリした。

「‥嬉しいっていうのが‥よく分からないんだ‥」

「なっ、なんやて！？」

（記憶が欠けているっていうのは聞いていたけど…まさか、嬉しさが分からんなんて…そんな事ってあるんやな～……ハッ！こんなこと考えとる場合や無い！

なにか言うて元気付けてあげなあかん！……う～～ん…う～～ん……そうや！）

「なら、私が教えてあげる！！ずっと一緒にいるんやから、時間はたっぷりあるしな♪」

（我ながらナイスアイディアや！でも、どうやって教えてあげればいいんやろか？）

「‥そうだな」

（あれ？なんか反応が薄いな……？）

普通、自分の知らない事を教えて貰えることになったら少し喜ぶ筈である。

（もう少しくらい喜んでもいいと思うのに‥）

思ったより反応が薄かった事に少しへこんでいたが、マオの言った言葉を思い出して、

嬉しさが分からないということが、【喜び】が分からないということと同じなんだと気付きある決意をした。

（うーん。よく分からないけど、とりあえず喜ばせてあげればいいんやな！
なら、絶対マオのことを喜ばして
‘嬉しい’っていうのがどんな物か教えてあげるんや！！）
コンコン…
私がマオを喜ばしてあげるという決意を固めていた時、ドアから石田先生が入ってきた。
その後、石田先生にマオが記憶を失っている事、家族も行く宛も無い事、私と一緒に暮らしてくれると言ってくれたこと、
あと、嬉しさが分からないっていっていた事を説明した。
石田先生は私とマオが一緒に暮らすという事についてしばらく考えていたが、マオが説得した結果なんとか了承してくれた。
説明が終わったあとはずっとマオの検査をやっていた。
少し頭を打っていたみたいだけど特に異常はという事だった。
嬉しさが分からないって事を説明してあったので、身体検査の他にも感情についての検査もやっていた。
マオが簡単に説明してくれた検査結果は、どうやら頭を打ったショックで一時的に【喜怒哀楽】が分からなくなってしまったらしい。
だけどきっかけがあれば思い出せるかもしれないともいっていた。
そしてマオに改めて教えてくれと頼まれた。もともと私もそのつもりだったので、モチロンＯＫした。
検査も終わり、今日はもう帰っても大丈夫だよと石田先生に言われて帰る準備をしていたとき、
ちょっとしたトラブルが起きた。
…マオが着る服が無いのだ。
マオが元々着ていた服があるのだが、それはとても普通の町を歩くには向いていなかった。なんせ割りと地味だが一目で住む世界が違うと思わせる、つまり普通では無い服だったのだ。
結果、病院着のまま石田先生に車で送って貰い、なんとか家に着いたのであった。

「マオ、家に帰ってきたら‘ただいま’っていうんよ」
先に家に上がった私は玄関にいる‘新しい家族’に教えてあげた
「…ただいま」
「うん♪お帰りなさい！」

オレがはやてと暮らし始めてから、早くも一週間がたった。
はやてはオレに挨拶の仕方や常識など、知っている事を丁寧に教えてくれた。まだはやて自身が子供という事もあって知識の量や理解が及ばない所も多々あり、そういった所は石田先生に教えて貰っていた
そしてオレが今いるこの場所は図書館というらしい。
オレはココがとても気に入っていた。
静かで、ここにいる人達は皆、読書に集中している。
そしてなにより、この膨大な本の数々。
はやてや石田先生に文字の読み書きは教えて貰っていたので、その範囲で読める物から読んでいき、さらに知識を増やしていった。
…今ではもう一般常識やこの国の歴史、その他様々な知識を有している。
そして次に何を読もうかと本を眺めていたらはやてがやってきた。
「マオ～、もう少しで閉館時間やからもう帰ろ？」
いつの間にかそんな時間になっていたのかと思いながらオレははやてと図書館を後にした。
「今日の晩ご飯は何がいい？」
（‥こういう場合は、何でもいいと答えるよりも、こちらの明確な意思を、相手の可能な範囲で伝えるのが良かった筈。つまり‥）
「‥オレはハンバーグがいい‥」
オレは昼頃テレビで見た、ケ〇タロウの男子ごはんの事を思い出して答えた。
「わかった！じゃあ材料を買いにスーパーにいこか！」
そしてオレははやての乗る車椅子を押してスーパーに向かった。

スーパーには何度か来たが、やはり慣れない。
人が沢山いて賑やかだし、至る所に大安売りだの特売品だのと書いてあって、何がどの位安いのか良く分からない。
だがはやてはなれた様子で食材を選んで行く。やはり経験が違うと思わされたその時、‘それ’はオレの視線を釘付けにした――――――――――
私が食材を選んでいた時、後ろで車椅子を押してくれていたマオが動かなくなったので、どうしたのかと思って振り返ってみると、マオは何かを見つめていた。
なにを見ているのか確かめるため、目線を追ってみると…
〔大特価！！リンゴ大安売り！！〕
そこには真っ赤なリンゴが山積みにされていた。
（もしかして…）
ある事に気付いた私は未だに止まっているマオに聞いてみた
「リンゴ買って行く？」
――――――――――――――――――――
はやての声で我に帰ったオレはリンゴも一緒に買って貰い、家に帰った。
家に帰ったオレ達は一緒に夕飯の支度をした。オレも食材を切るくらいは出来る様になったのだ。
はやての料理はとても美味しい。
はやてが言うには、この‘美味しい’も‘嬉しい’と同じ様に【喜び】の一種なのだそうだ。
そしてリンゴを買って貰った時の感情…あれがまさしく【喜び】というものらしい。
（…もう少しで分かる気がする…）
そうこう考えているうちにハンバーグは出来上がり、オレ達は食事を始めた。
「「いただきます」」
このいただきます、ご馳走さま、おはよう、おやすみ、行って来ま

す、お帰りなさい、などの挨拶は欠かさず行っている。
恐らく今まで出来なかった‘当たり前’が出来るのが‘嬉しい’の
だろうと、最近になって思える様になった。
【喜び】を理解出来る日は遠くは無いだろう…
「「ご馳走さまでした」」
食後にはやてが例のリンゴを出してくれた。
オレの有する知識に依るとあれは‘兎さんカット’つまり皮を耳に
みたててVの字に残して置く切り方である。
食べるのをためらいさせるその形に戸惑いながらも、オレは一口……
こっこれは……！

————————————————

私が切ったウサギさんリンゴをマオは少しためらいながらも一口食
べた。
ウサギさんの形を前に食べるのをためらうというマオの優しさを発
見した後マオに異変が起きた。
そう、いつも無表情のマオが、リンゴを食べた途端に悲しい表情を
浮かべて涙を流していたのである。
「どっ、どーしたんや！？なんで泣いているん？」
私は少し慌てて泣いている理由を尋ねてみた。
（一体どうしたんやろか…やっぱりウサギさんの形はまずかったん
やろか）
私が的外れな事を考えていると
「…いや、何でもない…少し…少しだけだが…
記憶が戻ったらしい…」
マオは少し記憶を取り戻したらしい。
それはとても良い事なんだけど…なぜ泣いているのかという質問に
対する答えにはなっていなかった。
だから、なぜ泣いているのかもう一度聞こうとした時、マオが話し
出した————————————————

「‥この、リンゴという食べ物は、オレのよく知っている奴の好物だったんだ…」
記憶の中のそいつは、赤いリンゴを食べ、オレに笑顔を向けてくる…
「‥そいつが誰なのかは思い出せないけど、いつも笑顔でリンゴを食べていたのを覚えている…」
オレはそいつに、なぜ笑っているのかと尋ねた。
そして、そいつは笑顔のままオレにこう言った…
『お前にも、きっと解る日がくるよ』
そいつは、そう言ってオレにリンゴを投げ渡して来た…
「なぜそいつが笑っているのか、その時のオレは分からなかった…」
その時のオレはそいつの笑顔を見ても何も思う事はなく、オレが理解出来る日なんて来ないだろうと思っていた…
「だけど、今なら解る…」
これが、嬉しいっていうこと…
これが、美味しいという事…
‥これが、【喜び】という感情…
「‥これが、喜びという物なんだな…
はやてのお陰でオレも知る事が出来た…」
この事を記憶の中のそいつが知ったら、きっと自分の事の様に喜ぶんだろうな…
「ありがとう、はやて」
‥きっとオレは今、‘笑って’いるんだろう…

私は、マオの笑みに見とれてしまっていた。

マオが記憶を少し取り戻した事、喜びが分かったという事、お礼をいってくれた事、

私が喜ぶ理由として十分な物は幾つもあった筈。
だけど私の時間は、マオの小さな笑みをみた途端に、文字どうり〝止まって〟しまったのだ。
頭の中は真っ白くて、心臓は止まっているのではないかと錯覚するほど。
瞳にはマオの微笑(ほほえみ)、開いた口は塞がらない。
一瞬か、一分か、それとももっとか、時間は止まっているため分からない。
これは現実では無く、夢の中の出来事なのではないかと思う程。
だけど、やっぱりこれは〝現実〟だった
「…どうしたんだ？はやて」
聞こえて来たのは心配する様な家族の声。
それを聞き、ようやく時間が動き出した…
「なっ、なんでもあらへん！気にせんといて／／」
顔が熱い、きっと自分は今真っ赤になっているんだろう。
それを隠すかの様に言葉を続けた
「それにしてもマオの記憶が戻って私も嬉しい！
もしかしたら、感情を知る事が記憶に繋がってるんや無いか？」
少し落ち着いた私は思った事を言ってみた。
「…ああ、恐らくそうなんだろう。あとは、今回のリンゴの様に何かきっかけがあると思うんだ」
胸がドキドキしているがさっきよりはましになっている
マオはいつものほぼ無表情に戻っていた
「…まあ、焦る理由も無いしな…その内解る日が来るだろう」
その後は二人でリンゴを半分ずつ食べてから、しばらくお話しをした後、考えを整理するため早めに寝る事になった。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
（ハァ〜、それにしても、あの顔は反則やで…まだ胸がドキドキしてるし、何より頭からあの顔が離れない〜／／
でも、マオの記憶が少しでも戻って良かった…マオの笑顔はまた見

たいけど、あの悲しそうな顔はもう??)

――――――――――――――――――――

…オレが取り戻した記憶の断片。
共に戦うオレとダレカ、そして最期には言葉を残して倒れるそのダレカ。
それがダレでなんて言っていたかは分からない。
だがその内解るだろう…
それよりも問題なのは、オレ中にあるこの普通では無い‘力’だ。
記憶の中のオレは確かにナニカと戦っていた。
(明日はこの力の確認なんかをするか…)
いろいろ考え込んでいたが、明日の方針を決めた途端、強烈な睡魔が襲って来たので
オレは意識を手放して眠りについた。

話を長くするのがとても難しいです(泣
多分次はヴォルケンリッターが出る筈です!

第４話～起動は必然～

はやてと暮らす様になってから、
もう一月程の時間が経過した。
この一ヵ月はとても穏やかで、とても平和だった――――――
朝７時、オレはいつも
この位の時間に起きている。
最初の頃は朝が苦手で、９時、１０時にならないとまったく起き上がる事が出来なかったが
毎朝はやての‘ステキ’なモーニングコールにより起こされていたため、
多少頭は回らなくなるのだが、この時間に起きるしかなかった。
オレは寝る時に着ているはやてと色違いのパジャマを脱ぎ、黒いズボンに白いシャツの普段着に着替えた。
この服はオレが病院で目覚めた日の翌日に、はやてと一緒に洋服屋に行って選んだ物だ。
…ちなみにその買い物に行く時に着た服ははやての服で、オレが着ても問題ない物だ。
まあ、お互いまだ子供だから特に問題になる筈も無いがな
いつもはこの上に青い上着を着ているのだが、今は必要ないだろう。
「…おはよう、はやて」
着替えを終えたオレは自室として使っている部屋をあとにして、はやてに朝の挨拶をした。
「おはよう、マオ。今日もちゃんと起きれたみたいやな」
はやてがオレに気付きき、挨拶を返してきた
「…まあ、毎朝あんな起こされ方をされたらな」
余り思い出したくは無いが、
はやてはオレが朝余りにも起きないので、様々な手でオレを目覚めさせてきた。

中には「反応が面白い」とのことで遊ばれた覚えもある
「それは、マオが起きないのが悪いんやで。
でも、マオは朝のあいだ少しおバカさんになるから面白くてな～」
・・そうオレは9時頃までのあいだ、頭がしっかりと目覚めていないので、少しでも複雑な思考が出来なくなるのだ
「マオ～、１０×１０は？」
……
「・・・はやて、朝食にしよう」
・・・じゅうがじゅっこだから……あれ？
「あれ～、答えは～？」
……
「・余りからかわないでくれ・」
はやては笑いながら謝っている。懲りていないのは目に見えているが、まあいいか・・
その後は二人で朝ご飯を作った。
ちなみにメニューは、ご飯にワカメと豆腐の味噌汁、目玉焼きとホウレン草のおひたしだ。
「「いただきます」」
朝食はパンかご飯かと聞かれれば、どちらかと言うとご飯がいい。
だが、パンにつけるジャム、あれはとても美味しい
「「ご馳走さまでした」」
食べ終わった後ははやてが洗い物をして、オレは洗濯をした。
今日は午後から検査があるので、いつもより早めに終わらせようと思い、洗濯機を回した。
洗濯機を回している間に庭に移動して、日課となっている軽い運動を始めた。
これを始めたのは、オレの記憶が少し戻った日、つまり〔リンゴ記念日〕と呼ばれる様になったあの日の翌日からだ。
取り戻した記憶の中にあった、戦うオレの姿。
なぜオレにこんな力があるのかは分からないが、

いつかこの力が必要になってくる
それは所詮，なんとなく，であり、思い過ごしにほかならない可能性も高い。
だが、はやての足に纏わりつく様に感じる、禍々しいナニか。
そしてそのナニかは、少しずつだが、その範囲を増やし、はやての足を蝕んでいっている
それがオレの不安を掻き立てるが、今のオレにはそれを止める術がないのも事実。
だが、どうしようも無いと諦める事は出来ない。だからオレはこの力を使い、はやてを助けられるかもしれないという可能性に賭け、腕を磨く。

鍛練と洗濯が終わった頃には既に１０時を回っていた。
少し鍛練に熱が入りすぎたなと考えていた時、オレはある事を思い出した。
「：はやて、１３×１３は？」
そう、朝の仕返しだ
完全に不意打ちが決まったようだ。
うろたえているはやてを尻目に、カウントを始める
「５、４、３、２、１、０
：時間切れだ。答えは１６９：
あと、１０×１０は１００だ」
ちょっとスッキリした気がする。これではやてが懲りてくれれば良いんだが、恐らく明日の朝、更なる仕返しが来るのだろう…
そしてオレ達は検査を受けるため、病院に向かった。
―――――――――――――――――――――
「じゃあ、検査受けて来るからちょっと待っててな」
はやてはこちらに手を振りながら病室に入っていった。
オレがはやての検査が終わるまでの間の暇潰しにと思い持ってきた本を読んでいた時、突然声を掛けられた。

「マオ君。こんにちは」
名前を呼ばれたので誰かと思い、顔を上げたらそこには石田先生がいた。
「：こんにちは、石田先生。はやての検査はもう終わったんですか？」
はやての主治医がここにいるという事は、検査が終わったのかと思い、聞いてみた。
「今日はいつもと違う検査をしていて、私は担当じゃないからマオ君とお話をしにきたのよ。
それで、あれから記憶は戻った？」
石田先生は何かとオレの事も心配してくれている。
「：いや、あれ以来変化は無いです。でも、はやてがいるから大丈夫です。」
　オレは記憶なんて戻らなくてもいいと思っている。
オレはここではやてと穏やかに暮らしていければそれでいい、
だけど、いつか別れが来る。
これもまた、なんとなくだが、そう思うんだ？？？？
「ありがとう、マオ君。あなたが来てからはやてちゃん、まえより明るくなって、
なにより、足を治そうって前向きに考えるようになってくれたの。
本当は良くないんだろうけど、あなたがはやてちゃんと一緒にいてくれたお陰ではやてちゃんはいい方向に変わることが出来た。
本当に感謝してるわ」
石田先生によると、はやてはオレと出会う前までは足がもう治らないだろうと半分諦めていたらしい。
そしてオレと出会い、はやては変わった…
きっと変わったのは、はやてだけじゃなく、オレも変わっているのだろう。
はやて以外の人と話す機会も多くなってきたしな…
「：はやてが笑顔になるのなら、オレはいつまでもはやてのそばに

いる・・・ます・・」
やはり敬語というのは喋りズラい。
だがはやてが、年上の人には敬語を使わなければならないと言っていたので仕方なく使っている。
「ふふ、お願いね。
そうだ！明日はやてちゃんの誕生日でしょ？
だから明日三人でお食事に行きましょうって伝えておいてくれないかしら。」
？？？？？？？？？？？
「・・わかっ、・・わかりました。
ありがとうございます。きっとはやても喜びます」
はやての喜びはオレの喜び。
つまり、オレも嬉しいということだ。
オレの返答に石田先生も嬉しそうに微笑ながら
「お願いするわね。
じゃあ、私は次の診察があるからこれで失礼するわ。返事は明日の検診の時でいいからね」
〜〜〜〜〜〜〜〜
石田先生が去った後、しばらくオレは考え事をしていた。
・・明日ははやての誕生日だったのか。
たしかオレの読んだ小説などでは、誕生日にはなにか贈り物…プレゼントを渡すのが当たり前のようだったな。
プレゼントか…なにを渡せばいいんだろう
プレゼント、つまりはやてが喜ぶものだな。
〔喜ぶ＝笑顔になる〕と考えて良い筈だからな、はやてが笑顔の時はどんな時、か…
…ん？…おかしい。
オレの記憶の中のはやては、いつも笑顔でいる。
…常に喜んでいるのか？
…オレはまだまだ喜びについての理解が足りないらしい。

…誰かにきいてみるか。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
オレは誰に聞けば良いのかわからなかったので、少し歩いて見つけた、はやてと同い年位で金髪の、気の強そうな少女に聞いてみる事にした。
「‥おい、おま…君、少し聞きたいことがあるんだが」
最初から、お前、は不味いと思い、少し軟らかくして声を掛けた。
「いきなり、おい、とは失礼ね、あなた誰よ！」
…足りなかったらしい。しかも想像どうり気が強いようだ。
「…すまない、礼儀がなって無かったようだ。オレの名はマオだ」
取り敢えず謝った
「まあ、今回は大目に見て上げるわ。私の名前はアリサ？バニングよ、アリサでいいわ。」
オレが謝ると少女は少し機嫌を良くしたらしく、名前を教えてくれた
「‥わかった。アリサか、‥いい名前だな」
オレは先程のようにはなるまいと考え、そして素直にそう思ったこともあり、名前を褒めた。
「なっ、／／なに言ってるのよ！そっ、それより何か用があるんでしょ！聞いて上げるからさっさと言いなさいよ！」
顔を背けられてしまったが、また怒らせたのだろうか。
【怒り】はオレはまだ解らないので何とも言えないが、話は聞いてくれるらしい。
‥まあ、いいか
「‥じゃあ聞くが、家族に渡す誕生日プレゼントを何にすればいいか分からないでいるんだ。年はアリサと同じ位なんだが、なにをあげたらいいのだろうか？」
アリサは背けていた顔を戻し、真剣に考えてくれた。
「う〜ん、私は綺麗な物とか、何か形に残る物がいいと思うな。けど、一番大事なのは渡す人の気持ちだから余り深く考えすぎない方がいいわよ」

なるほど、綺麗で、形に残る物で、大事なのは渡す人の気持ち、つまりオレの気持ちか。…うん、なにを渡せばいいのか全然わからん。
「：アリサ、綺麗で形に残る物を渡そうと思うのだが、オレにはそれがなんなのか分からない。だから、出来ればでいいんだが一緒に選んでくれないか？」
オレは自分で考えても答えは出ないと踏み、アリサに助力を頼んだ。
「まあ、乗りかかった船だしね。いいわ、丁度お見舞いも終わって帰るところだったからマオに付き合ってあげる」
…助かった。アリサがいればいい物を選べるだろう。
その後、一度はやての様子を見に行ったところ、どうやら今日はまだまだ時間が掛かるようなので、そのままアリサとデパートに買い物に出掛けた。
「あっ、これなんていいんじゃない？」
それは、かわいいらしいペンダント、だが
「：無理だ。オレはこんなに出せるほど金を持っていない」
値段を見ると数字が5桁。
9歳で、しかも居候のこの身では、とてもそんな大金の持ち合わせがある筈も無く、別のを探す事にした。
そして、しばらく何にするか選んでいて、少しアリサと離れていた時…
「キャッ！？」
突然、黒いスーツの男達にアリサがさらわれていった。
後を追ったが追い付けず、男達はアリサを運送用トラックに連れ込んだ。
オレはなんとか追い付く事ができ、トラックの荷台の上で落ちないように俯せになり、はやてに渡されていた携帯電話で警察に連絡した。
トラックはしばらく走った後、廃工場のような場所に入っていった。
そして、男達に連れられてアリサが出てきた。
オレはこのまま警察が来るのを待とうかと考えたが、？？？やめた

あの気が強く、そして、優しさを持ち合わせたアリサが、
知らない男達に対する恐怖に震え、想像してしまう未来に怯え、声も出せずに……泣いていた。
それを見た次の瞬間、オレはアリサを掴まえていた男を蹴り飛ばしていた。
「‥大丈夫か？アリサ」
そしてオレは男達からアリサを庇うようにたった。アリサはまだ恐怖で喋れないようだ
「何しやがんだガキ！！」
オレは殴り掛かってくる男の腕を掴んで投げ飛ばした。…あと四人か、
オレが構えを取ると、
ガゥン！！
銃声と共に右腕から軽い痛みがし、血が流れる感覚がある。どうやら掠ったようだ。
「クソ餓鬼が、調子乗ってんじゃねえぞ！」
どうやら5人目がいたらしく、こちらに銃を向ける男が柱の陰から出てきた
銃口を向けられ、まさに絶対絶命の状況。
アリさは銃を見て青くなり、今にも気絶してしまいそうだ。
そしてオレはアリサを救うため、、力、を使う覚悟を決めた。
「ガキ、手を上げな」
オレはゆっくりと左腕を前に突出し、指を弾いた
――――――――――――――――
その後はアリサを安心させるために声を掛け、、動けない、男達を気絶させ、奴等の縄で縛り付けて後からきた警察に引き渡した。
警察には勝手に気絶したので縄で縛って置いたと説明した。
「‥アリサ、もう大丈夫だ。それにしてもアリサが中々のお嬢様だったとはな、それに容姿がいいのだから狙われるのも仕方ないな」
元気のないアリサを励ますため、少しどうでもいい事をいってみた。

「ありがと……助けてくれて…」
ようやく反応したようだ。あと少しで元に戻りそうだな
「‥アリサはかわいいらしいからな、またさらわれない様に気をつけろよ…」
「らしいってなによ！らしいって！！」
…どうやらいつものアリサに戻ったようだな
「でも、さらわれたら、またマオが助けてくれるんでしょ？／／」
アリサ上目遣いで聞いてくる
「‥いや、それは保障出来ないな」
…ていうか、またさらわれる気か？
「そこは嘘でも出来るって言いなさいよ…バカ」
何故かバカ呼ばわりされたが、
まあ、アリサが元気になったのでよしとしよう。
　辺りはすでに暗くなり初めていたのでオレは帰ろうとしたが、アリサがどうしてもお礼しなければ気がすまないといってきた。
すでにはやてに遅くなると伝えてあったため、オレはプレゼント選びの続きを頼んだ。
そしてオレはアリサが選んだ黒く透明なガラス玉の様な物が付いたネックレスを買った。（少し高かったが、足りない分はお礼との事でアリサが出してくれた）
「はいっ、これはマオの分よ」
渡されたのはプレゼント用に買った物の色違い、黒の変わりに白く透明なガラス玉の様な物が付いた物だった。「‥これでは、オレがもらいすぎになってしまうな」
選んでもらい、足りない分をだしてもらい、さらにこれでは何か悪い気がする
「埋め合わせはまた今度してくれればいいわ。それより家まで送っていって上げるからさっさと乗りなさい！」
また今度…か…。そうだな
「‥ああ、わかった。また今度必ず埋め合わせをするよ」

アリサに家まで送って貰い、別れを済ませたオレは、ようやくはやてのまつ我が家に帰る事が出来た。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
オレが帰ってから、はやてはずっと機嫌が悪かった。
やはり、心配をかけたからなのだろうか？
だが、オレにはこの状況を打破出来るカードがある。
今こそ、そのカードを切る時！
「：はやて、今日石田先生が明日三人で食事に行こうと言ってくれていたぞ」
――――――――――
その後のはやてはものすごく上機嫌になり、リンゴまでだしてくれた。
「明日楽しみやね」
時刻は既に夜の１０時、はやてはドキドキしていてどうにも寝付けないらしい。
「：早く寝ないと明日もたないぞ」
はやてに早く寝るよう促すと、自分も寝るために寝室に行こうとした。だがそれははやてに止められた
「なあ、マオ。：今日、一緒に寝てくれへん？」
そこにはやてのどんな思いがあるのか分からないが、オレを見るはやての様子から断る事は出来ないと、むしろ断る理由がないという事で了承した。
　はやての部屋に入ると、妙な違和感を感じた。
どこかに発信源がある筈だが、
：怪しい本があるくらいだ。
オレは念の為に元々身に着けていた普通ではない服装の一つ、はやてのタンスの中にしまわれたマントをそばに置いて置く事にした。
このマントの使い方は微かに覚えている。確か防御だとかサポートなどをしていた気がする。

「マオ、それどうするん？」
はやてが当然聞いてくる。
まあ、いきなりマントを出されたら気になるか…
「‥気にするな、それより早く寝よう」
……なんなんだあの怪しすぎる本は。
表紙は変だし、鎖がまいてある。
明らかにはやての趣味ではないだろう。
「‥あの本は一体なんなんだ？」
気になって眠れないのではやてに聞いてみた。
どうやら気付いた時にはあったらしい。
ますます怪しい
その後はやても眠れなかったらしいので、しばらくお話をしていた。
「‥そろそろ本当に寝よう」
既に１１時５９分。
いい加減寝ないといけないと思った時、異変が起きた
例の怪しい本が光出したのだ。
『闇の書の起動を確認しました』
光が収まると、そこには見知らぬ人間が四人いた。

バイト～♪学校～♪その他いろいろ～♪
書く暇がないよ～（泣
何故かアリサがでましたｗ
なんでだろう？

第5話～怒りは必然～

０：００
オレとはやてが寝ようとした時、
突然あの怪しい本が光出した。
本は光を発しながら浮遊し、こちらに近付いてくる。
「：一体なんなんだ」
本は空中で止まり、鼓動を始めたかと思えば、鎖が外れ、一人でにページを進めている。
オレはその奇妙な光景に唖然としてしまい、はやては微かに震えている。
そして、ページが終わり、十字架のついた表紙をこちらに向けている。
『封印を解除します』
声と共に本はさらに光を強くした。
そして…
『起動』
強い光を発した後、本の光は収まり、そこには見知らぬ四人がいた。
中央には、ピンクのポニーテールの女性、そして赤い髪の少女。
両横には、金髪の女性と白髪で筋肉質な男。
四人は皆、膝を付いていてこちらを見てはいない。
すると、中央のピンクの髪をポニーテールにしている女性が喋りだした。
「闇の書の起動を確認しました。
我らは闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッター。
主、なんなりとご命令を」
…守護騎士に主か、
主とは恐らくはやての事だろう。
そして守護騎士、つまりあの四人は、はやてを守る何かという事か

…。
マオは唖然としたのも一瞬、すぐに現状の確認のため頭を働かせた。
あのピンク髪の言葉や態度、そして四人から戦意や殺意が感じ取れないので、一応は敵ではないと判断した。
だが、ある事を見落としていた。
「マオ…」
そう、はやてだ。
はやては何が起きているのか分からず、オレの腕にしがみついて震えていた。
ひとまずあの四人は敵では無い様なので、はやてを安心させるために振り向いた時、鋭い殺気と共に剣が振り落ろされた。
「貴様、何者だ！我が主に何をするつもりだ！」
オレは反射的にマントで剣を受け止めたが、咄嗟の事だったので切り裂かれる事こそ無かったが、そこそこダメージをもらってしまった。
「‥いきなりなにをするんだ」

攻撃を仕掛けてきたのは例のピンクだった。
攻撃のためらいの無さ、太刀筋等から考えてかなりの場数を踏んできているのだろう。
その後ろでは他の三人もこちらを睨んでいる。
おそらく、あの三人もこのピンクと同じ程度の実力を持っているのだろう。
オレは奴等が敵だとは思っていないのだが、
こちらがどう判断しようと、向こうがオレを敵と判断してしまえば意味は無い。
…まあ、オレが疑われるのは無理も無いかもしれんがな。
どうにかオレは敵では無いと伝えたいのだが…
奴等を見ると、話し合いに応じてくれる雰囲気では無い。
はやてもさらに怯えてしまっているから説明なんてとても出来ない

だろう。どうしたものか…
「もう一度聞く、貴様は何者だ！」
一度オレから離れたピンクが聞いてくる。
「…まず、自分から名乗るのが礼儀なんじゃないか？」
オレも何か思う所があるらしい。
はやてを怯えさせるこいつらに対し、何かモヤモヤしたよく分からない感覚がある。
「私は烈火の将、シグナムだ！」
シグナムと名乗ったピンクはオレにも名乗れといいたげに睨んでくる。
「…マオだ」
名乗ったオレは、ここで戦闘になるのは不味いと思い、はやてを抱え、ひとまず逃げることにした。
窓から飛び出て、夜の町をはやてを抱えながら跳んだ。
屋根から屋根へと移動しながらはやてに、取り敢えず奴等ははやての味方だろう事、奴等がオレを敵と認識している事、奴等と戦う事になるだろう事と、現状を簡単に説明した。
すると、恐らく奴等の仕業だろうが、何か結界の様な物に閉じ込められた感覚がした。
「…ここから出るなよ」
はやての回りに守りの結界をはり、奴等を待つ事にした。
このあと話し合いで誤解を解く事も出来るだろう。
だが、オレはそれをする気が起きないのだ。
なぜだろう…
「我らから逃げられると思うな！」
四人がやってきたのを確認し、オレは構えをとった――――――――
――――――
私はシャマルの張った結界の中で主を連れ去った少年―マオを見つけた。
「我らから逃げられると思うな！」

主は何か結界の様な物に閉じ込められている。早くお助けしなければ！
「：来い」
どうやらマオは我らと戦う気らしい。
一人で我らを相手にしようなど、舐められた物だ…
「行くぞ！！」
私は強く踏み込み横薙に一閃。
だがこれは躱され、さらに連続で切り付けるが、ことごとく躱されてしまう。
「これでも食らえ！
シュワルベフリーゲン！」
私は一時離脱し、ヴィータの鉄球が三つマオに迫ったが、マオが指を弾いた途端に鉄球は停止し、落下していった。
「どうやら相当の使い手の様だな…ヴィータ、ザフィーラ、油断するなよ」
どうやら相手を舐めていたのはこちらだったようだ。
私は隙のない少年を見据え、再び剣を構えた――――――――――
　オレは奴等の攻撃に対し、回避と防御に専念した。
理由は、奴等の実力を知るため、実戦の雰囲気に慣れるため、そして何よりも奴等の攻撃が凄まじいために、攻められずにいるのだ。
奴等の実力は相当高い。
だからこそ…
「：何故、お前達はよく状況を観察しようとしなかった？」
許せなかった…
「なに！？」
はやての笑顔を奪ったこいつらが…
「：お前達が最初に現われた時、はやては…お前達の主は、オレの隣りで怯えていた」
…頭に記憶が流れてくる…
笑顔のたえない村人達が、活気に満ち溢れた村々が、

恐怖に、絶望に塗りつぶされて行く…
「…お前達は、はやてから笑顔を奪った…」
オレは…守れなかった…
オレに…力が無いから…
村も…人も…大切な物さえも……
だが…今は違う！
今のオレには力がある！
守る為の力が！！
だから、今度こそ…！！
「…オレは、お前達を許さない！！」
――――――――――――――――

あれは不味い。そう直感した。
「ヴィータ！ザフィーラ！一度距離をとるぞ」
マオの目が、赤く、光っている…
それになんなのだあの魔力量は…桁が違いすぎる！

「…ノーザンストライク」
マオの回りに現れた青白い塊が私達に向かって飛んできた。
「この程度！」
私達は向かって来るそれを躱し、破壊していった。
思ったよりも強い攻撃では無く、速さこそあるが所詮それまでだ。
脅威にはなりはしない…
再びマオを見ると、マオは左腕を前に突出し、指を弾いた。
「しまっ！？」
マオが指を弾いた途端、私達、は動けなくなってしまった。
そう、先程の攻撃は私達を一か所に集める為の囮だったのだ。
完全に油断してしまった。
一瞬見せた赤い目も、桁違いな魔力量も今は無い。
私は確かに彼を強大な敵として認識した筈だった…
だが心のどこかでは、どんな相手であろうと我ら四人が負ける筈が

無いと慢心してしまっていたらしい。
動く事も魔法を使う事もできないが、意識はあるのでマオを見ると、先程よりも強力な攻撃を放とうとしている所だった。
「：ノーザンインパクト」
先程の攻撃とは違い、一点集中の砲撃といった感じの攻撃が迫る。
「シグナム！！」
敗北を覚悟した私の前にシャマルが飛び込んできた。
シャマルは障壁をはるが、余り保たないだろう。
「あの技は恐らく凍結の魔力変換資質によって動きを止めている筈よ。
だから炎熱の魔力変換資質があるシグナムなら油断しなければ戦えるわ…」
言い終わると同時に障壁は砕け散り、攻撃を受けたシャマルは最後に私を動ける様にして、変わりに動かなくなった。
「シャマル、お前の思いは無駄にはしない…」
私は強大な敵である小さな少年を見据えた。
「レヴァンティン、カートリッジロード！」
「了解」
もう、油断も慢心もありはしない。
たとえ相手があのような少年だとしても！
「紫電一閃！」
私の攻撃に対し、マオは先程と同じ構えをとった。
「：ノーザンインパクト」
二人の攻撃がぶつかりあおうとした時…
「やめてーーーーー！！」
主の叫びが響き、私たちは共にすんでの所で攻撃を中断した。
「マオ、やり過ぎや、話しあわなわからへんよ？」
「：すまない」
「主！どういう事なのですか？」
どういう事だ？主はこの少年にさらわれたのではなかったのか？

「まあ、立ち話もなんだから、家に帰って話そ？マオ、あの三人は大丈夫？」
そうだ！ヴィータ、ザフィーラ、シャマルは！？
「：大丈夫だ。動きを止めただけだからな、もう動ける筈だ」
「そっか、じゃあ皆でお家に帰ろ？」
一体なにがどうなっているというのだ？
あの、マオという少年は敵では無かったのか？
様々な疑問が渦を巻いていたが、
無事で、しかも無傷だった仲間と共に主のご自宅にて説明を受ける事になった。

―――――――――――――――――――――

主の家についた後、私達は事の事情を説明してもらい、
まさに、穴があったら入りたい思いをした。
「つまり、マオは主はやての家族で、私達はそれを知らずに攻撃してしまったという事ですか？」
私達はしらなかったとはいえ、なんて事をしてしまったのだ。
よもや、主のご家族に手を上げてしまうとは…
「でも、それならそうと早く言ってくれればよかったじゃんか！」
ヴィータの言い分ももっともである。
最初から分かっていれば、あの様にはならなかった筈…
「：いきなり切りかかってくる奴が、話を大人しく聞くとは思えなくてな」
マオにいたい所を付かれてしまい、私達は何も言い返せなくなってしまった。
そう、最初に手を出したのは私なのだ…
よく考えれば、
あの状況で主を守るように構えていた少年が、敵である可能性はかなり低いだろう…
なんてことだ…
私が俯いていると主はやてが助け船を出してくれた。

「まあ、誤解が解けたんやから良かったやん。
それよりも、
あの、飛んだりしてたのは一体なんなん？」
その後、お心の広い主はやてに感謝しながら、魔法についての説明と闇の書の蒐集についての説明をした。――――――――――
「魔法があるってことはわかったんやけど、しゅーしゅーっていうのがイマイチよくわからへんのよ。マオはわかる？」
マオなら分かりやすく説明してくれると思い、聞いてみる事にした。
「……つまり、他人に迷惑をかけて願い事を叶えるか、このまま6人で仲良く暮らすかって事だろう。」
マオの説明は判りやすかったけど、いつもよりアバウトな気がする。もしかして…
「マオ、眠いんやろ？」
「：まあな」
案の定だった。私も眠いんやけどね。
「四人共、私はしゅーしゅーなんてのぞまへん。
ただ、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの四人が、私とマオの家族になってくれたらいいなーって思うんやけど。
どうやろか？」
四人は少しの間呆然としていたが、暫くすると私の言葉を理解したのか、笑顔で了承してくれた。
　その後は私の要望で、六人一緒に寝る為の布団を準備をしていたのだが、私はある事を思い出したので聞いてみた。
「そういえばさっきのマオ、
目が赤くなったのも驚いたんやけど、その後雰囲気が変わったように見えたんや。
もしかしてマオ、【怒って】たんか？」
そう、あの時マオが怒っている様に見えたのだ。
私の質問にシグナム達が？マークを浮かべていたので、マオについて簡単に説明した。

「‥わからない。
ただ、怯えているはやてを見て、なんだかモヤモヤした感じになったんだ。」

それってつまり、私の為に怒ってくれたって事やよね。
マオ、怒りの感情わからへんはずやのに…
私の為に…怒ってくれたんか…
なんだか照れちゃうな／／

「きっとそのモヤモヤが【怒り】なんやと思うよ？
シグナムはどう思う？」
私はなんだか恥ずかしくなってきたので、シグナムに話をふった。
「はい、マオは確かに怒っていたと思います。」
シグナムが申し訳なさそうに答えたのでムードが暗くなってしまうと思い、話の方向を少し変えた。
「誰かの為に怒れるっていうのは、とってもいいことなんよ。」

―――――――――――――――――――――

‥そうか。
あれが【怒り】なのか…
欠けているピースがまた一つ埋まった気がする…
「‥あれが怒りか、
‥良い物じゃないな。」
そう呟いたオレに、はやては笑顔で答えた。
「確かに良い物や無いかもしれへん。
けど、マオが私の為に怒ってくれて、私はとっても嬉しいんよ。」
‥誰かの為に、か…
「‥そういう物なのか」
「そういう物なんよ。」
「‥‥‥‥」

話もそこそこにし、俺達は仲良く眠りについた。

第６話～謝罪は必然～

はやての誕生日から数週間たったある日の事、赤い髪の少女は考え事をしていた。

ｓａｉｄヴィータ

今アタシは、庭で行われているマオとシグナムの稽古を眺めている。

いつの日からかシグナムが朝の６時頃にマオを叩き起こして、半ば無理矢理稽古の相手にしている。

シグナムはマオが朝に弱いのを知っていているけど、敢えて早朝に叩き起こして稽古している。

なんでも、

「マオは誘えばいつでも相手をしてくれるが、防ぐだけで全く攻めてこないんだ。

あの守りをどう崩すかもやりがいがあるが、やはり一方的に攻めるだけというのは性に合わない。

だが、寝ぼけている朝ならちゃんと攻めてくるんだ、やはり戦いは一進一退の攻防で無くてはな。」

なんていっていた。

マオを見ると、もう目を閉じているようにしか見えない。首も傾いている気がする。よくアレでシグナムと戦えるもんだ…

にしても、あんな１０歳位の子供がなんでシグナムと渡り合えるんだ？

型は守り重視って感じで、シグナムの普通の木刀に対して、２本の短めの木刀で対応している。

守りに関してはザフィーラが称賛するほどレベルの高い物だ。

記憶の無いマオに気を使って誰も聞かないけど、やっぱり気になるよな…

合って間もなかった頃、アタシはマオの事を信用していなかった。

もしかしたらマオは闇の書の力を狙う敵かもしれない、今はただ信

用を得る為に演義をしているだけなのかもしれないと、疑いの念があった為に他の三人のように上手く接する事が出来ずにいた。
むしろ、なんでシグナム達はこんな得体の知れない奴と一緒にいられるのかわからなかった。
だけど、そんな考えも直ぐに杞憂だとわかった。
マオは、いつもはやての事を第一に考え、なにより大切にしている。
アレが演技だなんてある筈が無い、心からそう思えた。
だからこそ分からない。
最初に戦った時に見せたあの眼…あれは幾つもの死線を越えた、多くの死を見て来た者の眼だ。
あんな小さな子供がしていい眼じゃない。アイツには絶対何かがある筈だ。
けど普段のマオを見るとそんな気配は微塵も無い。
やはりアタシが考えすぎなだけなのだろうか。
マオと上手く接する事が出来ない理由がもうひとつ。
初めてあった時、勘違いがあったとはいえアタシ達は、はやてを怯えさせてしまった。
そんなアタシ達をマオは絶対許さないとまで言っておいてなんであんなに優しくしてくれるのだろうか？

「ハァ…」
溜め息も何回目だろうか…
「どうしたんだ？ヴィータ
最近溜め息が多いようだが」
声がしたので顔を上げてみると、そこには軽く汗をかき、片手に木刀をもったシグナムがいた。
「もう稽古は終わったのか？」
「ああ、今日は主はやての検査の日だからな、早めに切上げたのだ。
それより、あまり暗い顔をして主を心配させるなよ」
そう言い残してシグナムはシャワーを浴びにいった。

…アタシ以外の三人はみんなマオと上手くやっている。
特に意外な事にもザフィーラがマオと気が合ったみたいだ。
まず八神家において同じ男性という所が大きいのだろう。
他にも寡黙な所とか、戦う時には守りが主流な所とか、なにかと共通点が多いい。
二人ともあんまし喋らないけどなにか通じ合ってるように思える。
マオはたしか念話とか出来ない筈だけど…
何を送受信しているんだろう…
最近ザフィーラはマオを見習って読書なんかしてるし…
だけどさらに驚いた事に、マオとシャマルが一緒に料理をすると、ギガをつけてもいいくらいに美味しくなるのだ。
二人別々に作ると、食べれるけど何か物足りない物と、口に入れた途端に目眩がする本当に食べ物なのか疑いたくなる物。の二つになるのだけど、
う～ん、マイマイはプラって奴なのか？
あとマオだけは何故かシャマルの料理？を食べれて、しかも美味しいとまでいっていた。
うん、アイツの味覚はどうかしてる。
シグナムなんてすっかりマオの事を気に入っちゃって、毎朝稽古をしているし…
そんなこんなでやっぱりアタシだけマオと上手くいっていないみたいだ。
マオの優しさが本物だろう事も、敵でも無ければ、演義をしている訳でもないという事はこの数週間でわかった。
だけど、今さらどうすれば良いのかアタシには分からなかった…。

ｓａｉｄはやて
ここ数日の間でヴィータの様子が変わった気がする。
最初の頃は明らかにマオの事を敵対視していたのだが、最近はそう

でもないようだ。
「なあ、シグナム。最近ヴィータが変わったと思わへん？」
私は朝ご飯のあと、病院に向かう準備をしながらシグナムに気になっていたヴィータのマオへの態度の変化の事を聞いてみた。
「はい、おそらくマオの事を認めてきているのだと思います。ただ、ヴィータは素直じゃない所がありますからね、大方マオとどう接すれば良いのかわからなくて戸惑っているのでしょう。
ですから時間が解決してくれると思いますよ。」
シグナムはそのうち仲良くなると言うが、やはり一家の主として少しでも早く仲良くなって貰いたいと思う。
だけど一体どうしたものか…
少し考えると良い案が思い浮かんだ。
「あっ、そうや！
二人で買い物でもすれば案外仲良くなって来るかもしれへんな。」
ちょうど色々買わなきゃいけない物が色々あったからな。
ちょっと心配やけどシグナムもいい考えだって言ってくれたし、マオならきっと大丈夫やろう。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ｓａｉｄヴィータ
なんでこうなるんだろう。
なんでアタシがマオと一緒に買い物に出掛けなきゃいけないのだろうか。
そりゃあマオと仲良くなりたいとは思ってはいるが、いくらなんでもいきなりすぎる。
だけど、さっきはやてに
「今日は検査が長くなるみたいやから、マオと一緒にお買い物に行ってきてくれへん？」
と、頼まれてしまった。正直、嫌だ。

でも、はやてのお願いだから断れないし…
ハァ…
また溜め息が出てしまったが、はやては気付いていないみたいだったのでホッとした。

「あれ、今日はいつもの奴付けて行かないの？」

今気付いたが今日はやてはいつも身に着けているネックレスをしていない。

なんでも誕生日にマオから貰ったプレゼントだとからしく、いつも忘れずに付けていたので、なんで付けていないのか気になって聞いたら、
今日の検査の時に外さなくちゃいけないらしく、無くしちゃいそうで怖いから。らしい
「じゃあヴィータ、メモはマオに渡してあるからお願いね？マオと喧嘩しちゃあかんよ？」

「わかってるよ…
いってらっしゃい、はやて」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ハァ、
はやてを見送ったあと、また溜め息を付いていた。
時刻はまだ９時３０分だ。
…今日は長い一日になりそうだ
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ｓａｉｄマオ
：オレは今ヴィータと共にはやてから頼まれた買い物にきている。
だが、何を買えばいいのかわからずに二人で彷徨い歩いている。

…ちゃんとはやてから買い物のメモを預かって来ていたのだが、そこには…
〜買い物はシャマルに頼んだので渡したお金で好きな物を買ってええよ。
あと、最近ヴィータが元気が無いようなので何か楽しませてあげてな。〜　　はやてより

…まあ、今日はヴィータも大人しいし、なんとかなるか…
……ん？
ヴィータが大人しい…だと…？
重大な事に気付いたのでヴィータの様子を伺ってみると、俯いたまま斜め後ろについて来ている。
…おかしい。
いつもなら、監視するかのように睨みながらオレの真後ろを陣取っている筈…
最近は睨んでこないと感じてはいたが、これは…
…やはり元気が無いようだな…
…元気の出るもの…喜ぶもの……好きなもの…！
…ヴィータの好きな物…か…
たしかヴィータは甘い物…アイスとかが好きだった筈だ
「…ヴィータ、アイスでも食べて休もう」
ちょうどアイス屋を見掛けたので聞いてみると…
「別に…いらない」
やはり拒否してきたか…
…まあ、予想は出来ていたが…
…だがなヴィータ、アイス屋を凝視しながら強がりを言うんじゃない…
「わかった、ならオレが疲れてしまったから休憩に付き合ってくれないか？」
ここまで言えば大丈夫だろう…

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ｓａｉｄヴィータ

また、やっちまった。
折角マオがアイスを食べようって言ってくれたのに…
頭ではすっごく食べたいと思ってるのに、
口が勝手に、いらない、なんて言ってしまった。
後悔で胸が一杯になり、あまりの情けなさに泣きたくすらなってしまう。
だから、ほん〜のちょっとだけ立ち止まってアイス屋をみてたら、マオが、「オレが疲れてしまったから休憩に付き合ってくれないか？」なんて言ってきた。
間違なくなくマオはアタシが強がりを言って後悔している事をわかっている。
だから自分が疲れたなんて嘘までついて、アタシがアイスを食べられるように気を使ってくれている。
その小さな優しさがとても嬉しくて、思わず笑顔になってしまっていた。
いつもそうだ。
マオはいつも些細な事でも他人の顔を立てようとする。
…だからこそ、信用出来るって思えたんだ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

チョコ味のアイスを買って貰った時、店のおっちゃんに、かわいい妹ちゃん、なんて言われたけど、アイスを一つオマケしてくれたから反論するに出来なかった。
それに、妹なのが癪だが、家族として見られるっていうのは、なんだか…くすぐったい感じがした。
そういえばずっと気になっていた事があるんだった
「ところでさあ、今日は何を買いに来たんだ？」
そう、この買い物の目的をまだ聞いていなかったのだ。
食料品を買うにはいつものスーパーを過ぎてしまっているから違う

だろうし、アタシはこの辺には来た事が無いから何があるのかもわからない。
マオを見ると、珍しく困った表情をしている。
いつものアタシなら「何買うかわかってねーのかよ！」とかいって怒っているんだろうけど、今は珍しい物を見れたと、嬉しくさえ感じる。
こんなことを考える自分が何だかおかしく思えた。
ドン！
マオに気を取られたアタシは運悪く、いかにも不良そうな男にぶつかられて、アイスを落としてしまった。
「どこ見てんだガキ！！服が汚れたらどうすんだ！！」
ぶつかって来ておいて勝手な事を言っている男に言い返そうとしたら、マオが先に前に出た。
「ぶつかってきたのはお前だろう、
お前がぶつかってきたせいでヴィータがアイスを落としてしまった。
悪いのはお前だ、ヴィータに謝れ」
…ストレートだな、おい
「生意気言ってんじゃねえぞクソガキ！！」
案の定キレた男が殴りかかって来たけど、マオが例の指パッチンをすると、男は腕を振り上げたまま止まってしまった。
「：悪い事をしたら謝るのが道理だ…！」
マオの怒りを一身に受けた男は顔面蒼白になり膝が笑っている。アタシでも耐えられそうにない程のものを只の一般人が耐えられる筈も無く、目も当てられない状況と言えるが、同情は…しない。
目の前でマオの怒気にあてられた男は直ぐに動けるようになったらしく、ゴメンナサ～イと情けなく叫びながら走りさっていった。
マオは、よく走れたな～なんてどうでもいい事を考えて呆然としていたアタシに
「：イチゴ味だ、美味いぞ」
と、言葉少なに自分のアイスを渡してきた。

「あ、ありがと」
なんとかお礼を言えたが、アタシの頭にはさっきのマオの言葉がずっと離れずにいた。
『悪い事をしたら謝るのが道理だ』
…そうか、そうだったんだ。

なんでこんな簡単な事で悩んでいたんだろう…
だけど、今、やっとわかった…

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

またしばらく歩いていろんな店を巡った。
はやてに貰ったメモには具体的には買う物が書いて無かったらしい。
だからいろんな店を巡って何を買うか考えてるとのことだ。
軽く昼食をとったあと、再び歩きながら、アタシは決心した。
「なあ、マオ…
その…アタシ達が最初にマオにあったとき、いきなり攻撃しちゃってゴメンな…。
ずっと胸につっかえてて、モヤモヤして、なんなのかわかんなかったんだけど、さっきのマオの言葉でやっとわかったんだ。
謝って無いんだってことが。」
やっと言えた。マオ、怒って無いかな?
結構ドキドキするもんだな。
「…あの時はお互い熱くなっていた。
あの時話し合いで解決する方法を取らなかったオレも悪かった。
だから、お互い様だ。」
やっぱりマオは自分も悪かったといい、お互い様で済まそうとしている。
けど、それじゃあ納得出来ない。
「違う！マオは悪くなんか無い。
あの時はアタシが熱くなって周りを見れて無かったのがいけないんだ！

だから、マオはもっと怒ってもいいんだ
謝るだけで許されるなんて、アタシは納得出来ない。
悪い事をしたら怒られる…これも道理だろ？」
いつの間にか感情的になってしまったが、構わず言い切った。
そんなアタシに、マオは…
「‥闘志の激しきこと炎の如く、心の澄み渡ること水の如し
‥これはある世界の歴史書に書かれていた言葉でな、炎水の境地と言うんだ。
熱くなった時こそ冷静になれという意味だ。
オレは怒らない。
だからあの時の様な事がもう起きない様にこの、炎水の境地のことを覚えていてくれ」
「わかった…約束する。
熱くなっても、冷静さを忘れないって。」
なんか腑に落ちないけど、まっいいか。
炎の如く…水の如く…か、
アタシは直ぐに熱くなっちゃうからよくわかる。
これの難しさが。
だけど、折角マオに教えて貰ったんだ、絶対に炎水の境地をものにしてやる！
マオとの約束は守る、それがアタシの罪滅ぼしだ。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
もう夕方になり、帰り道の途中、マオに買って貰ったウサギのぬいぐるみを抱き締めながらある事を思い付いた。
「前にこの世界の魔法はわからないって言ってたよな?
…だから、今日のお礼にアタシが魔法を教えてやるよ…」
マオが断る筈が無い事はわかっているけど、やっぱりドキドキするよな…
「‥ああ、よろしく頼むよ、ヴィータ」

…その笑顔は反則だろ。
…綺麗な夕焼け空で助かったな…

バイトを掛け持ちしたら夏休みがみるみるうちに消し飛んでいく
なんと恐ろしい事でしょう

眠い中書いたからきっと文が変になっている事だろう
あっ、それは何時もの事かw

第7話～認証は必然～

ｓａｉｄヴィータ

約束どうりアタシはマオに無人世界でベルカ式の魔法を教えている。

基本的な念話やプロテクション、そして早くも飛翔と高速飛行も出来る様になった。

マオの世界の魔法は、ただ力の限り魔力を放出するのが普通らしく色々と無駄が多い。

アタシ達と戦った時に使った魔法は攻撃の為では無く、アタシ達の魔力を凍結させて動きを止める為のものだったらしい。

だから試しにマオの魔法を岩山にむけて思いっきりやってみて貰ったら、

……岩山が……吹っ飛んじゃった…。

あの魔力を凍結に変換するんだからアタシ達が動けなくなるのもうなずける。

流石に全力でやると魔力が空になるらしく、その日は終わりにしたけど、流石にアレは無いだろ…

～～～

だけど追尾型の攻撃魔法は苦手らしく魔力スフィアはほぼ真っ直ぐにしかいかない状況だ。
マオは攻撃魔法に比べて防御魔法がヤバイ。
　ヤバイと言っても出来無いと言う意味では無く、逆に出来過ぎていると言う意味のヤバイだ。
マオが身に着けているマントは自身の強力な魔力を特殊な製法で編み込んだ物らしく、高い防御力に加えて、ある程度なら魔力に反応して自動防御を行う代物だった。
強力なプロテクション、自動防御能力のあるマント、加えてマオ自身の体術によりカートリッジを使用しないとアタシやシグナムでも突破出来ない程の防御力をほこるまでに至っていた。
～～～

家族６人で仲良く昼食をとったあと、はやて、シグナム、シャマル、ヴィータは出掛ける準備をしていた。
「ほな、いってくるな。
どこかに出かける時はちゃんと戸締まりしてから行くんよ？」
「：ああ、車に気をつけるんだぞはやて」
はやては家を空ける際の注意をして、三人と一緒に出掛けて行った。
マオとザフィーラが一緒に行かなかったのは
「デザインの事なんかはまるでわからない」
「同じく」
と、いった理由からだった。
「マオ、久々に手合わせ願いしたいのだが」
「：わかった」
はやて達が出掛けてしまい、やる事が無くなっていたマオはザフィーラの申し出を快く了承した。
　マオはシャマルに転移魔法などのサポート系の魔法も教わっていたのでよく転移魔法を使い、様々な世界を見て回っていた。

はやての言いつけどうり戸締まりをした後、マオは戦闘をするのに丁度良さそうな世界を選び、ザフィーラと共に転移した。
　転移した世界は辺り一面全てが草原で、遠くには森も確認でき、程よい陽射しと風のある緑豊かな世界だった。
「いい所だな。是非主や皆と共に来たいものだ。」
「ああ、だが走り回れないはやてがここに来ても辛くなるだけだろう。
だからはやての足が治った時の為に色々な世界を見て当たりを付けているんだ」
軽い会話の後、緑を荒さ無いよう空中で二人は組み手を始めた。
ザフィーラははやてから騎士服を承っていないので、マオと初めて会った時と同じ黒い服装？で、マオは普段着を着て、その上から全身を包む程大きなマントを身に着けている。

これは二人とも普段着をダメにしないようにしている為だった。
「いくぞ！ハァ！」
「……くっ」
二人の戦いはザフィーラが優勢だった。
魔法を使わない純粋な肉弾戦では体格、筋力が圧倒的に劣るマオが劣勢になる事は明らかである。
それでも戦えているのはマオがザフィーラの攻撃をことごとく躱し、受け流している為だった。
しかしザフィーラの攻撃は力強く、鋭いものであり、全てを躱すなど小さな少年に出来る筈が無いのである。
だがそれをマオはやってのける。
マオが言うには半分程なんとなくの勘らしいが。
だがそれも防御に徹した時の話であり、戦いに勝つには攻撃をして相手を倒す必要がある。
マオはスキを見て攻撃に転じるが、魔法無しの攻撃は年相応の物であり、ダメージを与えるどころか自分のスキを作ってしまい、そこを突かれて負けてしまうのだ。
「ぐっ、：また負けたか」
脇腹に突きを放ったマオだったが有効打にはならず、逆に腕を捕まれ地面に叩き付けられてしまった。
「やはりマオは攻撃の直後に僅かにスキが出来てしまうのだな」
「：なんというか…反撃は殆ど反射的にやってしまう為に思考が追いつかないんだ。
だから攻撃を意識すると気付いたらやられている。って感じなんだ。」
マオは体の記憶による反射的な動きに、頭での思考が追いつかない為によく気付いたら負けている。
体が反射的に動いてしまうのでどうしようも無いのだ。
「考えても解決はしないだろう、さあもう一本だ。」
その後も二人はしばらく組み手を続けていたが一時間程たった頃、

流石に疲れたらしく休憩を取る為に森の近くの大きな湖へと移動していた。
『……き……て……』
（…なんだ？念話か？）
マオは移動の途中に不思議な声が聞こえていた。
それは湖、というより森に近付くにつれてはっきりとした物になっていた。
『……き……て……』
湖に着いた頃にはそれが自分を呼んでいる物だと認識出来た。
「どうしたのだマオよ？」
「…声が聞こえるんだ…オレを呼ぶ声が…」
「声？別に何も聞こえないが。」
「…いや、確かに聞こえる。「来て」と、オレを呼んでいる。
おそらく森の中央辺りからだ。」
「ならばそこへ行ってみよう。救援のメッセージかもしれん。」
マオを呼ぶ声の発信源を探す為二人は森の中を進んでいった。
森の中は人の道など無いにもかかわらず難なく進む事が出来た。
まるで木々が道案内をしているかのようにも思えた道程も、この場所には本来あるべきでは無い物、つまり人工の建築物にたどり着いた事で終わりを迎えた。
「これは、何かの研究施設か？」
「…取り敢えず入ってみよう。」
二人は施設に足を踏み入れたが中に人の気配は無く、資料などが散乱していた。
「どうやらここは廃止された研究施設のようだな。」
「…ああ、しかもまだそれなりに綺麗な所を見ると、最近までは使われていたようだな。」
施設内はそれほど広くも無く、二人はすぐに一番奥だろう部屋にたどり着いた。
その部屋は今までの小汚ない部屋とは違い、様々なモニターやらコ

ンピュータやらが設置され中央にはマオやはやてと同じ位であろう少女の入った生態ポッドがあった。
「マオ、これを。恐らくこの研究の企画書だろう」
「‥プロジェクトR…
お前がオレを呼んだのか？」
マオが企画書を手に生態ポッドに触れた時、
『認証完了しました。
これより起動します』
声と共にポッドを満たしていた水が引き、開いたポッドから少女が‘落ちて’来た。
「‥‥‥‥‥‥‥‥！！」
なんとかマオは少女をキャッチし、近くのイスに座らせ、裸である少女に自分のマントを身に付けさせた。
いきなりの事態に反射的に対応したマオであったが、頭の中では軽いパニック状態に陥っていた。
「おはようございます、マイマスター。
ふつつか物ですがこれから宜しくお願いします。」
‥‥‥‥‥‥‥‥

の魔導士だよ！
距離を稼がせないように気をつけて、速やかに逮捕して！』
『こちらクロノ、たった今現地に到着した。これよりポイントへ向かう。』
現地へついた二人は早速ポイントへ向かった。
「ここはすごく綺麗な所だ…
こんな所に住んでみたいよ。」
ユーノは任務中にもかかわらず呑気な事を言い始めた。
「ああ、確かにいい所だ。
人のいない無人世界だし、フェレットモドキには丁度良いかもしれないな。」
「なっ、なんだと！
あとフェレットモドキって言うな！」
ユーノがなにやら騒いでいるが、クロノは全てスルーしている。
一見仲の悪そうに見える二人だが、心の底では互いに認めあっているのだ。
片や危険な任務に同行させ、
片や局員でもないのに任務に同行する。
これは相手を信頼し、背中を預けられる存在と認識しているから。
「冗談はこの位にしておこう。もうすぐポイントだ。」
「う～～」
ユーノはまだ言い足りないかのようにクロノを一睨みしたが、すぐに真剣な表情を浮かべた。
この切替えの早さも彼等が優秀と言われる理由の一つだろう。
『こちらクロノ、ポイントに到着した。これより捜索を開始する。
エイミィ、奴が現れたらすぐにしらせてくれ。』
『了解。クロノ君もユーノ君も気をつけてね！』
通信を終えた後、二人は二手に分かれて捜索を開始した。
対象であるアーモスは既にこの世界にはいないかもしれないが、せめてこの世界で何をしていたのかなどの情報が入手出来ないかとク

ロノは考えていた。
　少し先に大きな森を見つけたクロノは、もしかしたら隠れ家でも在るのではと考え、行ってみることにした。
後少しで森に到着するという所で、急に砲撃がクロノを襲った。
「くっ！！」
間一髪で回避に成功したクロノは自分を狙ってきた相手を見据えていた。
「僕は時空管理局執務官クロノ？ハラオウンだ。
アーモス？ヘンリー、お前を逮捕する。」
「くくく、身を潜めておこうかと思ったが、あの森を探られるのは困るんでね、悪いけど死んでもらおうか。」
アーモスに投降の意思は無く、二人の戦闘が始まった。
アーモスの実力は高く、防戦を強いられたクロノは苦戦し、徐々に押されていってしまった。
「捉えた！食らえー！！」
アーモスのバインドがクロノを捕らえ、砲撃が迫る。
「しまった！！」
砲撃はクロノに直撃し、アーモスは勝利を確信したが、煙の晴れた先には無傷のクロノともう一人の少年がいた。
「大丈夫かっ？クロノ」
「ああ、すまない。助かった」
ユーノが合流した事により、アーモスの砲撃のチャンスが無くなってしまった為、戦況は完全に逆転したと言えた。

二人の息の合った連携により、遂にアーモスを追い詰める事に成功した。
「ここまでだ、アーモス？ヘンリー。
武装を解除し、大人しく投降しろ。」
未だ油断は出来ないが、クロノは投降の呼び掛けをする。
しかし、アーモスからの返答は無く、それどころか様子がおかしい。

頭を抱えて苦しんでいるかと思えば、しばらくすると動かなくり、表情も伺えない。
何かの作戦かと警戒していた二人だったが、諦めたのだと考えバインドをかけようとした時
「「アーッハハハハハハ」」
アーモスが突然笑い始めた。
その笑い声は先程までのアーモスの声と違い、二つの声が重なっているように聞こえ、すぐにピタリと止んだ。
「「くくく、お前達、若いなりして中々に強いじゃないか…」」
こちらを見上げるアーモスの顔には歪んだ笑みが張り付いており、茶色かった魔力光は汚染され、濁った茶色へと変化していた。
『クロノ…なんか様子がおかしいよ。
まるで別人みたいだ。』
『ああ、わかっている。
奴が何かする前に速やかに逮捕する』

二人はバインドをかけようとしたが、アーモスの背後に現れた白いナニかをみた途端に動けなくなってしまった。
「「喜べ！お前達の体はオレが使ってやる！」」
動けない二人は知った。
アーモスの雰囲気が豹変した理由を…。
そう、アーモス？ヘンリーは‘ヤツ’に操られているのだと。
そして理解した。今‘ヤツ’は自分を操ろうとしているのだと。
動けない二人はただ睨む事しか出来なかった。
そして、白いナニかが二人に迫った時…
「開け！天の門！
　ヘブンズ？ゲート！」
突然、声と共に金色の魔力弾が雨の様に降り注ぎ、白いナニかごとアーモスを飲み込んだ。
攻撃が止んだ後、アーモスは完全に戦闘不能状態になっており、禍

々しいプレッシャーも消えていた為、白いナニかも消えたであろう事がわかった。
だが、まだ安心する事は出来ない。
なぜなら、攻撃を行った何者かが味方とは限らないのだから。
「一体何が起きたんだ。」
アーモスが倒れた為か動ける様になった二人は誰が攻撃を行ったのか確認しようとした。
「ふん、逃げたか…。
だが暫くは動けまい。」
そこには魔力光と同じ金色の髪に黄金の鎧を身に纏った、自分達と同じ位の年だろう少年がいた。
ユーノは外見や背丈から見て自分達と同じ位の年だろうと判断したが、その気品漂わせる雰囲気、圧倒的な戦闘力、そしてその存在感はまさに〈王〉と表現するのが一番適切だろうとユーノは思った。
そして同時に、犯罪者であるアーモスを攻撃した事から、管理局の人間か、そうで無くとも自分達の敵にはならないだろうと考えていた。
『何者だろう…あの金色の人。
あのアーモスをあっさりと倒しちゃうなんて。
敵では無いと思いたいけど…
どうする？クロノ。』
黄金の少年を一目見て、一瞬で自分の考えをまとめたユーノは、クロノに指示を仰ごうとしたが、なにやらクロノの様子がおかしい事に気付いた。
『どうしたんだ？クロノ。あの人を知ってるのか？』
『……ああ。奴は管理局の中でも一定以上の地位にいないと情報を開示されないほどの存在だ。
奴の手にかかればアーモス程の男だとしても束になった所でかないはしない。』
『なぜ存在を隠す必要があるんだ？

今だって僕達を助けてくれたし、悪い人じゃ無いんじゃないか？』
『奴が極秘にされている理由は…
奴が大小様々な事件の現場に現れている事が確認されている重要人物だという事が一つ。
そして二つ目は、未解決、または真相が謎のままになっている事件等で、亡くなってしまった局員の遺族が、真相を知る為に奴に接触して重傷を負うなどの事件が多発した為。
そして最後に管理局ですらどうする事も出来ない強さをもった存在を隠す必要があったんだ』
『そんな…いろんな人を怪我させている奴を管理局は勝てないからって放置するのか！』
『…いや、奴に真相を聞きにいった人は皆、重傷ながらも満足そうな顔で奴は悪くないと庇うらしいんだ。
それで管理局も本腰を入れられず、中途半端な戦力しか派遣できなくて奴を捕らえる事が出来ない。
管理局上層部では、出会ったが最後誰も無事では済まないのに、逮捕も出来ない事などから、奴を災厄の象徴として
【金色の悪夢】と呼んでいる。』
『こんじきの…あくむ？』
「話は終わったのか？貴様ら。
ヤツを見たからには貴様らをタダで返すわけにはいかん、覚悟するんだな。」
ユーノは金色の悪夢は自分達の念話が終わるのを待っていたのか、やっぱりいい人なんじゃないかと思ったがその考えはすぐに撤回された。
「待ってくれ！僕は時空管理局執務官、クロノ？ハラオウンだ。
こちらに戦闘の意思はない！」
「貴様らに無くても我にはあるのだ！」
クロノは話し合いで解決しようと試みたがあえなく失敗に終わり、
「さあ、我を楽しませてみよ、小僧！」

二人は金色の悪夢との戦闘を余儀なくされた。

第8話～竜田は必然～

～前回のあらすじ～

～クロノとユーノがピンチになり、マオは現実逃避を開始した～

ｓｉｄｅザフィーラ

マオが動かなくなってからしばらくたった。
オレはその間少女の動きを警戒しながら部屋の資料などを調べていた。
少女は動かぬマオを見つめ続けたまま座っていて、オレの問い掛けには応じず、ただマオの言葉を待っている様だった。
それにしてもマオはいつ動き出すのか…
マオは本当にいきなりの出来ごとに弱いな…
つい先日も台所に出てきた黒く素早い虫を目の当たりにした途端に動かなくなっていたしな。
シグナムはこの事について、
「マオは普段無意識の内に周りの状況からその先を予測して動いているから予想外の事態に対してどうしても対処出来ないんだろう…」と言っていた。

大方、今回も助けを求められているのかと思いきや、いきなりマスターと言われて驚いたのだろう。
まあ、マオの反応は妥当だが大きすぎるといった所か…。
ザフィーラはマオの弱点？とも言える、要約するに‘僕、ビックリすると固まっちゃうの！’を見て、マオにも子供らしい所があるのだな、と密かに思っていた。
「（関係ありそうな資料はだいたい集まった事だし、そろそろマオを起こすか…）」

ザフィーラは、マオはその内勝手に目覚めるだろうと思っていたが、なかなか動かないマオをみかねてとうとう起こす事にした。
「マオよ、そろそろ起きるのだ。
余りに寝てばかりいると主はやてに晩ご飯を抜かれてしまうぞ。」
オレの声が聞こえたらしく、マオは反応を示した。
基本的にマオは主はやてと食べ物の事を出せばだいたいどうにかなる。
これは我々ヴォルケンリッター四人の共通の認識だ。
「・・・それは困るな・」
ようやく起きたマオは少し混乱しているようだが、素早く状況を理解したらしく、少女に質問を始めた。
「・とりあえず放置して済まなかった…。
では聞きたいのだが、お前は何者で、何故オレがマスターなんだ？」
止まっていた自覚はあったらしく、その事を謝罪してから疑問点を上げた。
ザフィーラからの問い掛けには答えなかった少女だったが、マオの問い掛けにはすんなりと応じた。
「私は人によって創られた人造魔導師、正式名称‘コードＦ－００Ｒ’この施設の研究員には〈レイ〉と呼ばれていました。
そして、あなたが私のマスターである理由は、あなたが私の呼び掛けに応えてくれた人、つまり適性者だからです。
」
マオは淡々と話す少女、レイの説明を聞き、さらに浮かんだ疑問を質問として重ねた。
「・ではレイ、オレは何の適性者だというんだ？」
ほかにも気になる事はあったが、別にいいかと思い、聞かなかった。
少し間をおいた後、
レイは語り始めた。
「それは、この施設で研究されていた物。
神を滅し、

世界を変える為の力…
遥か古より伝わりし最古の魔導書…
究極にして絶対のデバイス…その名も…
【神滅の書 - ラグナロク】
…詳しいことは分かりませんが、どうやら私は適性者である主を守護し、【ラグナロク】を制御する為に作られた様です。
研究員は、ラグナロクを扱うことの出来る適性者とそれを制御をする私を使い、【神】と呼ばれる物を滅すことが目的だった様ですけど、…どうやら研究は途中で破棄された様ですね。」
説明を聞いたマオは情報を整理していた。
「（：オレ達は適性者を探していたレイに呼ばれてここに来た。
適性者と制御者が揃ったが、ラグナロク本体が無い。
それでは適性者も制御者も意味は無い。
つまり……レイは行くところの無いただの子供と言う事だな。）」
少し適当すぎる気もするが、考えの整理を終えたマオはレイに今後どうするのかを尋ねた。
「：肝心のラグナロクとやらが無くては適性者も制御者も意味は無いだろう。
お前はこれからどうするつもりなんだ？」
「私の使命はラグナロクの制御とマスターの守護です。ラグナロク本体が無くともマスターであるあなたを守護する使命は変わりません。
ですからあなたを守る為にあなたのそばにいるつもりです。」
レイはマオの事を守ると言うが、マオはなにかと戦っている訳でも、狙われている訳でも無いので守られる必要など無かった。
だが、この少女を放っていく訳にもいかないのである提案をした。
「：オレについてくるのは別に良い、ただし条件がある。
それは、主従などという関係も自分の使命の事も忘れて普通の人間として暮らす事だ。

…オレ達の家族としてな…。」
これまで表情を崩さなかったレイであったが、マオの言葉を聞き明らかに動揺しているのが見て取れた。
「ですが、私は……
それに…私はラグナロク制御の為のパーツに過ぎません…それを…家族だなんて…」
マオは、どんどん声が小さくなっていくレイに追い討ちとばかりに言葉を続ける。
「…先程お前自身が言った様に、ここではもう研究は行われていないようだったぞ。
…研究も行われておらず、ラグナロクも無い…さらにオレは誰かに狙われている訳でも戦っている訳でも無いから守られる必要が無い。
…つまり、お前に架せられた使命…お前を縛るものは…ここには何も無い…
…お前は今、限り無く“自由”なんだ…
だから、自分のしたいようにするといい。
オレはお前のマスターとしては何かをするつもりはないが、一人の人間としてなら…いくらでも力になってやる。」
無表情だが、最後の辺りは少し照れている様に思えるマオの声は力強く、優しさを感じさせるものだった。

「ですが…それでは…私の、存在意義が…
生まれきた意味が…
生きる理由が…
私に…自由なんて…」
完全に混乱しているレイは俯いてしまいその声は微かに震えていた。
「…意義も意味も理由も…これから新しく見つけていけばいい…
それに、そんなものが無くても案外…問題無いぞ。
…もしお前が誰かに狙われたとしても、利用されようとしても、オレが必ず守ってやる…

だから…オレを信じろ…レイ」
またしても沈黙が訪れる。
しかし、今回の沈黙はそう長くは無かった。
「…私が…人で無くても…人として生きてもいいのでしょうか…
アナタを…マスターを守るという使命を放棄して…逆に守って頂くという言葉を受け入れていいのでしょうか…
私は…アナタの隣りで…“自由”を行っても…いいのでしょうか…？」
顔を上げたレイは、自分に与えられた使命と主からもたらされた自由への誘いとの間で揺れていた。その瞳には、迷いと困惑が入り交じっていて、微かに潤んでいた。
「：生まれなんて関係ない…他の何者でもないお前自身が一人の人間として生きるんだ…
誰にも文句は言わせない…
たとえ、誰かがお前を利用しようとしたとしても、さっき言った様に、お前はオレが必ず守る。
だから、お前は自由に生きろ…オレが許す。」

許す。その言葉を聞いたレイからは迷いは完全に消え去り、同時にある感情が芽生えていた。
「わかりました。もう私に迷いはありません。
私は、私自身の意思により、アナタの家族として生きていきたい…
ずっとアナタを支え続ける…それが私の新しい生きる理由です。」
「：そうか、なら今から俺達は家族だ。
血は繋がらなくとも心で繋がった、な…
オレの名はマオ、こっちがザフィーラだ。あと四人いるから会うのを楽しみにしているといい。
：ところで、お前の名前はレイのままでいいのか？
コードナンバーの略称だったりしたら嫌じゃないか？」
今更ながら自己紹介をした後、気になったレイという名前について

聞くことにした。
「いえ、少なくともこの名をつけてくれた研究の主任らしき人は、確かな情を込めてこの名を呼んでくれました…まるで、自分の娘を呼ぶかの様に…」
「：そうか、ならこの話はもう止めだ。
どうやらレイは大抵の知識はあるらしいからな、そろそろ帰るか。」
マオが二人を促し、家に帰ろうとした時…
「「「！！？」」」
三人は突如感じられた強大な魔力に反応した。
「なっ、なんだ…この強大な魔力は…！」
その魔力量は、幾多の戦場を渡り歩いて来たザフィーラであっても驚愕するものだった。
「今、探知してみたところ、どうやらここから南に２ｋｍの地点で戦闘が行われているようです。
数は三人、先程の強大な魔力の持ち主と残りの二人が争っています。
二人組の方がほぼ一方的に攻撃されているようです。」
イチ早く探知し終えたたレイが状況を説明する。
「あれが個人の所有する魔力だとは…俄かに信じがたいな。
主はやてやマオも凄いが、今のはそれ以上だった。
まあ、無理に関わる必要も無いだろう。」

確かに今のマオ達にはなんの関係も無い事ではあったが、どうにも浮かない顔をする者が一人
「：様子を見てくる。二人はここで待っていてくれ。」
何か気になる事があるらしくマオは出口へ向かう。
「まて、危険だ！行く必要は無いだろう！どうしても行くならオレもついて行くぞ。」
「：いや、一人でいい。
魔力と一緒に変な違和感を感じてな…確かめたら直ぐにもどる。」
マオはザフィーラの制止を振り切り、一人飛び出した。

〜〜〜

ると思ったか！」
攻撃は防がれたが、一瞬のスキを突いてクロノは金色の悪夢の背後に回り込み、渾身の一撃を叩き込もうとする。
「くらえ！」
「させるか！消えろ！」
金色の悪夢はクロノよりも早く攻撃を放とうとしたが両手足をバインドにより拘束されてしまった。
これがクロノの作戦、自分が攻撃を掻い潜り敵に接近し、注意を自分に向けさせ、その間に魔力弾の防御をしている為、手が空いていないはずのユーノの防御をしながらバインドをかけるという離れ業により動きを止める。そして近付いたクロノが決める。
少し無理がある作戦だが二人は見事に成功させた。
「ぬぅおおおぉぉぉ！！」
クロノの一撃をまともに食らった金色の悪夢は爆煙にのまれて見えなくなった。
魔力弾も収まり、自由に動ける様になった二人は直ぐに転移魔法の準備を始める。
全てはこの為の時間稼ぎに過ぎない。
二人は金色の悪夢がこの程度でやられるなどとは思っておらず、この隙に素早く転移しようとした。
だが…
「見事な連携だった。褒めてやろう。」
煙の晴れた先に無傷の金色の悪夢が現れた。
「褒美だ、受け取るがいい。」
二人に迫る金色の魔力。その大きさはなのはのディバインバスター程あった。
転移を止め、防御をしようとした二人だがすでに遅く、
「「（間に合わない！）」」
直撃を覚悟した二人だが、攻撃が二人に当たる事は無かった。突然、誰かが二人の前に現れて迫りくる攻撃を防いだのだ。

「き、君は…一体…？」
「：なに、通りすがりの一般市民だよ。」
クロノの目の前に立つ黒髪の少年は自らを一般市民と名乗った。
容姿を見ただけではごく普通の少年にしか見えない。しかし、その身に宿す魔力、隙のないたたずまいから少年が多くの経験を積んだ戦士だという事が分かる。それに、‘普通の一般市民’は空を飛んだりしない。
「：事情はしらんが見過ごす訳にもいかなくてな…
下がっていろ、アイツの相手はオレがする…」
デバイスもバリアジャケットも武器も無く、素手で戦おうとする姿は勇ましいものだが、相手が相手なだけに無謀としか言い様が無かった。
「まて、危険過ぎる、奴は……」
クロノの制止を聞かず、自称一般市民の少年は金色の悪夢に向かっていった。
〜〜〜

勢いをそのままに金ピカに蹴りを繰り出す。蹴りは防がれ、近距離で魔力弾を放たれたがそれをジャンプして躱し、そのまま背後へ回り込み攻め立てる。
「：ノーザンストライク？」
ベルカ式の三角形の魔法陣を展開し、四つの魔力弾を放つ。
四つはそれぞれ別の方向へ放たれ、一度だけ急激に方向を変え、時間差で金ピカに向かう。
「この程度！躱すまでもないわ！」
四つの魔力球は全て防がれたが、僅かに出来る隙をマオは見逃さない。
「：凍て付け」
パチンッ！
マオが指を弾くことで金ピカの動きが止まる。ヴォルケンリッターの動きを同時に止める程の強力な技、これを受けては抜け出す事は難しい。
「寒いではないか、この愚か物！」
しかし、金ピカに常識は通用しないらしく、いとも簡単に抜け出してしまった。
しかし、これで終わると考えるマオでは無く、既に次の攻撃の準備を終えていた。
「：受けてみろ、ノーザンインパクトのバリエーション…」
金ピカの懐に潜り込んだマオは右足に魔力を収束させ、腹目掛けて蹴りを放つ。
「：北央天星ポラリス！」
魔力により強化された蹴りがヒットすると、同時に収束された魔力が開放される。
打撃と魔力砲撃を兼ねるポラリスをまともに食らった金ピカは遠くへ吹き飛び、見えなくなった。
この技は、魔法陣により魔力量こそ制限されているが、その分収束率は上昇しており、まともに食らえばたとえシグナム達であっても

タダでは済まない。
「……今のうちに帰るか。」
得意の連撃を叩き込んだのはいいがかなりの魔力を消費してしまい、金ピカがまだピンピンしてたらヤバイので早々に帰ろうとしたマオであった。
〜〜〜

（ザフィーラは管理局員に会うのは不味いかもしれないので隠れている。）

名乗った後クロノが続ける
「マオ、さっきは助けて貰い感謝する。
本当に助かった、ありがとう」
「ありがとうございました。ホント、どうなるかと思いましたよ。」
素直に感謝する二人
「それと、さっきの相手の事は誰かに話したりしないでくれないか？
一応事情により公開されていない要注意人物なんだ」
「：わかった」
マオは気になったが深くは詮索しなかった。
只、組織の人間は大変だなと考えていた。
「：話は終わりか？ならオレは帰るぞ」

さっきの事は他言無用と釘をさしに来たのだと判断したマオは切り上げようとした。
「まってくれ、局から何か謝礼が出ると思うのだが。」
「：組織と関わるのはゴメンだな。」
クロノは管理局から謝礼があると言うが、マオはそれを断る
「そうか、なら僕ら個人として何かお礼がしたいのだが…」
「：なら、何か美味しい物が食べたいな…
残念ながら今日はもう時間が無いからまた会った時にでも紹介してくれ」
「ああ…！とびきりの店を探しておくよ。」
クロノはまた断られるかと思ったが、素直に受けてくれ、さらに遠回しにまた会おうと言われたので若干笑顔になり、時間を取らせまいと気を使い、別れの挨拶の後ユーノと共に転移していった。
～～～

二人が転移していった後ザフィーラが出てきた。
「‥ああ、ところでお前はそんな所で何をしているんだ？」
マオは何も無い所に声を掛ける。
「なんだ、気付いていたのか」
そこに現れたのは先程まで戦っていた相手…
「‥なんのようだ金ピカ。」
マオは面倒臭そうに質問する。
「金ピカでは無いと言っている！
フンッ、さっきまで戦っていたのだからもう少し反応したらどうだ？」
「あんな殺意の欠片も感じられない物など戦いとは呼ばない…
それより何故彼らと戦っていたんだ？」

「なに、用事を済ませてしまったら暇になってな、暇潰しに相手をしてやったのだ
奴等も中々だったが貴様はそれ以上だったぞ。最後の攻撃も割りと痛かったしな。」
（‥あれを食らって痛かったで済むとは…）
「ああ、あれは新技の実験台になって貰ったからな。」
「なっ、貴様、我を実験台にするとはっ！」
キレた金ピカは今にも攻撃してきそうな勢いだったので話題を変えることにした。
「‥何か用があったんじゃ無いのか…？」
「…腑に落ちないがまあいい。
なに簡単な事よ、貴様の名を聞きにわざわざ来てやったのだ。」
「‥‥‥‥マオだ」
一瞬名乗らない方が面白そうだと思ったが、ただ面倒な事になるだけだと気付き素直に教えた。
「そうか、我の事はカイとでも呼べ！

名乗ったのだから変な名で呼ぶんじゃないぞ！」
名前を交換して満足したらしく、金ピカ…もとい、カイは去っていった。
「…嵐の様な人でしたね…」
「危険な奴でなくて良かったな。」
「ああ、さてザフィーラ、レイ、帰ろうか…」
「ああ。」
「ハイ」
〜〜〜

「今日のメインは、竜田揚げやで。」
遂に告げられた晩ご飯のおかず！その正体は竜田揚げ！
（当たらずとも、遠からず…か…）
こうして7人になった八神家は今日も平和に笑い会う。季節はもうすぐ秋…

第９話～勉強は必然～

その日は夏の終わりを告げるかの様に冷たい風が吹いていた。
マオは一人自室（ザフィーラと共用）で読書をしていた。
時刻は１０時、いつもなら洗濯でもしている所だが、今日はシャマルとレイがやってくれているので暇になってしまい、読み掛けの本を読む事にしたのだ。
「・・・・・・・・・フゥ、」
推理小説を読んでいたマオは、予測していたのとは違う人物が犯人だったという大どんでん返しに驚きつつも３０分程で読み終わり、本を閉じた。
「・・・・・・まさかアイツが犯人だったとは・・・しかし動機がイマイチ理解出来ないな・・・」
コンコン。
「マオ、入るで～」
本の考察をしていた時、はやてが部屋に入って来た。
「・どうしたんだ？はやて、浮かない顔をして・・・」
部屋に入って来たはやてはいつもより元気がないように見えた。
「ちょっとシグナム達の事で話があってな・・・」
「・なにかあったのか？」
マオにはシグナム達はいつもと変わらない様に見えたが、どうやらはやてには何か思う所があるらしい。
「なんや最近シグナムやヴィータが悲しそうな顔をするんよ。わたしがどうしたのか聞くと、決まって「何でもない」って笑うんやけど、やっぱり無理してる様に見えるんや。」
マオは何も言わずにただはやての言葉を聞き続ける。
「なんで話してくれんのやろ・・・わたし、信用無いんかな・・・？」
言い終えたはやては今にも泣き出しそうになってしまい、そこでようやくマオが口を開いた。

「大丈夫だ、皆はやての事を第一に考え、誰よりも信用している。
今ははやてに心配をかけないようにしているだけで、その内必ず話をしてくれるさ…」
マオははやてに優しく言い聞かせる。
はやてはそれで幾らか元気を取り戻した様だったので一安心する。
「ありがとな、マオ。
話したらスッキリしたわ。」
はやてにいつもの笑顔が戻ったので安心したが、マオはシグナム達の事で少し嫌な予感を感じていた。
「はやてちゃーん、マオくーん、お買い物行きましょー。」
玄関の方からシャマルの呼ぶ声がする。
「ほな、いこか？」
「…ああ」
そこには先程までの暗い空気は既に無く、二人は玄関へと向かった。
〜〜〜

は（：好感のもてる良いセンスだ…とくに仮面が良い…）などと考えていた。
「：オレに何の用だ…」
変な考えを振り払い、単刀直入に用件を聞き出すことにした。
「先に言っておく、私はお前の敵では無い。
我が主がお前と話をしたがっていてな、私はその案内人と言う訳だ。」
仮面の男は自らを敵では無いと言うが、そんな言葉など信用出来るはずも無かった。
「：悪いがお前は信用出来ないし、お前の主と話をする義理も無い。」
マオは語尾を強めて威圧するが、仮面の男は気にも止めずに話を続ける。
「まあそう言うな。これは、八神はやての今後に関わる重要な話だ。
それに我々はラグナロクについても知っている。
どうだ？一緒に来る気になったか？」

仮面の男は信用出来ないが、はやてを引き合いに出されて黙っているマオでは無かった。
「：わかった、話をしに行ってやる。案内してくれ」
虎穴になんとか～と言う言葉を思い浮かべたが、うろ覚えだったため直ぐに消えた。
「驚いたな、もう少し渋るかと思っていたんだが。」
仮面の男は冷静沈着と聞いていた男が、八神はやての名を出した途端に態度が豹変したので驚きを隠せなかった。
「まあいい、ではこの陣の中へ入ってくれ。」
強い光の後、路地裏から二人の姿が消えた…。
～～～

屋の中の様だった。
「こっちだ、ついてこい。」
そう言って仮面の男はドアから出て行ったので、マオは部屋を見渡した後仮面の男を追った。
「‥ここはどこなんだ？」
マオはここを何かの基地か施設だと考えていた。
「ここは、次元航空艦…簡単に言うと世界を渡る艇(ふね)だ」
帰ってきた答えは想像よりもスケールの大きな物であり、仮面の男が大きな組織の人間だと言う事が伺える。
「ここだ、少し待て。」
コンコン。
「失礼します、八神マオをお連れしました。」
仮面の男が一際大きいドアをノックすると、中から返事が帰ってきた。
「入って来てくれ。」
マオが部屋に入ると中には威厳ある初老の男と猫が座っていて、初老の男が立ち上がり挨拶をしてきた。

「初めまして、八神マオ君。
私の名前はギル？グレアム、わざわざ来てくれてありがとう。
今回君とどうしても直接話がしたくてね…
二人とも、挨拶を」
初老の男、グレアムが声を掛けると仮面の男と猫が光を放ち、二人の女性に変わった。
「初めまして、私たちは父様に使える双子の使い魔、リーゼ？アリアと…」
「リーゼ？ロッテです」
仮面の男の正体が女性だった事に驚きつつも、表情には出さずに本題を切り出す。
「‥八神マオだ…。‥話とは何だ…何故オレの事を…オレ達の事を

知っているんだ？」
詮索は無用と判断し、一気に話を聞き出そうとする。
するとグレアムは一瞬ためらったが、ゆっくりと話始めた。
「……まず最初に言っておかなければならない事がある…。
このままでは…八神はやては…闇の書の影響により数年とかからずに死亡する。」
グレアムから告げられた言葉を、マオは否定する事が出来なかった。
「君も薄々気が付いていたんだろう、彼女の足の障害は闇の書の影響による物だと。」
そう、マオは薄々気が付いていたのだ、はやての足から感じる変な違和感が闇の書と同質だと言う事、それが徐々に範囲を広げてはやてを蝕んでいるという事に。
病院では間違なく治せない。だから自分の手で治せないかと考え、数々の本を読み、世界を渡っては何か方法が無いか探してきた。
「‥ああ、気付いていたさ…
だが、どんなに治す方法を模索しても見つからなく…病院では治せない…オレはただ見ている事しか出来ないんだ。」
マオは自分では気付いていないが、いつの間にか感情的になってしまっていた。
「一つだけ方法がある。
蒐集を開始して闇の書を完成させればいい。
…だが、これにも問題があってね。
完成した闇の書は完成の後、使用者の身体を乗っ取り、暴走を始めて使用者を死に至らしめる。
そして様々な問題から完全破壊、永久封印が不可能とされていて、使用者の死をトリガーに次の主の下へと転生する。」
グレアムから語られた闇の書の真実。まさに八方塞がりの状況なのだと痛感した。
「‥ならば…ならばどうすればいいんだ…」
マオは今の生活が終わってしまう事を考えると、胸が苦しくてたま

らなくなる。これがなんなのかは分からないが、とても不快だった。
「先程も言った様に、蒐集を開始して闇の書を完成させるんだ。」
「だが、それでもはやては…！」
グレアムの言葉にマオはとうとう声を荒げて怒りを露にする。それが無意味な事だと知りつつも…
「…少し、老人の長話に付き合ってくれるかな？」
そう言ってグレアムは窓から遠くを見つめながら話始めた。
「私は、１１年前に封印した闇の書の護送艦隊の司令をしていてね…その時に封印したはずの闇の書が暴走を始めてしまい、クライド？ハラオウンという優秀な部下を失ってしまった。
そう、君もあったことのあるクロノ？ハラオウンの父親だ。
私はその時から闇の書の永久封印の方法を模索し、遂に封印の方法と新しい所持者を見つけた。
封印の方法は闇の書が完成し、暴走に至るまでの僅かな時間に極めて強力な凍結魔法による凍結封印…。
私が新しい闇の書の所持者である八神はやてを見つけた時は運命に感謝したよ。両親を事故で失い、身よりのない彼女なら誰も悲しまないと…。だから私は彼女の父の友人を名乗り、せめて闇の書の完成までの間は不自由無く暮らせる様にと援助をしてきた。」
そこでグレアムは話を一度区切りマオを見る。
「…もう少し食って掛かって来ると思ったんだが…」
マオは既に冷静さを取り戻しており私情を表情に出さない様に勤めていた。
「：オレにこんな話をするんだ、まだ続きがあるんだろう？」
その言葉には僅かに怒りの感情が交ざっていたため、隠してはいるが内心穏やかでは無いと物語っていた。
「ここからが本題だ。私は確かにあの子の犠牲により闇の書を封じられるのならそれが最善だと考えていた。
だが、ある日君が現れた。

両親を失った悲しみからあまり笑う事が無かったあの子が、本当に楽しそうに笑う様になった…。
それを見ていたら、私のしようとしていた事がとても愚かな事だと思う様になっていった。
私はいつしかあの子のの笑顔を守りたいと、もっと幸せになって貰いたいと、思う様になった。
…君が変えたんだ。あの子を、守護騎士達を、そして私を…。
それから私はある人物と出会い、闇の書を止め、笑顔を守る可能性にたどり着いた。
それが…」
「それが【神滅の書ラグナロク】だ。」
グレアムが続きを言おうとした時、ドアから入って来た人物が言葉を継いだ。
「：お前は…金ピk…カイ！」
ドアから入って来た人物はマオと戦った事のある少年…カイだった。
「：何故お前がここにいるんだ。」
「ちょっとマオ君、そんな失礼な言い方しちゃダメだよ～」
何故かロッテ（猫だった方）がマオに注意する。
「：何故だ…？」
マオの疑問は当然だと思うがどうやらこの双子にとっては非常識らしい。
「この方は、古代ベルカという世界の…いえ、年表から見ても全世界最初にして最古の王、時代を切り開いた最強の開闢王（かいびゃくおう）様なんですよ！」
アリア（仮面の男だった方）が興奮気味に言う。
「：開闢王…だからカイなのか…安易だな。
で、なんでそんな大層な人物がまだ生きているんだ？
いや、そんな事よりも何故ラグナロクが出て来るんだ。」
二人に注意されたが、マオは変わらない態度のままカイに尋ねる。
「ラグナロクは我と我の仲間の一人が作った最初の魔導書であり全

ての魔導書の原書なのだ。
神滅の書とは最近ある研究チームが名付けた名で、真の呼び名は【無窮の魔導書】という。ちなみに闇の書の本当の名は夜天の魔導書だ。
ラグナロクは昔強大な敵を倒す為に作ったんだが、制御をすることが出来ず使用する事が出来なかった…。
だが、理論上ではラグナロクなら夜天の魔導書に強制アクセスをかけ、プログラムを書き替える事が出来るはずだ。」
もう聞くことも無いと思っていたラグナロクという名…
レイとの出会いは偶然だったのか…必然だったのか…
マオはこれが運命という物なのかと考えていた。
「マオ君、これが無窮の魔導書ラグナロクだ。
これで闇の書の歴史に終止符を打ってくれ。」
グレアムから渡されたラグナロク、その表紙には中央に透明な宝玉がはまっていて、それをかこう様にひし形のクリスタルが八つはまっていた。
「：聞きたい事がある…レイを造ったのはお前達なのか…？」
グレアムにはマオが何を思って聞いているのか分からなかったが、伝えるべきは真実のみと考える
「あのレイとかいう少女を造ったのは我の仲間…ラグナロクの開発者であるハザマという男だ。
だが奴は今、行方不明だから詳しいことは分からんぞ。」
グレアムが口を開くより早くカイが答えた。
「：わかった。これがはやてを救う唯一の方法だというならオレは迷わない。たとえ管理局だろうが手を貸そう。」
マオは宣言する、はやてを救い、今までどおりの笑顔を守ると
「私達が管理局だと気付いていたのですか？」
思わずアリアが尋ねる。たしか管理局だとは名乗っていなかった筈と。
「：アレだけ話を聞けば推測は容易だろう。」

「なら話が早い。マオ君、君に管理局に入局して貰いたいのだが」
「：何故そうなる…」
グレアムの突然の申し出にマオは困惑する。
「理由は幾つかあるが、最大の理由を説明しよう。
実はラグナロクの制御には制御者だけでは足りないんだ。
制御者に加えて超高性能ＡＩを搭載したインテリジェントデバイス２機の補助が必要とハザマ君は言っていた。
その内一つは完成しているのだが、なにせ管理局の最新技術の結晶ゆえに簡単に民間人に渡すことは出来ない。だから君に管理局に入局して貰う必要がある。しかもそれなりの地位に。」
理由には納得出来た。だが、
「：幾らなんでもそれなりの地位になるのは時間が足り無すぎるだろう。」
そう、組織で出世するのはそう容易な物では無いはずなのだ。
「その点については手を打ってある。
君は来月の執務官試験を受けられる様に手続きを済ませてある。
執務官になれれば局に置いてそれなりの地位についたという事になる。」
なんとグレアムはこうなる事を見越して手を打っていたのだ。
「問題があるとすれば執務官試験はとても難しいと言う事なんだが、こちらでもサポートするからどうにか頑張ってくれないか。」
聞けば執務官試験とはどんなエリートでも一回、二回落ちるのが当たり前だというでは無いか…
「：はやての為ならオレは不可能をも可能にしてみせるさ」
〜〜〜

完全に起動した状態でないといくらラグナロクでも強制アクセスをかける事が出来ないのだ。
貴様、理解しているのか？」
……
「‥大丈夫だ、問題無い。」
その後一通り話をした後、一度帰る事にした。
〜〜〜

第１０話～衝突は必然～

衝突する‘想い’と‘想い’…
お互いに望む未来は同じ筈…
しかし譲れぬ‘想い’が一つの道を分岐させる…
【彼】は言う…想いを通したくば力を示せと…
分岐してしまった道はもう交わる事は無いのだろうか……

～～～

…にしても、仮面の男になっていた時と随分と違うんだな…やはり性格(なかみ)も変えてこそ完璧な変身なんだろうか…
そこでオレはくだらない事を考えている場合では無い事を思い出した。
既に日は落ち、空高くには雲の合間から月が顔を覗かせている。
時計を確認すると既に深夜と呼べる時間だった。
「不味い、家に入れないかもしれない…」
不吉な考えが頭をよぎ、急いで帰ろうと走り出し、ようやく家にたどり着いた時、よく知った魔力が四つ程感じられた。
間違なくシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの魔力だったので警戒せずに近付くが、なにやら話をしているらしく、向こうはこちらには気付いていない。
…一体こんな時間に何をしているのだろうか…
四人ははやてにデザインして貰った騎士服に身を包み、その様子はまるでこれから戦場へ行くかの様だった。
「主はやてとレイは眠られた…そしてマオも今日は帰って来ないだろう。
…行こう！」
「おう！」
「はい！」
「ああ！」
四人は意を決したが如く飛び立った…
オレには四人がこれから何をしようとしているのか分かってしまった…
そして、分かった瞬間に…何故か胸が苦しくなった…
「…一体こんな時間に何処へ行くつもりなんだ？」
オレはごく普通に言ったつもりだったが、その声は自分でも分かる位に冷たく響いていた。
「――――！…マオ、――――」
四人が四人とも驚いた表情を浮かべていた。その驚きは何に対して

か…いや、そんな事はどうでもいい…
「‥何処へ…行くんだ？」
オレはもう一度問い掛ける。
冷たい響きは変わらない…
四人は言葉に詰まり沈黙する。
「答えられないなら代わりにオレが言おう…
お前達…蒐集に行くつもりだったな…？」
オレは確信を込めて言い放つ。四人はいまだ沈黙を続ける…
「‥沈黙は肯定と受け取る…
何故だ…？蒐集ははやてに禁じられている筈…
何故お前達がそれを破るんだ？」
‥出来る事なら、否定して貰いたかった。
何か別の理由があって欲しかった。
だが、きっと彼等は気付いたのだろう…闇の書がはやての命を蝕んでいることに。
だからこそ蒐集を決意したのだろう…騎士の誓いよりもはやての命こそが守るべき物と。
「‥はやてには、言ってあるのか…？」
‥それは無いだろう。
今朝のはやての様子を考えたら全てが繋がる…
「……主はやてにはお伝えしていない、全て我等の独断だ…
…だが、聞いてくれ…！このままでは…主はやては…いずれ命を落とす…。
だから我等は闇の書を完成させ、主はやてをお救いする！
たとえ騎士の道に背く行為だとしても…それでも、我等は主はやてをお救いしたいのだ！」
シグナムが沈黙を破りその思いを打ち明けた…
彼らの行動は間違ってはいないのだろう…だけど…
「‥オレもはやての事については気付いていた。
オレもはやてを助けたいし、蒐集にも反対はしない。」

「なら！」
オレの言葉にヴィータは明るくなるが、それも一瞬で変わる。
「だが、お前達のやり方は認められない。
何故、今オレに言った事をはやてに言わないんだ…！
今朝…はやてが言っていた…ここ最近のお前達の態度を見て、「私、信用無いのかな」ってな。
わかるか…はやてはな…顔には出さないが、心で泣いているんだ…！」
感情の抑制が利かない…今朝のはやての表情を思い出すと、また胸が苦しくなってくる。
「だがあの御方は他人が気付く位なら自分はどうなってもいいと言う人だ…！
それに、告げろと言うのか！
あなたの命はそう長くは持ちませんと…
あなたはもうすぐ死んでしまいますと！！」
シグナムの言う事はもっともだ…
だが、ただ闇の書を完成させてもはやてを救う事は出来ない。
やはりはやてにも全てを知って貰う必要がある。

「どうしても止めると言うなら…マオ、例え貴方が相手でも…！」
…もうこれ以上聞く耳持たないだろう…
何故こうもすれ違うのだろうか…
目指す場所は同じ筈なのに…
…胸が、苦しい…
…きっと、これが【悲しい】という物なんだろう。

「…どうしても行くと言うのなら、オレを倒してからにしろ…
…お前達の想いを通したくばこのオレに…‘力’を示してみせろ！」
…ああ、視界が…心が…全てが…蒼に染まっていく…
ははっ、なんか…眠くなってきた…な……

そしてオレは、意識を手放した。
〜〜〜

「だが、この程度で臆する我等では無い！」
私はプレッシャーを跳ね除け一気に距離を詰め、大きく縦に切りかかる。
だが、マオはそれを体を半身ずらし紙一重で躱した。
私の攻撃に続きヴィータがアイゼンをマオの胴目掛けて横に振るう。
しかしそれもしゃがむ事で躱される。
私も立て続けにレヴァンティンを振るう。
横に薙払う様に、縦に両断するかの様に、
それに合わせヴィータも嵐を思わせる程激しい攻め、
だが、やはり‘当たらない’
我等の攻撃が全て紙一重で躱され、掠りもしない。
有り得ない。もはやそう述べる他は無い。
一度距離を取り、私とザフィーラで接近し、ヴィータが中距離から援護、さらにシャマルがバインドを狙う陣形に変え再び攻める。
「‥全て視えているぞ。」
今まで黙っていたマオが口を開き、私達に向かって来た。
〜〜〜

…先程彼は、‘全て視えている’と呟いた。
まさにそうなのだろう、現に私達四人はあらゆる手を尽くしたが彼に一撃すら与えていない。
私は彼には‘未来’が視えているのでは無いかとすら考えてしまう。
私達は全員肩で息をしているのに対し、彼は汗一つ掻いてはいない。
何故なら彼は全ての攻撃を紙一重で躱し、反撃してくるのだ。ザフィーラがいなければとっくに全滅していてもおかしくは無いはず。
私達が勝てる確率なんてほぼ皆無…だけど、これは想いを賭けた譲れない戦い、はやてちゃんを救う為、絶対に負けられない！
「‥ふん、お前達は本当に愚かだな…
お前達のしていることはまるで無意味な事なのだと何故気付けん？」
言葉を発する彼の口調は普段のそれとは異なり厳しい物だった。
そしてその言葉の中にはとても聞き捨てられないものがある。

私達のしていることが無意味な事？
「私達は、はやてちゃんを助けたい！
その為には闇の書を完成させるしかないの！
何故無意味だなんて言うの！」
「‥ふん、救う方法をただ一つと決め付け、あろう事かはやてを自分達の手で殺める道を選んだことを無意味と言わずになんと言う？」
「それは一体どういう事だ！？」
「‥ふん、分からないか？
闇の書を完成させてもはやては助からないと言っているんだ。
それどころか完成した闇の書は、主であるはやてを食らい、暴走した挙句に世界をも破壊するだろう。」
まさか、そんなはずは無い。と否定の言葉を発する事が、何故か出来なかった。
「そんな訳あるかっ！
闇の書の事は守護騎士であるアタシ達が一番よく知ってるんだからな！」

私が言えなかった言葉をそのままヴィータが伝える。
だけど、この違和感は一体…？
「…ふん、なら聞くが、何故お前達はアレを闇の書と呼ぶのだ？
本当の名は別にあるだろう。
…夜天の魔導書という名がな…」
それを聞き、私達は言葉を失った。
言われてようやく思い出した…
確かにアレは闇の書などと言う名では無く、夜天の魔導書という名だった。
「そんな…どうして…？」
ワカラナイ…そんな大事な事を忘れる筈が無いのに…
「ふん、元々は主と共に旅をし、魔法を記憶する為に作られた物だったが、歴代の書の主が力を求めて改竄を重ねる内に歪みに歪んでしまい、今の主の命を蝕み、破壊をもたらす闇の書になってしまったと言う訳だ。」
もうヴィータですら何も言えなくなってしまっている。
分かるのだ、彼の語る言葉は全てが真実であると。
「…なんで最初にそれを言ってくれないんだよ！
最初っから言っててくれればこんな無駄な争いしなくて済んだのに！」
ヴィータちゃんの言い分は的を射ているが、この場に限っては全く見当違いの不正解だ。
「違うわ、ヴィータちゃん。
話を聞こうとしなかったのは私達で、マオ君は力を持って私達が話を聞く様にしたのよ。」
「つまり私達は、マオに完全に負かされたと言う事だ。
傷の一つも無いままにな…」
「ふん、つまりは人の話は最後まで聞けと言う訳だ。」
敵いませんね、マオ君には…
いつの間にか空を覆っていた雲は流れ、明るい月が私達を照らして

いた。
～～～

マオの力の源はその技量と経験だ。
力こそは年相応なのだがマオの持つ技術、経験、覚悟はたかだか１０年程度で築ける物では無い。
もう一つはあの蒼い状態時の性格の変化。
私は最初はアレをマオでは無い誰かかと思ったが、よく考えると戦闘スタイルや諭す様な物いい等、マオと類似する箇所が以外と多い。
もしかしたらアレこそが在りし日のマオなのではないか…。
以上の理由を持ってマオは本当はもっと年をとっていたかも知れないと言う仮定を立てられる。

…いや、考えて無駄か…
私はマオの髪を一撫して立ち上がると、ある事に気付いたので寝ている主はやてに向けて、一言呟く…
「この様な時間にシャワーを浴びる事を御許し下さい。」
～～～

〜
二つに分かれた道は、静かに再び一つに戻る。
力と事実が一つの想いを打ち砕き、騎士達に新たなる決意と希望をもたらした。
もう道を違える事は無いだろう…
あとはただ、真っ直ぐ前へと突き進むのみ、
全ては、家族全員の笑顔の為に……〜

第１１話～結束は必然～

―――――――――――――――――――――

…ここは、何処だ？

暗い、暗い、何も無い空間。見えないだけで何かがあるかも知れないと思ったが、やはり何も無い。

体に感じる浮遊感。地に足すらついていない無いのだから何も無いと考えるのが妥当だろう。

真っ暗闇の筈なのに、何故か自分の体は見えている。何か無いものかと手を伸ばすが、掴めるものはただ虚空のみ。

…ああ、これが夢という奴なのか…

今まで夢というものを見た事が無かった為に確信を持てないのだが、こんな状況ではそう考えるのも仕方が無い事だろう。

マオが現状を夢と判断した途端、急に辺りの景色が変わった。

暗い事には変わりないが、地面があり、自然があり、空があり、命があった。

しかし、その全てが〈ある〉では無く、〈あった〉と言うべき悲惨な光景。

地面も、自然も、命も、空すらも。全てが破壊されているその景色は、まさに地獄と呼ぶに相応しかった。

「…なんなんだ…これは一体…！？」

大地は裂け、木々は倒れ、岩は粉々に砕け散っている。

人に始まり猛獣や悪魔の様なもの、果ては竜等の超常生物ですら命の灯が消え去ってしまっている。

そんな地獄の様な場所に存在するものがたった一つ。

人の形のそれは、膝を着き、小さな少女を抱えていた。

当然少女も既に生きてはおらず、体の何処にも力が入っていない。

少女を抱える人物は俯いている為表情は見えない。その背中を見つめていると景色がぼやけ、再び変わる。
　今度は知っている場所だった。レイと出会ったあの世界だ。
だが、おかしな事に状況がさっきまでの景色と酷似している。
荒れ果て、見るも無残な姿となった世界。
そして倒れ伏す多くの管理局の魔導師らしき者達、あちこちには大破した戦艦の用なもの。
　そして、遂に知った顔を見つけた。
クロノやユーノ、アリアにロッテ。
更には家族であるレイに、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラが騎士服をボロボロにして倒れている。
オレは叫んだ。何度も、何度も。だけどその全てが声になる事は無く、状況は何も変わらない。
そして、遂に見つけてしまった…。
力無くうなだれたはやてを抱える、蒼黒（そうこく）の魔力に身を包んだ、蒼い瞳の自分自身を…。
　そのおれ自身は、はやてを抱えたままにカイと戦闘していた。一瞬、この状況を作り出したのはカイなのかと考えたが、直ぐにそれは間違いだと分かった。
何故なら、カイはまるてオレを止めようとするかの様にオレだけを狙って攻撃しているのに対し、蒼いオレは只無差別に、まるで世界を破壊しようとしているかの様に力を振るっていた。
その表情は、怒りも何もなく、不気味な程に無表情だった…。
　これは、夢なのか…？
　これが、夢なのか…？
　分からない。だが…これはまるで……――――――
～～～

とする時間が長くあるのだが、今日はそれが無い。
それゆえにあの夢の事をはっきりと覚えている。そして昨日の出来事も…。
昨日の事は途中から記憶がぼやけて殆ど分からないが、四人が蒐集を中止してくれた事は何故か分かったので少し嬉しくなった。
…今日、皆に全てを話そう。
そう考えながらはやて達のいるであろうリビングに向かった。
～～～

まだだ、皆には悪いがまだ振り向く訳にはいかないんだ！
後ろを向いたまま動かないマオに全員が不思議がるが、レイがあることに気付き、声を掛ける。
「そういえば今朝からマオにお客様がみえていますよ。」
「「「「「「あっ！」」」」」」
：レイ、お前はなんていい子なんだ…！
レイの言葉を聞き、クルッと回りテーブルに向かう。
「そういえばカイってお客さんやったっけ～」
とか
「自然過ぎて忘れていました。」
とか
「そうかっ！我、客だったのか！」
とか
しまいには
「マオ、よく気付けたな。」
なんていっているが、
まあ、いいか…。
：いや、よくないだろう、負けるなオレ！馴染み過ぎだ！せめて自覚位しておけ！
様々な思いを胸に、取り敢えずイスに座り、レイの頭を撫でてやる。
「……んっ」
と、目を瞑り気持ち良さそうにしているレイを見ていると気分が落ち着いてくる。
なにやらヴィータとはやてが、
「レイばっかりズルイー！」
とか
「わたしもーわたしもー」
なんて言っているが、華麗にスルーしておいた。
「：なぜお前がここにいる…」

ようやくオレはこの不自然の元凶たるカイに問う事が出来た。
するとオレの前にご飯の盛られた茶碗が置かれた。
「話は全て食事が終わってからだ。
なにしろ我は貴様のせいで腹が減っているのだ。
そこの二人！食前だぞ少し大人しくせんか！」
カイはオレの問いを受け流し、まだ騒いでいた二人を注意したりと場を仕切り始めた。
：言っている事は間違いでは無いのだが…お前…客だよな？
しかしオレも食べ物の魔力に抗う術は無く、奴の事は“普通や常識の通じない存在”として受け入れることにした。
：その方が楽だろうしな…
いただきますをしようとした時、オレはようやくレイの頭を撫で続けていることに気付いた…
「：顔が赤いようだが、大丈夫か？」
「あっ、いえ…ただ、その…少し…恥ずかしくて…。」
「：そうか、悪い事をしたな…すまない。」
「いっ、いえ！不快と言う訳では無くて、その…むしろずっとして欲しいと言うか……」
最後の方は声が小さくてよく聞こえなかったが……はやてにヴィータ、そんな物欲しそうな目でオレを見るな…
「ええい、貴様ら！いつまではしゃいでいるつもりだ！食事が始まらんだろう！」
「：お前こそタダ飯食おうとしている癖に場を仕切るな…」
「なにを！？仮にも客人である我に向かってその物言い…礼儀を知らんのか！」
「：お前を客として招待した覚えは無い…我が家の朝食を食えるだけ有り難いと思うんだな…」
「言わせて置けば～」
あーだこーだ。あーだこーだ。

―――――――――――
二人の言い争いは食事が始まっても続いていた。大体はカイが何かと細かく指摘して、マオがそれに反発をし、更にはやて、ヴィータ、レイにまで飛び火していると言った形だった。

『暖かいな…このぬるま湯に、何時までも浸かっていたいと思う私は愚か者なのだろうか…』
『いいえ、そんな事無いわ…出来る事なら、この平穏が続いて欲しいと私も思っています。』
『我等家族が力を合わせれば、
…たとえどんな壁が立ち塞がろうとも乗り越えていけるさ。』
『そうだな……』
子供5人が騒いでいる中、大人3人は一時の平穏をかみ締めていた。
～～～

お空も割れちゃってる何も無い所で男の人がポツンといたり、マオがわたしを抱えて暴れたりしている夢や。」
カイ、はやてを始め、今いるオレを含めた8人が揃って同じ夢を見ている。
これは偶然では無いだろう。しかし、何故こんな事が…？
「あと、起きた時にこんな者が手の中にあったんよ。」
そう言ってはやてが見せてくれたのは透明なクリスタルだった。
しかもオレ以外の7人は皆同じクリスタルを持っていた。
…どこかで見た覚えがある気がする。
少し考えると直ぐに分かった。
…あれはラグナロクの表紙に付いていた物だ。
ラグナロクを取り出して確認した所、やはりあった筈のクリスタルが無くなっている。
しかし、クリスタルは八つ全て無くなっている。オレはクリスタルを持っていないので一つ合わない…
…これがラグナロクの起動に必要な事なのか？
まあ、良い機会だ。ここで皆にオレの知り得た事全てを話すとしよう。
「…皆、聞いてくれ。大事な話がある。」
〜〜〜

を完成させる必要がある。
だから、オレ達に蒐集を行う許可をくれないか？」
今、マオが主はやての説得を行っている。
マオの話は驚くべき内容だった。
我等があのまま無断で闇の書を完成させてしまったらと考えたら…
……
我等が一番よく知っている筈の闇の書の異常…ただそれを聞いただけでは到底信じられない事だが、あのマオが言った様に、我等は闇の書の真の名である夜天の魔導書という名を忘れていた。
さらに、あの御方…開闢王様の存在が話の信憑性を上げている。
あの御方には何度かお会いした事があるが、そのいずれでも気軽に声を掛けて下さり、唯一我等を〔一つの個〕として見てくれた御方だった。
朝いきなり訪ねて来られた時は驚きで心臓が止まるかと思った程だ。
「でも、わたしは…わたしなんかの為に誰かが傷付くのが嫌なんよ…。だから…」
「：はやて。お前が誰よりも優しいのは知っている。
だが、考えてみてくれ、：はやての回りには、誰がいる？
はやてがいなくなったらオレ達はどうすればいい？
オレ達はな、他の何を犠牲にしても、たとえ自分の誇りを捨ててでも、はやてに生きていて貰いたいんだ。」

マオの言葉に何か気付く事があったのか、我等を見渡す主はやてに、頷く事でマオと同じ考えだとお伝えする。
「わたし、あほやった。皆の気持ちを全然考えておらんかった…。
でも、わたし達は、誰かの犠牲の上の平和で…心から…笑えるんやろか…。」
主はやては優しすぎる。マオはなんと答えるのだろうか…。
誰もが傷付かない世界なんてありはしない。
永い時を過し、多くの主に仕えてきたが、そのいずれもが争いに満

ちていて、安らぎなど、…どこにも無かった。
私には主はやてにこの現実をお伝えする勇気が無かった。それゆえに我等は主やマオに黙って蒐集を行う事にしたのだ。
けれども彼は、さも当然かの様に言った。
「‥なら、犠牲なんて出ない様にしよう。
誰も傷付かないとまでは言わない…。だけど、幸いまだ少し時間に余裕がある。
‥だから、オレ達が作って見せる。はやてが、心から笑える未来を…！」

……！
「でっ、でもさ！蒐集するには相手を動けなくなるくらいダメージを与えなくちゃなんないし、そもそも蒐集したら魔力を殆ど奪う事になるから…はやてには悪いけど、マオが言うみたいに簡単にはいかないと思う…」
ヴィータの言う通り、今までの経験からして、マオの言う様な犠牲を出さずに蒐集を行う事は容易では無い。
「‥その事については恐らく大丈夫だ。
この件に関してある組織の協力者がいる。」
「ある組織の協力者…？一体それは…」
「‥それはな、時空管理局だ。」
マオの言葉にはやてとレイは？マークを浮かべ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータの四人は驚きの表情を浮かべていた。
「しかしマオよ、過去に管理局は我等を幾度も捕らえようとしてきている…罠の可能性は無いのか？」
「‥罠の可能性は無い。
はやて、ギル？グレアムという人物を知っているか？」
「グレアムって、わたしのお父さんのお友達で、お金の管理や生活の援助をしてくれてるあのグレアムおじさんの事？」
「‥そうだ。その人は時空管理局の重鎮でな…

はやてを助けたいと今回の協力者として手を貸してくれている。
あの人が独自に闇の書について調べてくれたお陰でオレも色々知る事が出来たんだ。
ついでにラグナロクを渡してくれたのも、カイを紹介してくれたのもあの人だ。」
マオと開闢王様が信用なさっているのだから心配は無用か。見ればザフィーラ達も納得している様子だった。
「：はやて。オレの考えはこうだ。まず、出来るだけ傷付けない様に動きを封じて蒐集をする。その後は治療をし、元気になるまでそばにいてやる。これならば万が一という事も起こらないだろう。」
確かにそうだ。今までたったの四人でのみ蒐集を行って来たから考えもしなかったが、多くの人数がいれば傷を負わせずとも拘束でき、更にその後のケアまで行える。流石はマオだ…。
「：どうだ、はやて。これならば問題無いだろう。…ん？」
見ると主はやては俯いてしまっていた。
「主はやて、どうしたのですか？」
「んっ、いや、なんでもあらへん。
ただ、嬉しかったんや。わたしなんかの為に皆が必死になってくれているんが…。
こんなに良い家族がいて、わたしは世界一の幸せ者やな…！
もう何も文句言ったりせえへん…。
夜天の主として、一家の一員として、皆にお願いします…
わたしを助けて下さい！」
「「ああ！」」
「「「はい！」」」
「微力ながら…」
「我も手を貸そう。」
～～～

る。
あとは、このラグナロクを起動させるほうほうだが、やはりあの夢とクリスタルだ関係しているのだろうか？
「マオ君、これは私の憶測ですが、あの夢はマオ君の過去と未来だったのでは無いでしょうか。」
「：何故そう思う？」
「理由としては幾つか。
まず、最初の全てが壊れた様な世界と、次の私達が倒れ、マオ君とカイさんが戦っている世界の二つが酷似している事は皆分かったと思います。
この内最初の世界をマオ君の過去…前世か何かと仮定すると、過去であの様な体験をしたマオ君が、未来で同じ様な事が繰り返されてしまうと警告をしているとは考えられないでしょうか？。」
「：つまり、何らかの形でオレが暴走してしまうと言う事か…。」
「そして恐らくその鍵が、あの蒼き力…
マオ、あの力は一体何なのですか？」
「蒼き力…？先日オレは四人を止めようとしていた途中から、急に全てが蒼く染まった感じがして、その後の事をよく覚えていないんだ…」
オレ達が考えていた時、殆ど喋らず黙っていたカイが口を開いた。
「恐らくクリスタルが我等の下へ来たのは、我等にやるべき事があるからだろう。
ラグナロクは想いを力に変える能力があると製作者が言っていた。
その事とも何か関係があるかもしれん。
夢に関してはラグナロクを通してマオと我々が繋がっているという考えで間違いは無いだろう。
あの蒼い力については異常そのものと言っていい。我も見ていたが、あれはマオ自身の感情の抑制が利かなくなる事で起きる、まさに暴走状態なのだろう。」

「あの光景から察するに、主はやてが倒れる事が暴走のトリガーなのだろう。」
「だったら、もう暴走の心配はねーな！なんせはやてはアタシ達が守るからな！」
「ラグナロクもきっと我等の想いを分かってくれるさ。主はやてをお救いしたい…この偽り無き想いを…！」
はやてを救う事が出来る明確な道が示された事により皆の表情は明るい。
特にヴィータなんかは今直ぐに蒐集に行きそうな位やる気だ…
…もう不安なんてどこにも無い。
オレ達家族が力を合わせれば、出来ない事などありはしないのだから…。
「よし、そうと決まれば、マオ、お前にはやるべき事があるだろう？」
「……あっ」

「どうしたんや？やることって？」
はやてが小首をかしげながら聞いて来る。
「…はやて…オレは管理局の執務官試験の勉強の為にしばらく家を出なくてはいけない…
最低でも一月は帰れないかもしれないが…大丈夫か？」
〜〜〜

まった。」
「いえ、私は嬉しいです。
生まれた時より、…いえ、生まれる前から備わっていたこの制御者
としての能力が、他ならぬ家族の為に使えるのですから…」
レイの言葉に思わず笑みが零れてしまう
「…フッ、優しいな…レイは…」
「あなた程ではありませんよ。」
強い光に飲まれて消えていく二人の顔には、少しの間とはいえ家族
と分かれるというのにも関わらず、希望に満ちた笑顔があった。
それはきっと、離れていても、目には見えない強い絆で繋がってい
る事を知っているから…

人物設定１

今回は少し息抜き気分でオリジナルキャラクターの設定やステータス等を書こうと思います。
未だに本編の主人公のあの人が登場しておらず、本編一話にすら到達していないという状態ですけれど、なんとか書き続けようと燃えておりますので、見放さずに読んで下さると嬉しいです。

八神　マオ
性別：　男
年齢：　約１０歳位
（マオ自身の記憶が曖昧なので正確には分からない。）

容姿：　髪の色、瞳の色は共に黒。
顔立ちは整っていて、格好いいや、かわいいというよりは綺麗といった印象が強い。
性格：　普段は寡黙で無愛想。家族に優しく、必要な事のみを話す傾向がある。
（それが必要とあらば結構喋る。）
特徴：　常時眠そうな顔をしている。
はやてやレイの事になると人が変わった様になり、予想外の事態にとても弱く、時々フリーズする。
朝にも弱く、放って置くと昼近くまで寝ている。
最近はシグナムの働きがあって早朝にも起こされれば起きれる様になった。
（その分、起床後３０分から１時間はぼーっとしている。）
好きな食べ物：　はやてやシャマルが作る料理全て。リンゴ。

食べる事が好きで、食事にはそれなりの執着を見せる。実は味覚オンチであり、甘すぎる物や、辛すぎる物、明らかに怪しそうな物を好んで食す。

趣味：　読書と家事全般

嫌いな物：　騒音、雑音。落ちない汚れ。　黒光りするG

魔法体系：古代ベルカ式

魔導師ランク：A＋

：魔力量だけを見ればはやてをも上回るが、元々別体系の魔法を使用していた為に、リンカーコアを通して魔力に変換する行程で多大なロスが生じ、更にデバイスの補助が無い為魔法戦は苦手である。しかし、それらを差し引いたとしても卓越した戦闘技術がある為にA＋と、割りと高ランクである。

魔力変換資質：凍結

使用魔法：元々扱っていた物と、ヴィータに教わった古代ベルカ式の2種類がある。

［ノーザンインパクト］（N？I）

：マオが最も得意とする魔法。

手の平に収束した魔力を、腕を前に突出し、腕自体を砲台とする事で放つ。なのはのディバインバスターに相当する魔法。

ディバインバスターと比べると、威力に劣り、速さが上回る。

［ノーザンストライク］

四つの魔力弾を発生させ、放つ魔法。

なのはのディバインシューターに相当し、一つ、一つの威力は上回っているが、弾数や特に誘導性能が大きく劣っている。
元々マオが魔法の制御を苦手としている為、ほぼ直線でしか進まず、一度だけ曲げる事が出来る。
使用する魔力量の割に牽制程度にしか使えない為、あまり使う機会は無い。

［北央天星ポラリス］
開発途中の大技。
魔力の圧縮、縮小を得意とするマオが、武器に魔力を纏わせて戦うシグナムやヴィータを参考に開発した。
Ｎ？Ｉの応用で、普段は腕に集中させる魔力を腕では無く脚に集め、その魔力を極限まで圧縮し、とどめて置く。そして、その魔力により強化された脚で蹴りを放ち、ヒットと同時に圧縮していた魔力を開放する事によりゼロ距離でＮ？Ｉを当てる事を目的としている。
蹴りによる物理攻撃と魔力による魔法攻撃の両方を同時に行うこの技は、今マオが使える技の中でも最高の技である。
だが、未だに未完成で、圧縮時の魔力ロスが多く、更に完璧に圧縮しきれずに漏れ出す魔力のせいで動きが鈍る等、コンパクトさに欠ける。

［Ｆｒｅｅｚｉｎｇ　ａｔ　ｍｏｍｅｎｔ］
瞬　間　氷　結
（フリージング？アット？モーメント）
たまにやっている指パッチンの事
対象の事を周囲の空間ごと一瞬で凍結させる事により動きを封じる技。

バインドの様な技だが、一度食らうとある特定の人物以外は単独で抜け出すのは非常に困難。
とても強力な技だが、技をかける際、対象の魔力を起点にしてその周囲を凍結させる為、対象が離れた場所にいる場合は上手く捕捉出来ないので、どうしても凍結範囲が大きい大規模な技になってしまう。

経緯：　ある夜に流れ星の様にはやての家に降って来た、正体不明の少年。
その後、はやての家族となり共に暮らす様になる。

誤解から守護騎士達と戦闘をするが、無事和解し、はやてと共に四人を家族として迎え入れる。
ある世界の研究施設でレイと出会い、ラグナロクの適性者であると告げられた。
その後、レイを家族に加えたマオは、一家総出ではやてを助ける作戦を開始し、その中心に立っている。

マオ（紅）
シグナム達ヴォルケンリッターの四人と始めて戦った時、怒りをトリガーにしてなった状態。
普段のマオと比べると、魔力量が数倍に膨れ上がっており、技の精度も格段に上昇していたが、詳しい事は不明。

マオ（蒼）
シグナム達ヴォルケンリッターの四人が蒐集に行くのを止めようとした時、悲しみをトリガーにしてなった状態。
普段のマオよりも冷たく、厳しい態度を取る。別人格かどうかは不明。

能力：超感覚
相手の仕草、目の動き、重心の位置、音、癖、呼吸等ありとあらゆる情報から動きを先読みし、行動する。
多くの実戦の中で積み重ねた技術と経験があって始めて養う事の出来る、生き残る為に必要不可欠な能力。
マオ（蒼）のソレは戦闘のプロと言える守護騎士四人を相手に、全ての攻撃を完全に読み、避けきる等、明らかに人間離れしている。

―――――――――――――――――――――

八神　レイ

性別：　女
年齢：　６歳位（見た目）
容姿：　髪の色は銀で瞳の色は薄い藍色。
性格：　マオに引けを取らない無表情っぷりだが、感情はしっかりとあり、遠慮がちで思慮深い。

特徴：　元となった人物の影響で幼い容姿をしているが、ラグナロクの制御の為に膨大な量の知識を与えられている。その為、見た目よりも大人びた思考が出来る。
知識はあるが、意味を理解出来ていない物が多く、様々な情報があるテレビをよく見ている。

特に昼ドラを好んでいる。
（レイ曰く、様々な人間関係を見れて参考になる。らしい）
はやてに多少のライバル意識を持たれている。
好きな物：　マオ。家族。小動物。
経緯：　闇の書について独自に調べを進めていたグレアムが、カイとその仲間のハザマの二人と出会い、対闇の書の解決策としてラグナロクの研究が始まった。（プロジェクトＲ）
そして、制御の研究を担当していたハザマがプロジェクトＦのデー

タを参考にして、違法と知りつつも短時間で造り上げた。
その後、何故かハザマは研究施設を破棄し、行方を眩ましている。
そして、マオと出会った後、八神家の一員となり、家事の手伝いをして生活している。

―――――――――――――――――――――

カイ　（開闘王）
性別：　男
年齢：　１２歳
容姿：　赤い瞳、金色の髪。
黙っていればただのイケメン少年。
性格：　誇り高く自分にも他人にも厳しい。
特徴：　色んな意味で規格外
圧倒的なカリスマ性により、グレアムの部下の男性局員には崇拝され、女性局員には可愛がられている。
魔法体系：　？
（ベルカ式魔法が確立する以前から魔法を使っていた）
魔導師ランク：　？

使用魔法：
［ヘブンズ？ゲート］
門と呼ばれる特殊な魔法陣を展開し、攻撃を行う。
天の門と呼ばれるこの魔法は、特大の門を展開して砲撃を放つ。
その威力はなのはのスターライトブレイカーをも上回り、門を使用する魔法はタメの動作が無いので速射、更には連射が可能。
［プレリュード］
光の門と呼ばれるこの魔法は、手の平大の門を展開し、魔力弾を放ち攻撃を行う。
門の数や威力を調節でき、誘導性能は無いが大量の門から光の魔力

弾が連射される様は、まるで光の雨の様。
クロノやマオに向けて使ったのもこの魔法。
（威力は抑えていた。）

経緯：　ベルカの最初にして最強の王。
開闢王時代に、外世界からやってきた強大な敵と戦い、倒しきれずに封印した。
しかし封印間際にある理由から呪いをかけられ、子供の姿にされた状態で不老不死にされてしまう。
それ以降は呪いの効力により殆ど世界に干渉する事が許されず、世界が滅びる姿さえ見ているしか無かった。
子供の体が自身の力に耐え切れないので力を殆ど使えない状態。
最近封印が弱まってきてしまっていて、そのせいで［七つの大罪］と呼ばれる敵の部下7人が様々な世界に現れて封印を完全に解こうと力を集めているのを知り、それを止めるべく世界を駆け回っていた。その際に管理局からは［金色の悪夢］として警戒される様になった。
ある日、所持していたラグナロクの適性者が現れた事を知り、それに着いて調べていた過程でグレアムと知り合い、強力する事になる。
［七つの大罪］に管理局の重鎮であるグレアムと手を組んだ事を知られない様に、［金色の悪夢］の名を利用し、情報を一定以上の地位の人間にしか開示しない事で、管理局にとって危険で邪魔な存在という事を際立たせて隠れ蓑にする作戦を立てた。
現在は八神家の一員として暮らしており、不在のマオに代わりはやてを守っている。
～～～

更にストーリーもほぼオリジナルで、なんとか原作を交えながらやっていきますのでご了承下さい。
あと、次回から最後のおまけでマオやはやて達に少しおしゃべりして貰おうと思っています。
（そうゆうのやってみたかったんです！）
では、また次回をお楽しみに！

第１２話～贈物は必然～

時が過ぎるのはあっという間で、今日はとうとう試験当日。
時空管理局本局にある試験会場、その一室に一人の少年がいた。
彼の名は八神？マオ？グレアム
入局したての新米局員だ。
その彼を別の部屋からモニター越しに見る男がいた。
「あれがあの［歴戦の勇士］と名高いギル？グレアム提督の養子か。」
男はまるで値踏みするかの様な目でマオを見つめていた。
「はい、彼はその高い能力と提督直々の口添えにより、入局してから一月と経たず、更に１０歳という若さで執務官試験を受ける事になっています。
私の私見ですが、いくら提督の養子といってもいきなり合格とは行かないでしょう。」
部屋にいたもう一人の男は別のモニターで試験の最終準備をしている。恐らく試験官なのだろう彼は、今までの経験からかマオは受からないと言った。
彼の意見は妥当だろう。局員１０人に聞けば１０人が無理だと言う様な物だ。
「それはどうかな？
私は合格する方に賭けるよ。
フッ、私は彼が気に入ったよ、彼が無事に受かって実技試験までやって来た場合、その試験官は私が勤める。」
そう言うと男は部屋から出て行った。
「……あの人に目をつけられるとは、彼も災難だな…」
部屋に一人残った試験官の男はモニターに映るマオ見ながら、呟いた。
～～～

出来る事は全てやった。
基本的にヒマ人らしいアリアとロッテの手伝いも助かったが、オレの事をグレアム義父さんから聞いたクロノが来てくれたのが大きかった。
クロノも一度目は落ちて二度目で受かったと言っていたが、奴が一度落ちるとは…どれだけ難しいのだろうか？
『これより、筆記試験を開始します。』

アナウンスが聞こえ、自分が弱気になっていた事に気付いたマオは、一度目を閉じ、集中した。
…そうだ…やれる事はやったんだ…
…あとは…出し尽くすだけ！

〜〜〜

無事に合格出来ればスムーズに事を運べる予定だが、もしも合格出来無かった場合、局の機密事項の結晶と言える最新式デバイスを渡す事が非常に困難になり、それこそ最悪グレアムが犯罪を犯す形になってしまう。そんな事にはなって欲しくない、だけど今は待つしかない。そこから来る焦りがロッテを落ち着かせないのだろう。よく見ればアリアもいつもより暗い印象がある

「アリアお姉様、ロッテお姉様、マオなら大丈夫です。本気になったマオは出来ない事の方が少ないのですから。」

不安で落ち込んでいる二人を励まそうとするレイだが、明らかに過剰な物言いをしている所を見ると、やはり気が気でないのだろう。

「そうだな、レイの言う通りだ。僕の見る限り過去問をやった彼の答案はほぼ完璧だった。あの調子なら合格は間違ないだろう。」

クロノはマオについての詳しい事情を知らない為にリーゼ達が何故あれ程必死になっているかも分からない。しかしクロノはあえて聞く事をしなかった。クロノからしたら、グレアム提督が、リーゼアリアが、リーゼロッテが信頼している…そして自分の恩人でもある男の力になりたかった。ただそれだけの事。

何か事情があるのなら、いつか話してくれると嬉しいな。程度に考えていた。

「ありがとね、レイ、クロスケ。なんか暗い気分が吹っ飛んだよ～」ロッテは先程までとは違うさっぱりとした笑顔を浮かべる。

「良かった…」
それを見たレイも僅かに微笑む。
レイは普段あまり表情を崩さない為に、この微笑みはロッテを刺激する材料としては十分過ぎた。
「も～、レイってば可愛過ぎるぞ～～
食べちゃいたい位だよ～～！
んにゃにゃにゃにゃ～～～！」
叫びながらロッテは向かいのソファーに座るレイへと身軽な猫の様にダイブした。
「また始まったか…。レイには悪いが、ああなってしまってはもう僕にはどうする事も出来ない。」
クロノは遠い目をしながらその光景を眺めていた。恐らく彼も同じ事をされた覚えがあるのだろう…それも、何度も…。

「アハハ、またやってるわね。
クロノ君、矛先がレイちゃんに向かっちゃって、ちょっと寂しいんじゃないの？」
「全く、バカ言わないでくれ。」
アリアがからかった事でクロノはゲンナリとうなだれてしてしまった。
「それにしても、あなたが誰かをあそこまで褒めるなんて、相当買っているのね。」
「僕はただ事実を言ったまでだよ。
彼の能力は群を抜いている。そしてなにより心が強い。」
「クロノ君、勉強を教えている時凄く楽しそうだったよ？
フフッ、気の合う友達が出来て良かったわね。」
アリアの言葉に少し考える
「……友達…か、…そうだな。僕も再び合えて良かったと思っているよ。」
その後もクロノとアリアは軽い会話を続け、ソファーでは未だに

ロッテがレイでじゃれている。
…恐らく全員がマオが試験中と言う事を忘れているのだろう…。
〜〜〜

これで問題無いだろう。
だって知らないし…
「申し遅れた、私の名はブレイブ。
ブレイブ？ソルクラウド執務官だ。」
：執務官だと！？不味い、知らなかったじゃ済まされないかもしれん。
オレは慌てて慣れない敬礼をした。
「失礼しました。自分は八神マオであります。」
ブレイブ執務官は何も言わずにまるで観察するかの様にこちらを見ている。
：あまりジロジロ見られるのは好きじゃないんだが…
「ふむ、訓練を受けていないと聞いたのでどんな物かと思ったが…なるほど…
良い目をしている。純粋な、戦う者の目だ…。
私は君が筆記に受かった場合の実技試験官を勤める事になっていてね。
君と戦える日を楽しみに待っている」

ブレイブ執務官は言いたい事を言ってサッサと行ってしまった。
しばらくその後ろ姿を見ていたが、待合室へ急ぐことにした。

シンプルな内装の廊下を歩きながら先程の男の事を考える。
：奴は十中八九強者だ。それも、恐らくシグナム以上の使い手だろう。
対面した時に感じた事だが、あの男はこちらを警戒していないにもかかわらず全くスキが無かった。
シグナム達は闇の書と共に時間を、世界を渡り、多くの戦場を経験していると言っていたが、そんな彼女達もオレとの最初の戦闘の時は、僅かながらの油断や侮りが原因で敗北している。

自身が強者であるならば、多少の慢心はあって然るべきもの。
ましてや今は戦闘中等では無く、ありふれた日常の真っ直中の筈。
奴は一体どれほどの修羅場を乗り越えて来たのだろうか…。
…考えても仕方が無い…か…。
なんにしろ試験に受からなければ意味は無いしな。
しばらく歩き、ようやく待合室の前へとたどり着いた。
〜〜〜

いな…
見るとロッテはうなだれていて、いつもの元気が微塵も感じられ無い。
「…顔を上げてくれ。オレは別に怒っている訳じゃ無い。
…ただ、ほどほどにしてくれと言いたいんだ…。」

…まるでオレが悪いみたくなってしまっているが、気のせいか？
…いや、気のせいでは無いだろう…
「えっ！怒ってないのかい！？
それならそうと早く言ってくれよマオ坊～
そうだ！そんな事よりさ、試験はどうだった？」
　些か立ち直りが早すぎる気もするが、まあ、いつもどうりに戻ってくれて何よりだ。
　流石にクロノやアリアも呆れ返っている。
だが、やはり慣れているのかロッテの事はあまり気に止めず、今はオレの試験の出来が気になる様だ。
「…試験については特に出来ない問題も無く、中々に良い出来だったと思う。」
「君がそこまで言うとは、これは期待出来るみたいだな。」
「…なにしろ教師が優秀だったからな。
見事に教わった問題が出て来たよ。」
「そ、そうか？僕としても君の飲み込みが早いから教えるのが楽だったよ。」
　クロノは照れているが本当に助かった。
奴が重要なポイント等を解りやすく纏めたりしてくれたお陰で随分勉強がはかどった事は事実。
　もしクロノが来てくれていなかったら、こうは行かなかっただろう…。
「マオ君、お疲れ様です。
さっそく艇に戻って父様に報告しましょ。」

アリアに促されてオレ達は艇へと戻った。
〜〜〜

今回の筆記試験は無事合格だそうだよ。」

……ナニ…！？

「グッグレアム提督、いくらなんでも試験を行った日に結果が来るだなんて…早過ぎませんか？」

：そう、それだ。それが言いたかったんだ…。

オレの思いを代弁するかの様にクロノが疑問を口にする。

「ハッハッハッ。

なに、少しだけ無理を言ってみたのだが、彼等も仕事が早いな。」

：公式の試験にすら口を挟めるとは…

オレ達にとって都合がいい事は確かだが…職権乱用と言うのでは無いか…？

「だが、一つだけ問題があってね…。

実技試験の試験官なんだが…」

：つまり、それは…

「ブレイブ？ソルクラウドか…？」

「「「！？」」」

奴の事を知っているのか、クロノとリーゼ達は驚きの表情を見せる。

「その通りだが、マオ君は彼とあった事があるのかな？」

「：試験が終わった後に廊下でばったりとな…。

：ところで、何が問題なんだ？」

一見まともそうに見えて、実は戦闘狂（バトルマニア）だったりとか…か…？

「うーん、率直に言うと、彼が試験官を勤めた試験での合格者が未だにいないんだよね。」

リーゼ達の話によると、ブレイブ？ソルクラウド執務官は、戦闘技術、情報処理能力共に並ぶ者のない、管理局の中でも最高クラスの魔導師であり、高い能力と悪を憎む強い心故に【断罪の剣】（ジ

ャッジメント）と言う二つ名で呼ばれているらしい。
「彼は十数年前に私達がある世界で保護したんだよ。そしてその後、局員になった。
その時から既に強かったが、数年前にある事件が起きてね…。
彼は八人の部下を全て失い、自身も一年間の療養を余儀無くされたんだ。
あの事件から彼は変わったよ…。
誰にも頼らず、何者にも屈せず、昇進をも蹴って、一人最前線の現場で犯罪者をおっていた…。
彼はきっと若過ぎるマオ君の覚悟を試す為に試験官になったんだろうね。」
グレアム義父さんの話を聞き、考える。
失う痛みとはどれ程の物なのか…
オレは、守るべき物を失ってなお戦えるのか…
戦う覚悟とは何なのか…。
痛みを知るあの男に、痛みを知らないオレが勝てるのか…？
揺らぐ…想いが…自信が…覚悟が…。
場の雰囲気は暗く、クロノでさえも奴の名を聞いてから苦い表情を浮かべている。
この場の誰もがもう無理だと諦めかけていた…。
だが、レイだけは違った。
「マオなら大丈夫です。
マオには成さねばならない事があるのだから、こんな所で躓く筈がありません！」
力強い言葉だった。
場の空気を一瞬で変える不思議な力を持った…
そうだ…誰が相手かなんて関係ない…
オレははやてを救う。ただそれだけだ！
「…すまないな…レイ。
少し弱気になっていた様だ。

だが、もう大丈夫だ。大切な事を思い出したからな…」
　頭を撫でてやると気持ち良さそうにしている。
「変な話をして悪かったね。
筆記試験合格だけでも十分凄い事だ。
気を取り直してお祝いといこうじゃないか。
アリア、アレを持って来てくれ。」
そう言ってグレアム義父さんはアリアが持って来た物を受け取った。
「さあ、マオ君。君への入局祝い兼筆記試験合格祝いだ。
これは上司としてでは無く、父親として君に贈りたいと思う。」
　渡された小さな箱を開けると、蒼い宝玉の埋め込まれたブレスレットが入っていた。
「それはマオ君専用のデバイスだ。
従来のインテリジェントデバイスを遥かに超えるＡＩを搭載している、最新技術の結晶。…そう、アレのカギの一つだよ。」
　左手にはめてみるとピタリとフィットする。
「…ありがとう…義父さん…」
　直接言うのは照れるが、ここは言わなくてはいけない。…そんな気がした。
「マオ君、その子の名前はジークフリート。既にあなたをマスターとして認証しているからいつでも起動しますよ。」
「起動させる時は名前を呼んであげるんだよ、マオ坊～」
　アリアとロッテが簡単に説明してくれた。　…よし、やるか…
これがオレの戦いの真の始まり。
全ては、はやてを救う為…
「…ウェイクアップ！
起動しろ、ジークフリート！」
　現れたのは蒼白の一対の短剣。いわば双剣って奴だ。
「初めまして、マイマスター。
私は貴方の力の代行者。全ては貴方の願いのままに。」
　不思議と手に馴染む握り心地。まるで何年も使っていた様な錯覚…

「‥よろしく頼む。お前の力を貸して貰うぞ」
「なんなりと。貴方が望むなら、望むだけの勝利を約束します。」
‥待っていろ、ブレイブ？ソルクラウド。
一週間後の実技試験、お前を倒して必ず合格してみせる！
〜〜〜

（紹介しよう！この少女こそがこの家の頂点、八神はやてだ。
彼女のポイントは、ズバリ関西弁な所だ！
更に、その性格故の物腰柔らかな喋り方！足が悪くても強く生きようとする不憫&健気キャラ！
運動出来ない身でありながら、太る事の無きスタイルは将来の可能性を示唆している！
…今この家が楽園状態なのもはやてのおかげだってんだから言う事無いぜ…）
挨拶を済ませ、顔を洗い終えたオレはリビングに向かった。
「おはよう、マオ。今日は早いのだな。
今日はいい天気だし、午後から手合わせをしないか？」
「…オハヨウ、シグナム。
わかった午後からだな…」
（早速現れたな！そう、このシグナムこそが我が家の究極兵器と言える存在…
…そう！巨乳である！！
男にとってそれは夢！それは希望！そして私はこの手に掴んだ！
ハプニングの名の下に！！
…例えるならば…まるでマシュマロの様…
ま、正直な所、巨乳には興味無いんだけどね…
…ジェントルメンな私は胸なんてない方が良いのさ！
そう、私は貧乳派だ！！）
シグナムははやてと共に病院へ行ってしまった。
少し遅いが朝食を食べる為に部屋に入ると、出来たての様な朝食が一人分だけ並んでいた。
「おはようございます、マオ君。
さっき声がしたので朝ご飯の準備をして起きましたよ。」
「オハヨウ、シャマル。
わざわざすまない、ありがとう。」
（三人目はシャマルだ！

家事を始め、買い出しからご近所付き合いまでこなす…その姿はまるで主婦！
…私は知っているぞ、シグナムと歩いていた時にご近所のおば様に、
「あら、はやてちゃんのお母さんとお姉さん、こんにちは～」と言われていたのをな！
だが、心配する必要は無い…。
何故なら、シャマルにはドジっ子というレアスキルがあるのだから！
…流石に砂糖と塩を間違えるなんてベタなプレイはもう勘弁して欲しいけどな…）
朝食を終え、洗濯を済ませた後はザフィーラと庭の草むしりだ。
「今日も暑いな、マオよ。せめて風が欲しい所だ。」
「…全くだな。昼はそうめんでも食べようか…」
（…これも楽園に必要な要素さ…。
愛らしい犬耳！揺れ動く尻尾！溢れんばかりの筋肉！
…うん、これも必要なのさ…）
…その後夕方になり、夕飯を済ませたので風呂に入ろうとした時…
「なあ、マオ。今日一緒にお風呂入んない？」
「…ああ。別に構わないぞ」
（キタゼキタゼキタゼキタゼキタゼキタゼ、ヒャッハーー！！
これだよこれ、こーゆーのを待ってたんだよ！
これはアレか？アレなのか？いわゆるツンデレって奴なのか？
流石だ、流石だぜ、ヴィータちゃんよぉー！！
ふふふ、ヴィータは先に入っているからなぁ、これを開ければ、ロリロリツルペタ幼女と、ご対面ってかぁ！！
今行くぜって……グボファー！！
や、闇の書…テメェ…ガクッ）
（不覚にも闇の書に襲撃されたオレは、頭を打って気を失ってしまったらしい。
…ここは何処だ？私は夢でもみているのだろうか…）
真っ暗な周囲を見渡すと、一人の女性が佇んでいた。

（‥！？なんだ…アレは…
紅い瞳、鋭い眼光、長い銀髪…巨乳…
ス…スバラシイ…
‥だが、なんだ？この圧迫感は…睨まれているのか？
‥まっ、まさか！私のこの心の声が聞こえていたりするのか！？
ど、どうすればいいんだ！
ちっ、近付いて来たし！）

逃げようともがくが体は言う事を聞かない。
遂に目の前まで来た女性が悲しい瞳でこちらを見据え、口を開く

「貧乳を求めてはダメです。
貧乳の先に貴方の未来は無い…
ですから私が巨乳の素晴らしさを教えてあげます…」
（‥なん…だと…！？
クールな顔して何を言っているんだコイツはーー！？）
〜〜〜

頭では分かっているさ…こんな事は無意味だと…
だが…！オレの魂が叫ぶ！叫んで叫んで、熱く燃えたぎっている！
さあ打つんだシグナム！紫電一閃を！！
その時私は乳神の下へ召されるだろう！）
意図的にスキを作ったオレは抜かり無く揺れが最もよく見える位置をキープする。
「紫電一閃！」
（見えた！ってグヌリャー！
集中し過ぎて防御の事何も考えて無かった…
しかし、なんだろう…この充足感は…
…我が生涯に一片の悔い無し…！）
この後オレは普通に病院に運ばれ、それ以降、胸に踊らされる事は無くなった…

第１３話～模擬戦は必然～

ここは仮想空間という謎の技術によって造られた部屋だ。
この部屋にはこのオレ、八神マオと、クロノ？ハラオウンがいる。
何故オレ達がこの部屋にいるのかというと…モチロン戦いを、模擬戦をする為だ…
「スナイプイプショット！」
クロノが放った魔力弾は幾度も方向を変えてこちらに迫って来る。
…オレ自身、ああいった誘導操作とかが苦手だから狙っても打ち落とせそうに無いし、避けたりしても直ぐに追って来る…。
下手に逃げたり、守りに回ったりしてもただ状況が悪化してしまうだけ…
いや、だけだった。と言うべきだろうか…

今までだったならば魔法を扱う技術に劣るオレは、高度な魔法戦において敗北は必至…
だが、今は違う。義父より授かった魔導端末（インテリジェントデバイス）
我が剣〈ジークフリート〉が共にいる。
こいつは魔力の制御、効率化、その他細かい調節を重点的にやってもらっていて、そのお陰なのだろう…驚く程体が軽い。
それでも未だベストな状態という訳では無いし、技術の差が埋まった訳でもない。
クロノのスティンガースナイプをギリギリまで引き付けてから魔力弾で相殺し、巻き上がった煙幕を隠れ蓑に利用する。
…さて、どうするかな…
～～～

やはり…強い…！
これは僕に取ってもいい経験になる。
不本意だがロッテに感謝する事になりそうだな…
〜〜〜

いや、こちらが奴を視認出来ないように、あちらもこちらを捉えられないはずだ。恐らく体勢を立て直す為の時間稼ぎだろう…
悪いが、そんな時間は与えない！
こちらが攻撃を仕掛けようとした時、煙の中から何かが飛び出した。
…あれは、フェイク！？
一瞬本人が出て来たのかと思ったが、その大きさから違うと判断する。
続けて今度は四つの魔力弾、マオの魔法の一つであるノーザンストライクが煙から飛び出してこちらに向かって来る。
しかしおかしい。何故正確にこちらへと向かって飛んで来るのだろうか？
躱す事は容易く、難なく凌ぎきるが、魔力弾に気を取られて僅かなスキを作ってしまった。
分からない筈のスキを突かれて、蒼白い閃光が迫り来る。マオのノーザンインパクトだろう。
「ブレイズキャノン！」
ワンテンポ遅れた為に完全に相殺出来ず、少し吹き飛ばされてバランスを崩す。
…彼はこの機を逃さずに攻め立てて来る筈…その時がチャンスだ。
…来た！
体勢を崩した僕に向かって、マオは左手に持った剣で突進と共に突きを放つ。
「スナイプショット！」
僕はキーワードとなる言葉を唱えて、一度は威力の弱まったスティンガーを再び操り、マオの剣を弾く。
僕に向かって来ていた左手の剣を弾き飛ばす事に成功するが、それで終わる筈も無く、マオは右手を突き出そうと勢いをつける。
すかさず右手に持っている二本目を狙い、スティンガーを操り、バインドの準備を開始する。

「これで終わりだ！」
もう片方の剣を弾き、バインドをかければチェックメイトだ。
少し攻め急ぎ過ぎだった様だね。
この勢いはもう止める事は出来ない。カウンターのタイミングもほぼ完璧。
自身の勝利を確信し、それでいて一切の油断をしない様スティンガーを操る。
しかし、突き出された右手、完璧にタイミングを測ったスティンガー、この二つの要素があったにも関わらず、スティンガーは空をきり、剣を弾く事は無かった。
何故？どうして？そんな疑問も視認出来たマオの右手を見れば一目瞭然だった。
答えは簡単。マオは右手に剣を持っていなかったのだ。
マオは突き出した右手の勢いを殺さない様に素早く一回転する。
更に、振り向く途中、弾かれて下に落とした剣とは別の剣が上空より飛来。それを左手で掴んだマオは回転の勢いのままに剣を振るい、寸での所で止めた。
「：どうだ？」
「降参だ。僕の完敗だよ。」

ハァ、負けた…か…
…やっぱり負けると悔しいものだな。
『お疲れ様～二人共戻って来てね～』
～～～

貴方の力はとても強大なモノ。
私はマスターと共に戦える事を誇りに思います』
…これが、我がデバイス…ジークフリートか…

魔力制御等をジークに任せた事により、その分余裕が生まれ、今まで以上に攻撃に集中出来る様になった。

ジークは謙遜しているが、紛れも無い事実だ。
実際の所、オレ一人だけだったならばクロノに勝つ事は出来なかった筈。
「…何を言っている…
それを言うならオレの力はジークあってこそ…だろ？
それに、オレもお前見たいな優秀なデバイスが共に戦ってくれて安心出来るよ…。」

「…マスター…／／」
…なんて言うか…リーゼ達がオレの為に調整してくれただけあってか、気が合うと言うか、波長が合うと言うか…
「和んでいる所済まないが、先程の戦闘の時、あの煙の中でどうやって僕の位置を把握出来たんだ？」

「…それはな…」

「それにつきましては私が説明しましょう」
説明しようとしたオレの言葉を遮り、アリアがモニターを使いながら説明しだした。
「まず、ここですね。この爆煙の起こる前の時点で、マオ君はクロノに見えないよう、ジークフリートの一本を上空に投げているわ。
その上空、つまり爆煙の外にあるジークフリートの視覚情報をもう一本のジークフリートが共有していた為にマオ君はクロノの位置

を正確に把握出来たんですよ。」
…よく見ているな…
「そんな馬鹿な！？
もう何でもアリだな…」
「クロノさん、マオを相手にイチイチ驚いていては身が持ちませんよ。」
「…クロノ、そんな目で見るな…
それとレイ、今少し失礼な物言いしていなかったか？」
～～～

金色の長い髪を二つ結びにした少女に声を掛ける。
「スミマセン、ユーノ？スクライアという人が居ると聞いているのだが、何処に居るか知らないだろうか？」
なるべく丁寧に言って見たつもりだが、少女は明らかに疑いのまなざしをこちらに向けている。
『：ジークよ、オレは怪しまれる事をしているのだろうか？』
『恐らく、マスターが名乗っていないのが原因かと』
：ああ、そういえば名乗って無かったのか…とんだ盲点だったな
「あの…失礼ですがあなたは？」
少女が警戒するのも仕方が無い事だと今更ながら気付く。
今のオレは少女から見れば身元不明の不審者にあたるのだろう。
『：すまない、紹介が遅れ…ました。
オレは、時空管理局？巡航Ｌ級６番艦セイレーン所属、八神マオ…です。
本日は、リンディ？ハラオウン提督への使いとしてやって来きました。
その際に友人であるユーノ？スクライアに案内を頼んでいたのですが、見当たらなくて…」

詳しく説明し、局員だと証明した事でようやく警戒を解いてもらえた。
「私はフェイト？テスタロッサです。
では一応、艦長に確認を取りますので、確認が取れ次第、私が案内します」
そう言って少女、フェイト？テスタロッサは何処かと、恐らく艦長のリンディ？ハラオウンと通信を始めた。
『マスター、ユーノ？スクライアはいいのですか？』
『：ああ、別にいいさ。連絡の取れない奴が悪い…』
そうこうしている内にフェイト？テスタロッサは通信を終えたらしい。

「確認が取れました。
では八神さん、艦長室まで案内しますので付いて来て下さい」
…なんだろう…何か物凄い違和感を感じる
違和感の正体をつき止めようと深く考え込む。
急に深刻な表情を浮かべたせいか、フェイト?テスタロッサが心配して声を掛けて来た。
「八神さん、どうしました?
どこか具合でも悪いんじゃ…」
……！それか！
ようやく違和感の正体をつき止める事に成功した。
「…テスタロッサ…さん
出来れば、オレの事は八神では無く、マオと呼んで欲しい。
どうにも馴れなくて…
あと、オレは入局して間もない新米だから、敬語じゃ無くても大丈夫です」
そう、ただ単純に八神と呼ばれた事が殆ど無かったのが、感じた違和感の正体だった。
「分かった。じゃあマオって呼ばせて貰うね。
なら、私の事もフェイトって呼んで。
それと、私も最近、嘱託魔導師として入局したばかりだから、敬語じゃなくていいよ」
…敬語じゃなくていいとは、中々嬉しい事を言ってくれる…
〜〜〜

しばらく話しながら歩いていたが、どうやらようやく到着したらしい。
「失礼します。リンディ艦長、八神マオさんをお連れしました。」
「ご苦労様、フェイトさん。
あっ、フェイトさんにも用があるから、このままここに居て下さいね。」
オレ達を出迎えたのは緑色の髪の優しそうな女性だった。
この人がリンディ？ハラオウン提督。あのクロノの母親と聞いていたので、もっと堅物なのかと思ったが、どうやらそうでも無いらしい。
「：リンディ艦長、これを、グレアム提督が直接渡して欲しいとの事で、自分がやって参りました。」
オレは実は持っていた紙袋をリンディ艦長に渡す。
「ご苦労様です。あなたがマオ君ね。
グレアムさんから話は聞いていますよ。
実に優秀な息子さんだとか…」
グレアム義父さんは一体何を話したのだろうか…
リンディ艦長とは初対面の筈なのに妙に自然体だな、これはこの人の人柄故か、親同士の雑談あってこそか…
：両方だろうがな
「あっ、そうそう、一週間の間マオ君をアースラで預かる事になってますから、フェイトさん、色々教えて上げて下さいね。」
：おい、聞いていないぞ…
：だが、確かにこちらにいた方が効率がいいな。
リーゼ達はレイと共にもう一つのデバイスの調整を始めてくれている為に忙しく、クロノは元々アースラチームだしな。
「分かりました。よろしくね、マオ。」
「：こちらこそよろしく…お願いします。
リンディ艦長、フェイト。しばらくお世話になります」

「あら、二人共名前で呼び合うなんて、もうすっかり仲良くなっていたのね。これなら心配無さそうね。」
…何か心配する事があったのだろうか…
部屋の空気が和やかなのはいいんだが、オレは誰と模擬戦をするんだ？
照れているフェイトにはあえて触れず、オレがここに来たもう一つの理由を話す。
「…リンディ艦長、クロノから強い模擬戦の相手がいると聞いているのですが、ご存じでしょうか？」
実技試験までの時間はそれ程多くは無い。それまでにジークとの戦闘経験を少しでも多く積んでおきたいのだ。出来れば今すぐにでも始めたいくらいだが、流石に相手の顔くらい見ておきたい。
「その話も聞いていますよ。実技試験の為の練習相手を探しているとクロノが紹介しようとした人物なら既にここにいますよ」
既にいると聞いて部屋を見渡すが、この部屋にいるのは自分とリンディ提督とフェイトのみ。
模擬戦の相手がリンディ提督である可能性は極めて低く、この部屋に限り無く存在の薄い人物が潜んでいるなんて事も無いだろう。
…残るは…
「…まさか、彼女…フェイトだったりしますか？」
最初に会った時、その瞳を見た瞬間に思わず綺麗だと思ってしまった。そして同時に感じた静かながらも強く、優しき意思。まさに戦う者の瞳。
フェイトが魔導師である事、高い実力を持っている事も初めから分かっていた。
だけど、はやてと同じ年頃であろう少女と戦うのは何故か抵抗を感じるのだ。
…頼む、違うと言ってくれ。出来れば別の、屈強そうな男性が相手だとやりやすいのだが…

「そのまさかだったりするのよね～
こう見えてもフェイトさんはとっても強いのよ。
部屋はもう準備してあるからいつでも出来ますよ」
オレの願いが叶う事は無く、リンディ提督は笑顔で厳しい現実と手際の良さを見せつけてきた。

「マオがクロノの言ってた人だったんだね
なんだか嬉しいな…
じゃあ早速だけど模擬戦しない？」
フェイト本人はやる気十分と言った感じだ。
直ぐに模擬戦をやりたいのか、もう移動を始めていて、既にドアの前にて「ついて来ないの？」と言わんばかりにこちらを見て小首をかしげている。
「：では、リンディ艦長、失礼します。」
「いってらっしゃい。なるべく怪我をしない様に気をつけて下さいね。」
リンディ艦長に挨拶をし、フェイトを待たせまいと、気持ち急ぎ気味で歩み寄った。
～～～

「アルフ、そんなに睨んじゃダメだよ。
この人は八神マオさん。
ほら、クロノの言ってた人だよ。」
フェイトの説明で納得したらしく、直ぐに警戒を解いてくれた。
「いきなり悪かったね。
アタシはフェイトの使い魔のアルフってんだ。よろしく頼むよ。」
「：八神マオだ、よろしく。」
アルフは表情をコロコロと変えるので、裏表の無い性格なのだと分かる。
先程の対応からも主人であるフェイトを第一に考えているのだろう。
：しかし、その絆の深さは逆にオレの知っている使い魔との関係と若干違っている為に何か事情がある様に思えるが、聞くのは無粋というものだろう…
アルフにこれから模擬戦をする事を説明し、共に部屋へと向かった。
〜〜〜

とても強そうには見えないけど…」
　アルフが何気なく質問する。
私も気になっていたのだけど、アルフは単刀直入すぎるよ
「ダメだよアルフ、そんな事言ったら…。
ゴメンね、マオ。アルフに悪気がある訳じゃないんだ。」
　気を悪くして無いかな…
表情を伺うが、相変わらずの無表情なので感情が全く読めない。
「：強いかどうかは、やってみれば分かるさ…。」
「クロノと同じ事言うんだね。
まあいいさ、でもフェイトは凄く強いんだよ
まあ、なるべく直ぐにやられない様に気をつける事だね。」
　マオの強気？な発言に対抗しているのか、アルフはまるで自分の事の様に誇らしげに私を褒める。嬉しいんだけど、ちょっと気恥ずかしいな。

　その後、目的の部屋を前にしてた時、後ろから大きな声が聞こえて来た。
「マ～オ～！こんな所に～～！！」
　大きな声と共にこちらに近付いて来る凄い勢いの足音。
振り替えるとユーノがマオ目掛けて一直線に走りよってきていた。
「マオ！何で指定した場所で待ってないんだよ！
全く、リンディ艦長に報告してみればもうここに向かっているって言うし…」
　こちらに到達したユーノはマオに散々文句を言っている。
でも、ユーノがクロノ以外の人に思いっきり文句を言っている所をみるのは珍しいので新鮮に感じる。
これが男友達って奴なのかな？
「：そう大声を出さないでくれ。
オレが悪かったよ、許せ」
　マオが謝った事により、ようやくユーノは落ち着きを取り戻した

みたい。
　それにしても、クロノもユーノも、何処でマオと仲良くなったのかな…今度聞いてみよう。
～～～

本来ならこれはエイミィさんの管轄なのだが、そのエイミィさんはクロノの手伝いで忙しい為に、許可を貰って僕がやっている。
「二人共準備はいいかい？
勝敗の決し方はどちらかが降参するか戦闘続行不可能になるかで決まるから。」
二人共準備は出来ているらしく、落ち着いた表情をしている。
お互い今日会ったばかりの筈なのにこれだけ落ち着いていられるのは、流石に場慣れしていると言った所だろうか。
「ユーノはあのマオって子と知り合いなんだろ？
クロノは随分とあの子を買ってるみたいだし、アンタも文句言いながらも楽しそうな顔してる…
アンタら一体どんな関係なんだい？」
自分では分からないが、そんなに楽しそうに見えてしまっているのだろうか
顔に手をあてて確認しようとしたが、直ぐに意味の無い事だと気付いて止めた。
「僕とクロノは一度マオに助けられた事があるんだよ…
命を救われた、って言うと少し大袈裟かもしれないけど、とても強い相手にやられる寸前だった僕達の前に現れて、その相手を一人で倒しちゃったんだ。
その後は管理局に入って、執務官試験の勉強を始めたマオの手伝いをクロノと一緒にしている内に仲良くなっていってね
つまり、マオは僕達にとって恩人であり、同時に友達なんだ」
話を聞いたアルフは、何故か驚いた表情を浮かべている。
今の話にそこまで驚く程の内容があったのだろうか？
「クロノとアンタが勝てない相手に勝ったってのはどう言う事だい！？
クロノの情報ではマオの魔導師ランクはＡ＋の筈だろ？
それがなんで…」

クロノめ、ちゃんと全部話してないのか、間違なくわざと話を省いたんだろうけど…
「マオのランクがA＋なのは本当だよ。
ただ、魔法についてはなのはよりも経験が浅く、更に今日始めてデバイスを使用する様になったんだって。
…クロノが言ってたよ、マオが優秀なデバイスを持っていれば、魔導師ランクはSランクを超えてるだろうってね。」
アルフの表情はますます険しくなってしまった。
話した通り今のマオはデバイスを持っている。
つまり、クロノの言っている事が確かならマオはSランクオーバーの魔導師と言う事になる。
…確かにこれは知らない方がフェイトの為になるのかもしれない。情報の少ない状況での戦闘はよりよい経験になる事だろう。
モニターに映る二人は、お互いに名乗り合い、始まりの合図を待っている。
「準備はいいみたいだね…
レディ、ゴー！」
〜〜〜

けて飛んで行く。
彼はこれを防ぐつもりなのだろうか？
だが、八つそれぞれが別の軌道を進んでいる…それら全てを防ぐ事は至難の技の筈。
攻撃は直撃、手応えもあるのだが、これで終わるとは考え難い。
初撃に続き、一気に背後へ回り込んで接近を試みる。
やはり彼は健在。しかも驚く事に全くの無傷だった。
あの攻撃をどうやって防いだのかは分からないが、今彼は正面向いていてこちらを見てはいない。
上手く背後を取れた私は彼の背中目掛けてバルディッシュを振るう。
だが、彼は‘こちらを見ていない’のにも関わらずに左手の剣で受け止め、更にもう片方の剣で反撃をしてきた。
それをなんとか躱して直ぐに後退し、距離をとる。
何故？どうして、どうやって防がれた？
確かにこちらを見失っていた筈なのに…
私が疑問に囚われた一瞬のスキだった、
顔、肩、脇腹、脚の計四か所を、蒼い閃光がギリギリ掠らない距離で横切って行った。
閃光を放ったのはモチロン彼だ。見れば手に弓を持っている。恐らく彼のデバイスの形態の一つなのだろう…
私の死角からの攻撃を防ぎ、反撃、更には離脱する私への追撃…彼は間違なく、あえて攻撃を外したのだ。それは何故か？
考えて見れば最初のフォトンランサーの時も、防御に入らず躱す事だって容易だった筈…。
「…フェイト…お前の力はそんな物じゃないだろ？
…お前の全力を見せてくれ」
ああ、そうか…私は彼の実力を計ろうとしていたけど、計られていたのは私の方だったんだ…
私は慢心していたんだ。ランクが全てじゃないって分かってた筈

なのに、軽んじてた…下に見ていたんだ、彼を…
彼には…マオには、私のそんな心も見透かされてたのかな？
戦闘の前までは眠そうな顔をしていたのに、今は凄く強い…まるで「なのは」を思わせるような瞳で私を見据えている。
ああ、なんて強いんだろう
私が今まで出会って来た誰よりも強い…
遥かに格上の人、そんな相手に出し惜しみしている暇は無い！
「分かった…。
ここからは…全力で行く！」
「…そう来なくては…」
何故だろう…不思議と胸が高鳴って来る…
戦っている最中なのに、自然と笑みが零れてしまう…
今日会ったばかりの筈なのに…
マオの事をもっと知りたい…
マオに私の事をもっと知って貰いたい…
この気持ちは一体なに？

第１４話～フラグは必然～

実技試験まであと二日

マオはフェイト達との度重なる模擬戦を通して、ジークフリートの機能の大半を把握する事が出来た。

その中の一つ、家族である騎士達の魔法がストレージされている事を知った時は軽い驚きと共に、何か胸に込み上げて来る物を感じていた。

今日もまた彼等は来るべき試験当日に向けての模擬戦をおこなっている。

もちろん実技試験というものは試験官との直接戦闘のみである筈は無く、様々な種類の技術を見るのだが、その点は既にリーゼ姉妹とクロノに完璧と言わせる程である為、これ以上やる必要性は無いと言えた。

やはり問題となるのはブレイブ執務官との戦闘訓練となる。

通常、負けたら即不合格になるという訳では無いのだが、ブレイブ執務官が担当した試験の際に、その全員がほぼ問題ない試験内容だったにも関わらず、戦闘訓練に敗北した事により不合格を告げられている。

ブレイブ執務官の意図は分からないが、マオも如何に他を完璧にしたとしても、戦闘訓練に勝利しなければ合格は望めないのだ。

～～～

毎回チャンスがあったのに、その全てが逆に私達のダメージになってしまっている。
まるで動きを読まれている様…いや、もしかしたら攻撃を誘導されているのかもしれない。
「……ト……フェ…ト…フェイト…」
ん？誰か呼んでる？
ふと顔を上げると直ぐにマオと目が合った
自分と彼の距離は僅か鼻先数センチ、今にも当たってしまいそうな距離だ。
理解した瞬間、全身に電気が走ったかの様な錯覚を覚え、一気に顔が熱くなる
「マ、マオ！？どっ、どど、どうしたにょ？」
想像以上に動揺していたらしく、呂律が上手く回らない…
は、恥ずかしい…／／
変に思われて無いかな…
「：フェイト…クロノ達が呼んでるから戻ろう…」
彼はいつもと変わらない様子で思わず座り込んでいた私に手を差し出してくれる。
私はその手をとり、共に訓練室を後にした。
ひとまずは変に思われて無い様で良かった……のかな？
～～～

がら少数精鋭の機動部隊、その試験部隊の隊長に就任している。
その頃既に管理局の中でも指折りの実力者だったブレイブ執務官の部隊、‘機動特務隊’は、主にロストロギアの回収や犯罪グループの検挙等で高い実績を残し、機動部隊の有用性を実証している。
その時のブレイブ執務官は剣のアームドデバイスを使った接近戦を得意としていたらしいんだ。」
これだけ経歴を調べて置いて情報が少ないと言うのだからな…
「：その時の…とはどういった意味合いだ？」
クロノの顔が渋る所を見ると、何か話堅い内容になってしまうのだろう事が分かる。
だが、クロノは意を決して話を続けてくれた
「話を続けるが、余り面白くない内容だから注意してくれ。
数年前のある日、機動特務隊はロストロギア探索の際に、何者かの襲撃に遭い、一夜にして全滅している…
生き残ったのは隊長のブレイブ執務官のみ、他の八名いた隊員は全員遺体すら発見されず、現場の検証とブレイブ執務官の証言により死亡が確定とされている。
その事件で重傷を負ったブレイブ執務官は、一年間の療養の後からは誰とも迎合する事なく、たった一人で行動する様になった。
それからのブレイブ執務官の功績は数知れず、その気になれば将官クラスになっていてもおかしくは無い程だ…
…ここが問題の点なんだが、事件後のブレイブ執務官は戦い方を大きく変えていて、なんでも九つの剣を使って戦うらしいんだ。
色々と調べて見たんだが、結局詳しい情報は手に入らなかった…

すまない、ここが重要な所だというのに…」
クロノは本当に申し訳なさそうな表情を浮かべている。
自分の仕事も忙しい筈なのに、このオレの為に時間を割いて調べてくれたのだろう…
そんな奴を攻め立てる理由は何処にも無いと言うのに、この男は

すまないと謝罪の言葉を言う…
「：謝らないでくれ、それだけ調べてくれれば十分だ…
ありがとう、クロノ」
「元気だしなよクロノ
そんだけ調べてたら誰も文句なんて言わないよ
それにアタシにはマオが負ける所なんて想像もつかないよ…フェイトもそう思うだろ？」
アルフがフェイトに話を振るが、フェイトはどこか張り詰めた、思い込んだ表情を浮かべている
「どうしたんだい？フェイト…」
「ううん、何でもないよ…
…ただ、そのブレイブ執務官って人、たった一人で…失った部下の人達の敵（かたき）をとる為に…復讐の為に戦ってるのかなって…」
……
「うん、確かにそうかも知れないね…
それなら昇進を蹴ってまで前線に残ってるってのも頷けるし…」
クロノとユーノも同じ事を考えてはいたのだろう。無言、沈黙がその証拠と言える。
：だが、本当にそうなのか？
オレが出会ったあの男は、とても復讐の為に戦う様には見えなかった。
確かに復讐心は人を突き動かし、命すら賭けるに足る要因と言える。
しかし、あの男からはもっと別の…もっと大きな何かがある様に見えたが…、気のせいなのだろうか？
これもやはり考えるのは無駄と言うものか…
他人の心の内なんて、その本人から聞かねば本当の事は分かりはしない…
「：何にせよ、ブレイブ執務官は自身の考えの下に行動しているのだろう…
だが、何であろうとオレはオレの信念を貫き通す…

壁が行く手を阻むなら、それを乗り越え前に進む…！」
そうだ、ブレイブ執務官が何を考えていようと関係ない。
オレは、オレ達は、たった一つの望み、‘はやてを救う’これを成すまで立ち止まってはいられないのだから…
「ねえ、前から気になってたんだけどさぁ、マオはなんでそんなに急いで執務官になろうとしてるんだい？」
「：まだ二人には話して無かったな…
オレが執務官を目指す理由、それは‘大切な家族を救う為’だ…」
～～～

はならない。
…これらの魔法を皆に見せたら驚くかな…
さあ、戦いに集中しよう…
…たとえ四対一であっても負ける訳にはいかないんでな！
～～～

でお互いに進展が無いまま戦闘は長引く。
　もしかしたらこれも彼の計算の内なのかも知れない…
戦闘が長引けばいつかは魔力が底を尽きる。
しかし彼は周囲の魔力を集束して使えるからほぼ魔力切れになる事は無い…
そうなる前に何か手を打たねば…！
　『皆聞いてくれ、このままでは埒が明かない。
…一か八かだが、ボクに考えがある』
　出来ればこんな賭けみたいな作戦は避けたかったが、今は仕方が無いと自分を説得して皆に内容を伝えた。
『確かに一か八かだね…
防がれたら僕達の負けは確実だ…』
『…でも、成功すれば勝てるかもしれない…！』
『やってやろうじゃないか！
マオだってアレは防げやしないって！』
『そうだね、やる価値は十分にある！』
皆の同意を得る事が出来、直ぐに作戦を実行に移す事にした。
「バリア、ブレイク！！」
まず最初にアルフが切り込んで行き、バリア破壊効果のある攻撃を仕掛けるが、バリアの強度が高い為に直ぐには破壊出来無かったが、ユーノのサポートにより反撃を受ける事無くバリアを突破する事に成功する。
「ブレイズキャノン！」
「サンダースマッシャー！」
アルフの拳は剣で受け止められたが、バリア突破に合わせてフェイトと同時に砲撃を放つ。
しかし、ボク達の砲撃は間一髪で回避されてしまう。
だけどそれも想定の範囲内…
事前に詠唱していた空間設置型の拘束魔法、ディレイドバインドがマオの四肢を拘束する。

バインドは直ぐに外されるが、ほんの一瞬の時間を稼ぐ事は出来、
その僅かなスキにユーノの貼った結界に閉じ込める事に成功する。
『ここまでは予定通りだ
ユーノ、アルフ、しくじらないでくれ、頼んだ』

『もちろんやって見せるさ！』
『任せときなって！』
二人を信じて締めの準備に全力を注ぐ。
彼が結界を突破した時が勝負の分かれ目…
　バリイイイイイン！！！
蒼い流星が上空に駆け上がると同時にユーノとアルフのバインドがマオを絡める。
外されても外されても様々な種類のバインドが間隔を置かずにマオを襲う。
これが全三段階に分けられた作戦の第二段階。
マオを結界に閉じ込めて時間を稼ぐのが第一段階、その間に準備した様々なバインドを矢継ぎ早に掛けて外される事の無いバインドを見つける事がこの第二段階に当たる。
『くっ、ダメだクロノ！
僕のバインドはどれも外される！』
『こっちもだよ！』
最悪この場合の事も考えてはいた…
勝率が半減してしまうがやるしかない！
『やっぱりか…二人共少しでも長く彼を止めていてくれ！』
『出来るだけやってみる！』
あと少しだ、あと少し持ってくれ！
『クロノ！もう魔力が持たない！』
　来た！！
『クロノ、こっちは準備完了したよ！』
ギリギリの所で準備が間に合ったみたいだ…

『行くぞ！フェイト！』
『うん！』
頼むから効いてくれよ！
「スティンガーブレイド？エクスキューションシフト！！」
「フォトンランサー？ファランクスシフト！！
打ち砕け、ファイアー！！」
これこそが作戦の最終段階。
発動までに時間が掛かりすぎ、使用すれば殆ど魔力を使い切ってしまう魔法だが、それ故に威力は絶大極まりなく、例え相手がマオであっても耐えられない筈だ。
出来ればバインドで完全に動きを止めてから確実に決めたかったが、ユーノとアルフが魔力の尽きるまで足止めしてくれたお陰で無事命中させる事が出来た。
二人分の超連射は嵐と言う表現でさえ生温く思え、あの時の‘金色の悪夢’の攻撃をも上回っているのではないかという自負さえもてる。
　ようやく全ての攻撃が終了したが、とても大きな爆煙が巻き起こっている為どうなっているのか確認出来ない。
こっちは四人全員がほぼ魔力切れ、この状況で未だ彼が健在だったなら素直に負けを認める他は無い…
「見て、クロノ！
煙が晴れて来たよ」
煙の晴れた先、そこに彼は立っていた。
驚く他無いが彼はあの攻撃を耐え切ったのだ。
しかし、いくらマオといっても流石に堪えたらしく、バリアジャケットは見るも無残に大破している。まさに満身創痍、とても戦える様には見えなかった。
ここで引き分けと言いたい所だが、彼は剣を構えて戦闘続行の意思を見せる。

「…クロノ、あとは私一人にやらせて…
バリアジャケットを修復しない所を見ると、マオも防御の為に魔力を使い切ったんだと思う…」
確かにその可能性は高い。
だが、魔法無しの接近戦で彼に勝つ事は…
いや、それを言っては切りがないな…
「すまない、あとは任せるよ。
くれぐれも無理はしないでくれよ」
分かった。そう言い残してフェイトは飛び立っていった。
〜〜〜

それで、ダメージを負った事により体が鈍くなり、反撃にまで手が回らなくなったと考えれば…
　断定するには早いかな…いや、そうは言ってられない！
最後の力を振り絞り、より速く、より鋭く戦斧を振るう。
あと少し…あと少しで届く…！
やっぱりマオの思考は私のスピードに追い付き切れて無い。
あとは、速さを保ったままで今の薄くなってる防御を突破出来れば！
「ハァァァァ！！」
死角に回り込み、渾身の一撃を叩込もうとするが、威力を意識した事により振りが大きくなってしまった。
　それを見逃すマオではなく、カウンターの一撃が迫る。
　お願い！間に合って！
全力で振り切った戦斧はマオのカウンターに間に合うが、ぶつかりあった衝撃に手が耐えられず、バルディッシュを上空に弾き飛ばされてしまった。
同時にマオの剣を一本弾いたが、彼にはもう一本剣がある。
　マオの攻撃をなんとか貼れた障壁で防ぐも、地面へと叩き付けられてしまう。
真上からとどめを刺さんと降下して来る。
くっ、避けないと！
必死に動こうと試みるが、マオの捕縛系魔法、ｆ・ａ・ｍが掛けられているのか、体が全く動かない。
「・・これで終わりだ…！」
また負けちゃったな…
そう思った時だった。
上空に弾き飛ばされたバルディッシュが落下して来るのが見え、
　ガン！！
大きな音をたてたバルディッシュは見事にマオの後頭部に直撃し、
その意識を刈り取った。
意識を失ったマオは当然飛んでいられる筈もなく、真下にいる私に

向かって落ちて来た。
私はそれを受け止め様と試みるが、未だに魔法は解けておらず、指先一つ動かせないでいた。
- - - - - - - - - - - - -
お互いに魔法で守られている為に怪我はないが、今の状況は非常に不味い、不味すぎる。
現状を説明するならば、動けない仰向けの私に、意識を失ったマオが覆い被さる様に寝ているのだ。
　あぅぅ、はっ、恥ずかしいよ／／
心臓の鼓動はかつて無い程の高鳴りを見せ、頭は今にも沸騰してしまいそう…
顔は今頃真っ赤に染まっている事だろう、見なくても分かる
この荒ぶる心臓の鼓動でマオが目覚めてしまうのでは無いかと思う程だが、対するマオは起きる気配を見せない。
真横から聞こえる寝息のなんと気持ち良さそうな事か…
だが、その寝息が私の胸の鼓動を加速させている事は誰も知らなくていい…
　『だっ、誰か早く助けてーーーーー！！』
声にならない叫びも空しく、この地獄…いや、天国？から開放されるのは五分程たってからの事だった……
～～～

「…すまない。ボクも少々熱くなりすぎてしまっていた様だ…」
流石にやり過ぎたとは思ってるらしく、反省の言葉を述べる。
「まあ、クロノ君達が全力で、しかも四人掛かりで戦っても圧勝出来ない人だから、しょうがないと言えばしょうがないか…」
部屋に設置されているモニターには先程の模擬戦の映像が映し出されていた。
「今回は収獲が多かった…
四人掛かりとは言え追い詰める事が出来た事と、フェイトの言っていた事…
少しずつマオの強さの秘密が見えてきたよ…」
モニターはマオとフェイトの一騎打ちの場面を映している。
「なんだかんだ言ってマオ君に勝ちたいんだね、クロノ君は」
「……まあね。」
〜〜〜

それが何故ベッドで寝ているんだ…
「…フェイト…イマイチ記憶が曖昧なんだが…
あの模擬戦はどうなったんだ…？」
気になった事を聞こうと話を振ると、何故かフェイトに視線を逸らされてしまった。
しかも若干顔が赤くなっている様に見えるが、気のせいか？
「あの…えっと…あの模擬戦は…」
- - - - - - - - - - - - - - - -
「…なるほど、追い詰めた所でバルディッシュが後頭部に直撃、そして意識を無くした、か…」
そうか、それならばこの後頭部の痛みも説明が付くな…

「…これはオレの負けの様だな…
少しばかり残念だ…」
「そんな事無いよ。
私のファランクスシフトとクロノのエクスキューションシフトで決められなかった時点で私達の負けだよ…
やっといてなんだけど…大丈夫だった？アレ…」
「…まさかあそこまでやられるとは思わなかった…
正直、死ぬかと思ったよ…」
別にそんな事思っていないが、なんとなく言って見た。
フェイトの反応は容易に想像出来るが…
これが意地悪と言うものか…
「えっ！？そっ、そんなにやり過ぎちゃってタかな！？
ごっ、ゴメンね、マオ…」
想像通り、と言うべきか…
フェイトはしどろもどろになっている
だが、ちょっと可哀相だったか…
「…ふっ、冗談だよ…

危なかったのは事実だがな…」
んっ？なんだ、反応が無いな…
フェイトが何の反応も示さない事を不思議に思い、顔の前で手を振ったり、頬をつついてみたりしたが、
「…マオが…笑った…？」
などと呟きながら、完全に上の空状態になってしまっている。
声を掛けてもダメだったので、仕方なく魔力を変換して小さな氷を作り、それをフェイトの首の後ろ辺りにつけてみると…
「ひゃぁぁぁぁぁ！？
なっ、なに！？」
やっとお目覚めらしいが、少々取り乱し過ぎだろう…
「…取り敢えず落ち着け…
余りにもボーっとしていたのでちょっとな…
…どうした、大丈夫か？
顔はおろか耳まで真っ赤になっているぞ…」
熱でもあるのではないかと思い、おでことおでこを合わせて確かめるが、幸い熱はないみたいだった。
「…熱はないらしいな…」
「わっ、わたっ、わたっ、私、みんなにマオが起きたって知らせて来る！！」
フェイトは椅子がガタンと倒れるのもお構いなしに、全速力で部屋から出て行ってしまった。
「…通信すればいいだろうに…
慌ただしい奴だ…
にしても、急に真っ赤になったり、他の奴を呼びに行ったりして…
ジークよ、何故だか分かるか…？」
話す相手がいなくなったので、フェイトの奇行とも言える行動の答えを得ようと待機状態のジークに話し掛ける。
「…マスター…少し自重しましょう…」
返ってきた言葉は答えとは言えず、少し冷たい感覚すら覚えた。

…一体オレが何をしたと言うんだ…？
　試験当日までもう間もない。
マオがこの問いの答えを得る事は…まず無いだろう…
～～～

マ「‥ちょっとまて…！？
オレは誑かしてなんかいないぞ！誤解だ…！」
は「試験勉強に行ってからろくに連絡もよこさんで、他の可愛い子とフラグ立てるなんて…」
マ「‥まて、それを言っては身も蓋も無いだろう。
それに、連絡してないのはこう…、信じ合ってて合格するまでは我慢する…的な奴だろうに…」
は「このコーナーに身も蓋もありはしないんやー！！」
マ「（‥不味い、はやてが暴走し始めている…
一体どうすれば…）」
フ「はやて、あんまり私のマオを苛めちゃダメだよ…？」
は「フェイトちゃん！？」
マ「‥おい…」
は「ちょっとフェイトちゃん！
いきなり出てきて“私の”とはどういうつもりなんや！？」
フ「…？何か問題でも…？
私がヒロインなんじゃ無かった？」
は「ちゃうわー！！
正ヒロインはマオの家族で家主であるわたしや！
こっちにはなんたって、半年も一緒に暮らしてきた実績があるんやで！」
フ「時間が全てじゃないよ…
私はこの約一週間、朝起こす事から始まり、三食、訓練、その他の時間、その殆どを一緒に過したんだ…
マオは既に私のモノだよ…！」
マ「‥おいおい…」
は「ふふふ、墓穴を掘ったなぁ、フェイトちゃん…」
フ「どういう事…！？」
は「わたしはマオに手料理を振る舞い、マオの手料理を食べているんやで！

そんな艇の中の食事を一緒に摂るのとでは、格、が違うんや！」
フ「……！！」
は「それになぁ、フェイトちゃん…
わたしにとっては、おはようとおやすみは当たり前…
わたしはなぁ…
マオと一緒に、同じベッドで寝た事があるんよ！！！」
フ「…なっ、マオ、本当なの！？」
マ「：ああ、事実だ…」
は「どやっ（キリ！）
素直に負けを認めるんやな！」
フ「…フ、フフフ…出来る事ならこれは使いたくなかったけど、仕方ない…！
見せてあげる！私の奥の手を！！」
は「！！なんやその写真！マ、マオがフェイトちゃんに覆い被さってる！？
マオ！一体どういうことや！？」
フ「…あの時のマオは…とても情熱的だった…／／」
マ「：まて、なんだそれは！
そんな事をした覚えは無いぞ！」
は「ア、アカン…（ブルブル）
それはアカンでフェイトちゃん…」
マ「：どうしたんだ、はやて…？
何故そんなに震えているんだ？」
は「…わたし、ちょっと用事を思い出したんで…
ほな、さいなら～！シュタ！」
マ＆ａｍｐ；フ「……？」
？？？「ディバイーン、バスターーー！！」
マ「：な、なんだ！？グォァァーー！！」
？？？「…まだ生きてるの…
フェイトちゃんを誑かす邪魔者は…排除しなきゃなの…」

フ「…ガクガク、ブルブル…」
???「待っててね、フェイトちゃん
今すぐあの人の息の根…止めて来るから…ニコッ」
マ「…なんだこの破壊力は…
…奴は化け物か…!?とにかく逃げねば!!」
???「スターライト、ブレイカーーー!!」
ドゴーーーーーーン!!!!

は「(…マオは生きてるやろか…
まあ、次回までには復活してるやろ…)
では、今回のオマケはここまでとなります。
お付き合いいただきありがとうございました!
次回またお会いしましょう!
ほな、さいなら〜〜」

第１５話～激昂は必然～

…遂に、遂にこの日が来た…
実技試験当日。
オレ達の今後の分岐点となる日だ…
調子は上々、前日は休む事に専念した為に体調面はバッチリだ。
…そろそろ時間だな…
「…じゃあ、行って来る…
わざわざ見送りに来て貰ってすまない、ありがとう、皆…」
それぞれの見送りの言葉を一身に受け、オレは会場へと向かった…。
～～～

「……」
部屋の景色ががらりと変わり、広い荒野になった。
ブレイブ執務官は既にバリアジャケットを身に纏い、片刃の長剣を手にしている。
恐らくアームドデバイスなのだろう。
「：ウェイクアップ…」
オレは静かにジークを機動させる。
馴染む双剣をいつもどうりに左は順手、右は逆手で持ち、構えは取らずにゆっくりと歩を進める。
…不思議と緊張も不安もありはしなかった。
勝つ為の算段や絶対の自信がある訳でも無く、
ただ、この胸にあるのは…たった一つの理想のみ…

「準備は出来ている様だな。
ではこれより、執務官採用試験、実戦訓練を始める！」
高らかに始まりが宣言され、それと同時に正面から切りかかった。
オレの高速の初撃はいとも容易く防がれたが、小回りの利く利点を活かし、距離を離さないまま、更に攻め立てる。
しかし、一撃を入れる事も叶わず、力ずくで距離を離された瞬間に頭上に奴の剣が迫る。
なんとかジークをクロスさせて受け止め、押し返して大きく後退する。
：強い…まるでスキが無かった…
純粋な剣技ではオレに勝ち目は無い…シグナムならば奴といい勝負が出来るのだろうがな…
「どうした、少年！
君の力はそんなものではないだろう！」
ブレイブ執務官は手にしていた剣を逆手に持ちかえ、まるで槍投げの様な構えをとり、後退したオレを追撃せんと投げ放った。
その勢いは凄まじく、正面で受ける事は危険と判断したが避ける事

は叶わず、魔力障壁で力点をずらし、どうにか後方へと受け流す。
…パワーが段違いだ…それに速さまである。
だが、今ので奴は武器を手放した…チャンス…！
…と、言いたい所だが不用意に近付く訳には行かない…
ブレイブ執務官の投げ放った剣を受け流した直後、ジークを連結させて弓の形態にし、魔力を矢として４発放つが、ブレイブ執務官は瞬時に手にした二本目の剣で全て切り裂いた。
…同形状、二本目の剣…
やはりクロノの情報通り複数本の剣を所持している様だな…
障壁で防御に回ってくれたら儲け物だったが、そう上手くは行かないか…
～～～

だけか…
あの様子では両方、か…
「…何故お前がその事を知っているんだ！？」
少年は猛スピードで接近してきて切り掛かって来るが、動揺しているのか、動きが直線的で単純すぎる…
「その程度で心を乱すとは、なって無いなぁ少年！」
少年の双剣を片方は剣で受け、もう片方は手首を掴む事で止め、掴んだ腕を引き寄せてから胴に蹴りを入れる事で吹き飛ばす。

「どうした、いつまで寝ているつもりだ？
大してダメージがある訳でもないだろうに」
立ち上がり、こちらを振り向いた少年は冷静さを取り戻したのか、先程の様な怒気は感じられない
「…お前が何故はやての事を知っているのか…
…答えないならそれでいい…
…ただ、オレがお前を倒す理由が増えただけの事だ…
…話はお前を倒してから聞くことにする！」
「ハハッ！そうこなくてはな！」
だが、どう来る？少年よ…
先程の切り結びにて剣技の差は理解している筈だ…
「…ジーク、蒼氷術式限定解除…
…次いで、‘一式？オリオン’発動…！」
上手く聞き取れ無かったが、少年が何かを呟いた途端に少年の魔力が増大し、更に手に持つ双剣の刀身が蒼い魔力光を纏った。
恐らく自己強化の類いだろうが、注意する程では無いだろう…
私の見立てでは、ランク的にはＳ－といった所、それではまだ私に勝つ事は出来ないぞ！
「…行くぞ！」
- - - -

マオの底上げされた魔力は自身の純粋な力不足を補い、光を纏った双剣はその一撃一撃をより重く、鋭いモノとしていた。
しかし、力の差が埋まったとしても技量の差が埋まった訳では無く、ブレイブの振るう二本の大剣を相手に、体術や魔法を駆使してどうにか互角の勝負を演じていた。
「少年よ！君も分かっているだろうが、闇の書とは無数の悲劇を生み出してきた第一級危険指定ロストロギアだ！
仮に君が闇の書に救いをもたらしたとしても、どんな理由があろうとその罪が消えることは無い！
現に、管理局上層部には闇の書に怨みを持つ者が少なからず存在する！
下手をすれば君は、救う為にと力を借りた管理局、それ自体を敵に回さなければならない…
それはつまり、‘世界’そのものを敵に回すと言う事だ！！
そうなった時、君ならばどうする！」

ラグナロクと闇の書、及びその計画についてはグレアム等によって極秘の内で進められている。
それゆえにブレイブ執務官の言った様に闇の書の所在が管理局に知られる事にはまずならない筈である。
ただ、ブレイブ執務官が上層部に報告をするとなると話は別になる。
しかし、ブレイブ執務官の問いの意図はそこでは無い。
ありえるかもしれない最悪と言える可能性、それについてのマオの覚悟を確認しようとしているのだ。

「：何があっても…、どんな過去があったとしても…
オレは必ずはやてを救う…その誓いは変わる事はない…！
：例え相手が管理局だろうと世界そのものだろうと関係無い…、はやてに害を為す者…オレはその全てを…全てを破壊してでもはやてを救う…！

…その為に…まず、お前を破壊する！！」

マオの瞳が、魔力光が‘紅’に染まる。
ブレイブ執務官への答え、それは暴力により自身の我を通す事だった。
しかしそれは、はやても、マオ自身も望まなかった道…
かつてその道を選び、進もうとした四人の騎士を止め、少しでも傷つく者が減る道を行こうとしたのは他でもないマオ自身だった筈…
いくら絶対勝利の重圧や、ブレイブ執務官の発言に対する動揺等があったとしても、心の根幹たる想いがそう易々と変わる筈は無い。
ならば、浮かび上がる答えは簡単である。
そう、マオは心の奥底では暴力を、自身の為に他者を犠牲にする行いを肯定していたという事なのだ。
今までは強靱な精神力で感情を押し殺して来てはいたが、ブレイブ執務官の動揺を誘う言動、ここ最近の戦闘訓練に明け暮れる日々、そして何より初めてはやてと離れ離れの生活を送った事が、マオに少しずつ、本人も自覚できない様なストレスを与え、それが切っ掛けとなってマオを硬く縛っていた心の紐を緩めるに至ったのだ。
マオの紅い魔力は膨れ上がるばかりか、雷電となり周囲の物体を破壊する
その禍々しい他を寄せ付けない風貌は、まさに今のマオの心を映しているかの様に見えた。
－－－－－－
先に仕掛けたのはマオだった
そのスピードは先程までの比では無く、纏っている紅い魔力を電気に変換させながら突き進む様は、さながら紅い稲妻と言える。
しかし、地面を抉りながら迫るマオを前にしても、ブレイブ執務官に臆する様子は無く、むしろ残念そうな表情を浮かべていた。
「ハァァァァ！！」
スピードに乗り、幾度も方向転換して翻弄した上で死角へと剣を振

るう。
ガキィィィィン！！
必殺の威力を秘めた一撃…これで勝負は着いたと思われたが、部屋中に甲高い金属同士がぶつかりあう音が響いく。
ブレイブ執務官を切り裂く筈の一撃は、あっさりと受け止められてしまっていた。
「…少年、よもや速いというだけで私を倒せるとは思っていまいな…？」
その後もマオは幾度も攻撃を仕掛けるが、その全てが受け止められてしまう。
魔力も力もスピードも、全ての能力が段違いに上がっていると言うのに戦況は悪くなる一方。攻撃を仕掛けているのはマオだというのに、明らかに押しているのはブレイブ執務官だった。
「ァァァァァァァ！！」
マオは渾身の力を込めて双剣を振り下ろす。
今まで一歩も動かず、腕と剣だけで受け止めてきたブレイブ執務官だったが、とうとう体ごとマオの方を向き、正面から振り下ろされる双剣を受け止めた。
「…いい加減目を覚ましたまえ…
そんな想いの籠らない剣では、何も救えはしない…」
その時のブレイブ執務官の瞳は酷く冷徹で、マオの動きを一瞬止めるには十分過ぎるものだった。
「少し頭を冷やしたまえ…！」
マオは離脱しようとするが、一瞬の硬直が行動を遅らせてしまい、ブレイブ執務官の剣撃をまともに受けてしまった。
吹き飛んだマオは壁と衝突し、切り裂かれた箇所は持ち前の高い防御力のお陰で致命傷にこそなっていないものの、血が溢れていて直ぐにでも治療の必要がある。
壁にもたれ掛かり力無くうなだれるマオは既に紅い魔力を纏っては

無く、意識があるのかさえ怪しかった。
「…先程の君の回答…
世界を相手にしても物怖じせず、更には邪魔する者全てを破壊すると言いきるその覚悟は、全く持って称讃に値する…
だが、その破壊の先に…君の大切な人の笑顔はあるのか…？
先程の様に衝動に身を委ねて戦っていて、壊す物と守る物の区別を付けられるのか？
…あの様子では無理だろうがな。」
静寂に包まれた空間にブレイブ執務官の声だけが響く
マオは未だに動かぬままだが、ブレイブ執務官は言葉を続ける
「だが、私個人は暴力という手段による目的の実現を否定しない。
私は自らの目的は、あらゆる犠牲を払ってでも自らの手で実現させるべきだと考えている。
しかしな、少年…この世に全ての人間が笑っていられる世界なんてありはしないのだよ。
そんな物はただの下らない絵空事だ
誰かの笑顔の裏には、他の誰かの苦悩があるものなのだ…

君達の求める痛み無き闇の書の救いなど、ただの妄想にすぎん。
罪を犯したモノが無償で救われていい筈は無い…。
闇の書の罪とは君の想像以上に重いのだ。
私は闇の書の所在も主も知っている。
これを本局が知れば何かしらの手を打つ事だろう。
私一人を倒せない君には、君達の計画通りに事を運ぶ理想の道も、全てを破壊してでも目的を遂げる悲しき道も、どちらも無い…
君の道は、ここで終わりだ…！」

ブレイブ執務官は冷たく言い放つ。
はやてを諦めろと…
それは、はやてと共に暮らし、はやての事を第一に思って生きて来

たマオにとって、自身への死刑宣告も同然のものだった。
力無くうなだれるマオからは、既に何の気力も感じられない。
我を忘れて限界以上の力を発揮しても力では及ばず、更には理想を、目的を否定され、絶望の底に突き落とされた心境は想像を絶するものであり、到底小さな少年に耐えられるものでは無かった。
「…ここまでか…
君の合否については追って連絡する…！
まあ、今となっては君には余り関係ない事かも知れないがね…」
ブレイブ執務官の表情は浮かない。
大きな期待を掛けていただけにこの呆気なさは不満としか言えなかった
確かにマオは戦闘面においても、精神面においても強く、まさにダイヤの原石と言える存在だ
たが、硬く、頑丈なダイヤほど強い衝撃を受けると簡単に粉々になってしまうもの。
マオの心はまっ直ぐ過ぎたのだ…。
そのはやてを救いたいと願う真っ直ぐで一途な思いがマオの視野を狭めてしまっているのかもしれない
〜〜〜〜〜
ブレイブ執務官は知っているのだ、この程度では…このままでは絶対に少女はやてを救えないと。
小さな命を救いたいと思う気持ちはブレイブ執務官とて同じだ。
故に厳しい事を言って試し、問い、推し量ろうとした…そこに僅かな希望を見出だそうとしたのだ…
しかし結果はマオの敗北…強い事は確かだが、これでは“奴等”には太刀打ち出来ない。
せめて後数年経てば話は別だろうが、それでは間に合わない…

そう、どうせ叶わぬ夢ならば、少しでも早く覚ましてやるべきだと考えたのだ…

そしてマオがこの悲しみを乗り越えてより多くの人間を救う事を願い、背を向けようとした、その時…

「…ま……て……まだ…、終わっては…いない…ぞ…」

ゆっくりとマオは立ち上がる。

傷口からは未だに血が流れているにもかかわらず、両の足でしっかりと大地を踏み締めて立つ姿は、迷いの晴れた勇者の様にも見え、同時に狂気に溺れた羅殺の様にも見えた…

相反する二つの印象を与えるマオを見てブレイブ執務官は思う、いや、ブレイブ執務官で無くともマオを知る誰が見てもこう思うだろう‘様子がおかしい’と…

マオは元々極度に感情が高ぶると瞳の色が変わり、まるで‘別人の様’になる事があった

普段と比べ、‘より激しき紅’と‘より静なる蒼’

シグナム達はこの二つの状態をなんとなくながら共に‘マオであってマオでないもの’と認識していた

また、その事は‘ブレイブ執務官にマオやはやての情報を与えた人物’も同じ捉え方をしており、当然ブレイブ執務官に伝えていた

何より先程‘紅い’マオを目の当たりにしているブレイブ執務官が一番今の異常性を感じ取っているだろう

纏わりつく奇妙な感覚、精神的に成熟しているブレイブ執務官は直ぐにその正体を理解し、受け入れた。

これは“恐怖”だと…

普段のマオはどんなに本気になっても、たとえ我を忘れたとしても、決して殺気を放つ事は無かった…

たが、今のマオは本物の殺気を体中から放っている。

この殺気こそが‘様子がおかしい’と思わせた最大の要因だった…
「‥お前の言った事は…正しいのだろう…
闇の書が…永い歴史の中で多くの命を奪って来たのは事実だ…
‥たが…、本当に闇の書に罪はあるのか…？」
「それはどういう意味だ…？」
ブレイブ執務官にはマオが正気かどうかを探る術は無く、本能が戦っても決して勝てないと叫んでいる。
まさに彼は開けてはならないパンドラの箱を開けたのだ、やり直しも後戻りも選択肢には無く、何が起きるかさえ予測出来ない状況で出来る事はただ耳を傾けて話を聞く事のみ…
「‥闇の書は元々…何の害も無い魔導書だった…
それが…過去の主の悪質な改変により…災厄を振り撒く…悪魔へと変貌してしまった…

‥その過去の主に罪はあるだろう…
だが、何故それが…闇の書の罪になるというんだ…！
‥何故それがはやての罪になるというんだ…！
力を求め…災厄を招いたのは過去の主だというのに…！
‥はやては、ただ自分に素質があったというだけで…両の足の自由を奪われ…学校へ行く事も出来ず…一人孤独に耐えて来た…
そして、ようやく孤独を脱して未来を掴もうとしたその矢先に、見に覚えのない罪を問われようとしている…未来を奪われようとしている…！
‥はやては俺達に言ったんだ…助けてくれと…
オレははやてを救う…！
これは他の誰でもない、オレ自身の願い！
オレはみんなとの【楽しい】日常を、決して手放しはしない！！」
マオが発する殺気に当てられていたブレイブ執務官だったが、身に迫る‘何か’を感じ取り、立ち尽くす身体に鞭打ち、咄嗟に後方へと跳んだ。

ドゴォッ！！
一瞬の轟音と共にブレイブ執務官がほんの数瞬前までいた場所が漆黒の炎に包まれていた。
「…そう…簡単な事なんだ…
お前が消えて無くなればいい…ただそれだけ事…
…だから…潔く、死んでくれよ…！」

〜〜〜〜
〜〜〜〜
なんと言う事だ…！
確かに少年には何か未知の力が眠っていると思ってはいたが、まさかこれ程のものとは…
マオが生み出す漆黒の炎は消える事無く燃え続け、ブレイブの退路を狭めていく
既に何も無い荒野だった筈の戦闘空間は、辺り一面に黒い炎が揺らめく、まるで地獄の様な世界になってしまっていた。
ブレイブ執務官はマオと重要な会話や激しい戦闘をする事を見越して、予め防音等の効果を持った強力な結界を張っていた。
その結界のお陰で未だに戦闘空間は維持され続けているが、それも壊れるのは時間の問題だろう。
少年はあの力を制御しきれていない、私が未だに生きているのが何よりの証拠…
しかし、あの力を制御出来れば世界を、いや、管理局をどうこうという話も不可能では無くなるな…
「だが、私とてこのまま殺られるつもりは無い！」
足を止めず、猛る炎を掻い潜りブレイブ執務官はマオから距離を取る。
「今さらながら切り札を使わせて貰う！！
エイトブレイズフルオープン！
起動せよ！我が剣…

アマノムラクモよ！！」
ブレイブ執務官がマオとの戦いに使用していた物と同形状の片刃の大剣が左右に四対、計八本展開し、手にはそれら八本の剣より細身の剣が握られている。
翼の様に広がる八本の剣は、その切っ先をマオへと向けそれぞれ魔法陣を展開する。
「放て！！
ガトリングブレイド！！」
八本の剣それぞれから小剣状の魔力弾が連続して放たれる。
八方から同時に攻撃されているにも関わらず、マオはまるで動じる様子を見せず、ただ攻撃を中止して迫り来る剣を見つめていた。
ズドドドドドドドドドドドドドドドド！！
落雷の様に響いた轟音が終わり、煙の晴れた先には、やはりと言うべきか、マオが傷一つ無く平然と立っていた。
たが、おかしい。
今の攻撃は一つ一つがバリア貫通効果を持っていた筈、いくら強力な防御だろうと突破出来る筈だ。
…いや、違うな。
信じられないが、今、少年は防御なんてしていなかった…
そう、まるで触れようとする剣が触れる事なく消滅していくよう…
「…いい加減目障りなんだよ…
諦めて…死ね！」
〜〜〜〜
殺られた。
ブレイブ執務官がそう思った瞬間に異変が起こった
「ぐっ、うぅぅ、なん…だ…！？」
マオは急に苦しみ出し、瞳の色が黒と蒼を行ったり来たりしている。
何が起こったのか分からず、呆然としていたブレイブ執務官の頭に声が響く。誰かが念話を掛けて来たのだ。
『…聞こえているな？

ブレイブ？ソルクラウド…』
聞こえて来たのは酷く冷静な男の声
『あっ、ああ。だが、君は一体…』
『：詳しい事は後だ…時間が無い…
よく聞け、この念話の終わり次第、八神マオへ全力で攻撃を仕掛けろ…
：死にたく無かったら殺す気でやるんだな…』
念話が切れ、男の声が止んだ。
男の真偽も意図も分からない。
ただ、奴の言う通りにするべきだと、そう直感が告げいた
「我が手に集え！罪を切り裂く裁きの剣よ！
我が力、我が身となりて、全ての罪に然るべき罰を与えん！！
行くぞ！これが私の全力だ！
ジャッジメント！！！」

ブレイブ執務官の九つの剣が全て合わさり、巨大な剣を形成する。
そして、その巨大な白銀の刃は、蒼黒入り交じるマオ目掛けて振り下ろされた。
凄まじい轟音が鳴り響き、爆煙が辺り一面を包み込む。
～～～～
パチィン！！
未だブレイブ執務官の攻撃の余韻残る空間に、甲高い指鳴りの音が響く。
その瞬間、黒い炎は蒼い氷のオブジェと成り果て、煙が晴れる頃には跡形も無く消えていた。
「：命拾いしたな…ブレイブ？ソルクラウド…
もし、貴様が臆して逃げ続けていたならば…貴様の死は疎か、全世界が滅んでいたかもしれんぞ…
：いや、‘もし’なんて事はあり得ないか…
：全ては必然なのだから…」

再び元の荒野に戻った空間には、先程までの死を予期させる空気は完全に無くなっていた。
「君は、一体何者なのだ…？
その蒼い瞳…君は、少年…八神マオでは無いのだろう？」

「‥俺は俺だ。
八神マオであって、八神マオでないもの…
‥名を呼びたければ…そうだな…ゼロ…とでも呼べばいい…
‥俺の役目は八神マオの暴走の抑止力となる事…
貴様が目の当たりにした黒き力、アレこそが八神マオの真の能力にして禁忌の力…
‥せいぜい刺激し過ぎないよう気をつける事だな…
‥世界を滅ぼしたくは無いだろう…？
（だが、いつかは黒い力をコントロールしてもらはなければならない…出来れば俺の力を上回ってしまう前にな…）」
二人の距離は約5メートル程、しかし蒼いマオ…ゼロはブレイブ執務官を見てはおらず、どこか遥か遠くを見据えていた。

「‥そうだ、ブレイブ？ソルクラウド…八神マオの記憶を少し消させて貰うぞ。
誤った答えは消し去らねばならんからな…
出来れば、貴様が八神マオを衝動に流されない真の答えへと導いてくれればいいのだが、‥それでは意味が無いか…」

言いたい事は言った、もう用はない。と言うかの様にゼロは出口へと歩き出す。
しかし、3歩程進んだところで二本の大剣がその行く手を阻む。
「君にはいくつか聞きたい事がある…。
それに、まだ試験は終わってはいないぞ？」
そう言ったブレイブ執務官は剣を構えて不敵な笑みを浮かべる。

その目は、力ずくでも問いに答えて貰う。と語っていた。
実の所、聞きたい事があるのは事実だろうが、ただ強者と戦いたいと思う気持ちの方が強い事は確かだろう。
「‥ほう、俺と戦うと言うのか…
面白い、せっかく表に出て来た事だしな…
こい、少し遊んでやろう…」
〜〜〜

どな～。
それに比べてわたしとマオは既に夫婦同然！
これ以上の足掻きは止めといた方がいいんとちゃう？
惨めになるだけやで？」
フ「そっ、そっ、そっ、そんな事無い！絶対に認めない！！
うぅ…いつか…いつか絶対マオとイチャイチャして、あんな事やこんな事するんだーーーー！！（逃」
～～～～
は「ふう…逃げてもーた…
にしても、そんな事になったらまたマオが、お話、されちゃうだけやないか…
でもまあ、これでしばらくは安心やな…」
マ「：終わったのか…はやて…？」
は「あっ、マオや～！
アレ？そーいえば前回、謎の人物Nにやられてたけど、大丈夫なん？」
マ「：ああ、時間をたっぷり使って癒したからな…
なんとか回復したよ」
は「そうなんか…アレを受けて生き延びるなんて、流石はマオやな！」
マ「：次は防いで見せるさ…ふふ…」
は「…く、くれぐれも無理はせんでね？
…って、あれ？マオ、今回はもう終わりみたいやで！？」
マ「：そうか…それは残念だが…仕方が無いだろう…」
マ&は「「ではまた次回お会いしましょう！！
さよなら～！！」」

第１６話～合格は必然～

寝ぼけていると、現実と夢との違いが分からなくなる時があるものだ。
そして、目覚めてから思う。
…アレは夢だったのか？…と。
今のオレは、まさにその状態だった。
- - - - -
どうやらオレは寝ていたらしく、今いる場所は恐らくどこか病室のベッドだろう…。
：記憶が曖昧だ…確か執務官試験を受けていた筈…
：そうだ…！確かブレイブ執務官と最後の試験をしていた筈だ…
オレは勝ったのか…？負けたのか…？
：いや、勝っておいて意識を失うというのはおかしな話だ…
なら…
「：オレは負けたのか…？」
自然と声に出してしまった…だが、何故だ…？
「：なら、何故オレはこんなにも落ち着いているんだ…？」
「それはな、少年。
君が負けた訳では無いからだよ」
そう言いながら部屋に入ってきたのは、試験官のブレイブ？ソルクラウド執務官だった。
「：ブレイブ執務官…！
：オレは勝ったのか…！？
なら、試験の結果は…！？…ぐっ！…」
身を乗り出してブレイブ執務官に質問するが、何故か胸の辺りに激痛が走った。
「少年、君は一応傷口は塞がっているものの、怪我人なのだ。
無理に動かない事を勧める。」

どうやらオレは傷を負ったらしい…ならば病室に居るのも頷ける。
…いや、今はそんな事どうでもいい…！！
「…それよりも、ブレイブ執務官…！
結果は！？試験の結果はどうだったんだ…！いや、どうだったんですか…！？」
「そう急くな、少年。
と、言うのは無理な話か…
単刀直入に言おう、少年、君は…見事合格だ！」
‘合格’その言葉を聞いた途端に頭の中が真っ白になった様な気がした。
「本来ならば、我々執務官や上層部などの間で審議を重ねて合否を決めるため、この様に短期間の間…しかも試験の翌日に結果を出すなんて事は特例中の特例なのだ。
正直言うと、過去に執務官長を勤めて居たグレアム提督の養子であり、そのご本人直々の推薦等も少なからず影響してはいるが、決めてはやはり、君の実力故だろう。
ふっ、少々頭の堅い所のある上層部がこの様な特例処置を施すとは…それだけ期待されていると言う事だな。」
ブレイブ執務官の言葉は放心の余り聞き流してしまったが、頭が空っぽになった事で冷静さを取り戻し、試験中の記憶を取り戻す事が出来た。
「…ブレイブ執務官…オレは本当に勝ったのか…？
…オレの記憶は…貴方に斬られ、諭され、否定された所までしかない！
答えろ！何故はやての事を知っている…！」
オレは傷が痛むのもお構いなしにベッドから飛び出し、ジークを起動させて臨戦態勢を取る。
どうしようも無い事は分かっている。
今、戦って勝てるとは到底思えないし…
試験の際オレの全てを否定して奴は言った。

オレには取るべき道が無いと…
…くっ！どうすれば…！
「まぁ、少年。
少し落ち着きたまえ…」
こちらの心中を知ってか知らずか、ブレイブ執務官は入り口のドアの横の壁にもたれ掛かったまま動かない。
「誤解をしている様なので最初に言っておくが、私は君の味方だ」
「…何…！？それはどういう意味だ…！？」
「そのままの意味さ。
試験の際は非情な事も言ったが、まぁ、君を試してみたかったのだ…理解してくれ。」

「…味方と言われて、簡単に信じられる筈無いだろう…！」
…どうすれば…
くっ！一か八かで仕掛けるか…？
…いや、待て、落ち着け、冷静になれ…！
奴は言った、試験は合格だと。つまりオレ達は予定通りに事を運べる…
奴が味方と言う話が本当ならば…
オレは一呼吸置いてから構えを解いた。
「…ブレイブ執務官…話を聞かせてくれ」
オレが構えを解いたのを見て、ブレイブ執務官は少し驚いた表情を浮かべていた。
「意外と冷静だな…まぁいい。
まず、言っておこう。私に君と八神はやて、及び闇の書の情報をもたらしたのは、グレアム提督と、開闢王殿下の二人だ。」
やはりか、ブレイブ執務官が味方という仮定なら、情報の出所はその二人位だろう…
「…グレアム義父さんは分かるが、何故あのカイとも面識があるんだ…？」

「それは、私の命の恩人であり、戦いの師である人物が、開闢王殿下の仲間だったらしく、その人が開闢王殿下やグレアム提督を紹介してくれたのだよ。」
カイの仲間…？つまり、ラグナロク開発者のハザマという人物か…確か今は行方不明だとか…
「私と開闢王殿下は、［七つの大罪］と呼ばれている集団を追っている。
奴等は強大な力を持つロストロギアを集めて何かを企んでいるらしく、遥か昔から闇の書の力をも狙っていると聞く…。
この先必ず奴等は現れる、君の道を阻む敵としてな。
…そして奴等と戦う上で絶対不可欠なもの、それは‘心の強さ’だ。
私が試したかったのは君の心なのさ…
そして、君は示した…、その心の強さをな」
：七つ大罪…？そんな奴等が闇の書を狙っているとは…
だが、どうするつもりなのだ…？
闇の書を利用する事はまず不可能の筈…
：今はその事は置いておこう。
それよりも…
「：ブレイブ執務官…オレは貴方に心の強さなんてもの、示した覚えが無い…
それどころか、心を折られかけていた筈…」
：そう…確かにあの時、全てを諦めそうになった…
そんなオレの心が強い？
…そんな筈は無い…
「本当に覚えていないのか…？
いや、そんな筈は無い、もっと深く記憶を辿るんだ。
曖昧な記憶もあるだろう、だがそれはそれでいい。
その先にきっとあるさ、少年、君が出した君自身の答えが」
- - - - -
曖昧な記憶の先…？

確かに思い出そうとしたら、なんとなく記憶が続いているのが分かる…
何度か経験がある…恐らくこれはシグナム達と戦った時の状態。
カイが言うには暴走状態だったか…確かにそうだな…なんせ本人に記憶が無いのだから…
だが、そこじゃない…更に…その先…！？
　急に記憶が鮮明になった。
場所は試験会場、対峙しているのはオレとブレイブ執務官。
どちらも満身創痍だが、オレが立っているのに対し、ブレイブ執務官は膝をついている。
　そしてオレはブレイブ執務官に、言い放った…

- - - - -

「…オレの誓いは変わらない…はやてを救う…これだけは、何があっても、変わらない…揺らぐ事は無い…！
だが、間違っていた事もある…その先に破壊があっては、何の意味もなかったんだ…
だから、オレは決めた…
オレははやてを救う…！
そして、その先の未来を…！
はやてと…、皆と共に…！
罪から逃げず…、そして…、
罪を背負って生きていく…！！
…それこそが、‘王’の在るべき姿だ！！」

…ああ、何故忘れていたのだろう…
そうだ…これこそがオレの出した答えだ…
ブレイブ執務官は、二度目となるオレの宣言を満足げな表情で聞いていた…
「忘れてはいなかった様だな。十分だ…
少年、今後君はグレアム提督率いるセイレーン所属の執務官となる

事が決定している。
後の事はそちらで聞いてくれたまえ。
しばらくは会う事は無いだろうが、まぁ頑張りたまえ。
では、私はこれで失礼する」
　そう言ったブレイブ執務官は何やら満足したらしく、さっさと部屋を出て行ってしまった…
－－－－－
それにしても、‘王の在るべき姿’とは何なのだろうか…？
確かにそう言ったのは間違いない。
はやての事か？いや、違う。
明らかに自分を指している言葉だった。
：う～ん……
……まぁいいか…
－－－－－
ブレイブ執務官が退室してしばらくし、ようやく気持ちの整理し終えたオレは、気になった現在時刻を知るために待機状態のジークに聞いてみると…
『マスター、只今の時刻はＡＭ６：１５です』
：わぉ、驚きだ…オレは何時間寝ていたのやら…
：まぁいい、取り敢えずグレアム義父さんに報告に行かないとな…
～～～

どうやらリーゼ達はいないらしく、姿が見えない
「まずは試験合格おめでとう。
君ならやり遂げてくれると信じていたよ。
いや、父として実に鼻が高い。」
既にオレが合格した事を知っている前提の口振り…それもそうか…
「：ありがとうございます。
皆の助力があってこその結果です。

：ふっ、それにしても、話してくれていてもよかったのでは無いですか…？ブレイブ執務官の事…」
「そう言わないでくれ。
彼から君には話をしない様にと念を押されていてね。
どうだい？彼は信用に足る人物だっただろう？」
「：はい、強く、厳しくはありましたが、良き人物だったと思います。」
「結構、結構。
積もる話もありはするが、それはまた今度にするとしよう。
アリアっ、ロッテっ、例の物を持ってきてくれ。」
満足そうに頷いた義父さんは、通信で別室にいるらしいリーゼ達を呼んだ。
こんなにも軽く話合えるとは、やはり親子という自覚があるお陰か…？

- - - - -

「よっ！、マオ坊、元気だったかい？」
「マオ君、怪我の具合はどうですか？
まだあまり無理はするなと医務官が言っていましたよ。」
部屋に入って来るなりオレの心配をする辺り、二人の優しさが伺える。
「：オレはこの通り元気だ。
怪我についても問題ない…

…二人も元気そうでなにより…」
最初に入ってきた二人に続いて、レイが何か布の被さった台車を押して入ってきた。
「おはようございます、マオ。
一週間お疲れ様でした。」
「…ああ、ありがとう…おはよう、レイ
…良い子にしてたか？」
「はい、グレアムお義父様、アリアお姉様とロッテお姉様、それと、セイレーンの艦員の方々と共にマオの合格を祈ってましたよ…」
そう言ってレイは微笑むと、台車をオレの目の前まで運び、アリアとロッテと共に布に手を掛けた。
「…ところでそれは一体何なんだ…？」
気になったので聞いてみると、三人は顔を合わせてアイコンタクトをとった。

「それは見てからのお楽しみっ！
行くよ、せーのっ！」
三人はタイミングを合わせて勢いよく布を取り払った。
「「「執務官試験合格おめでとう（ございます）！！」」」
布の取り払われた台の上には、宝玉の埋め込まれたブレスレットが置いてあった。
待機状態のジークフリートと同形状だが、宝玉の色がジークが蒼なのに対して、こちらは紅い色となっている。
「…これは…デバイス…？」
「そうさ、マオ坊。
この子こそがジークフリートに並ぶ、もう一つのラグナロク制御の鍵だよ。」
「これまでのジークフリートを使った魔法戦のデータを元に、よりサポートに特化した仕上がりになってます。

既にマオ君発案の蒼氷術式も、七式全てのシミュレーションを終えて完璧と言える状態になっているんですよ。」
誇らしげに語る二人を見て、ある事に気付く。
上手く隠してはいるが、二人共酷く疲弊している…
…オレがジークを手にしてから、僅か一週間程しか経って無い…
いくらデバイス本体は殆ど完成していたにせよ、構想段階でしかなかった蒼氷術式の二～七式を完成させる事は容易では無かった筈…
恐らく相当無理をしたに違いない…
「…すまない、どうやら無理をさせてしまった様だな…」
「無理だなんてとんでもない！
この位、朝飯前って奴だよ！」
「そうですよ。
それに、今回一番頑張ったのはレイちゃんなんですよ？」
二人して無理なんてしていないと主張しているのだ、これ以上言うのは無粋だろう…
リーゼ達に感心していると、レイがデバイスを手に取り、オレへと差し出す。
「受け取って下さいマオ。
この、貴方の新しい力を…」
差し出されたデバイスを受け取り、右手首に着ける。
変な違和感は無く、むしろずっと着けていたかの様な感覚がする
「良い着け心地だ…
皆の想いが伝わって来るよ。
レイ…オレのこの新しい愛機の名は…？」
「その子の名は…
重なり合い、交り合い、何処までも続いていく…
それぞれ異なる道が出会った奇跡…
そしてこの先織り成す軌跡…
そんな私達の万感の想いを込めて、
‘クロスロード’と名付けさせて貰いました。

如何でしょう…？」
　どうもこうも無い、今もひしひしと伝わって来ている…開発に携わった人達の想いが…！
「ありがとう、レイ。
最高の名だ…！
：ウェイクアップ！
起動しろ、クロスロード！！」
起動の掛け声と同時にクロスロードは一対のグローブへと姿を変えた。
「オハヨウございます。マイマスター。
これからヨロシクお願いします。」
「：ああ、宜しく頼む。」
- - - - -
「そのクロスロードは、ミッドチルダ式ブーストデバイスに分類されるデバイスなんだよ。」
「：ブーストデバイス…？」
「ブーストデバイスは管理局でも凄くマイナーなデバイスなんですけど、魔法の補助、強化の面においてはこれ以上の物は無いんですよ？」
「グローブタイプだからジークフリートの邪魔にもならないし、マオ坊の大きな魔力ロスとかの問題も解決出来る。」
「更にジークフリートの二つのＡＩと、クロスロードのＡＩ、そして使用者の意識をリンクさせる事で、互いの情報を共有し、使用者の持つ、又は得る情報を元にして、三つのＡＩによる並列協議型情報処理を行う機能、ＡＬＩＣＥ（アリス）システムの使用が可能となっています。」
「タダでさえ一つで十分なＡＩを三つも使ってるからね～
戦闘に用いれば向かう所敵無しだよ！」
「アリアの言う通り、これを戦闘に用いれば、周囲のあらゆる情報を元に相手の行動を正確に先読みし、マオ君の早過ぎる反射と相俟

ってほぼ完璧な近未来予知を行う事が可能の筈です
ですが、アリスシステムはもともと、レイちゃんがラグナロクの制御を行う際に用いる機能なので、戦闘に用いれば大きなリスクが伴う事を頭にいれておいて下さい。」
：諸刃の剣か…使わずに済めばいいが…近い内に使う事になるだろう事は明白。
アリアもロッテも口には出さないが明らかに‘何か強大な敵’の出現を意識している様だしな…
- - - - -
「マオ、もう一つ…これを」
レイに渡されたのはアースラに行く前に渡していたはやてとお揃いのネックレスだった。
ラグナロク本体を持ち運び易くする為の媒体にすると言っていたので、それが出来たのだろう。
「それと、もう一つ…
マオが元の世界で身に着けていたと思われるマントを非人格型のストレージデバイスとして改修し、いれておきました。」
：そういえばアレも渡していたっけ…
なんだか物忘れが激しい気がするな…
自分の忘れっぽさを嘆いていると、アリアが憤慨を露にして迫って来た。
「そうそう、マオ坊！
あのマントは一体何なんだい？
使ってる素材はデータに無いし、自動防御の詳細も一切不明…
どう調べても分からないから、分からないままにこっちの技術と合わせたら上手くマッチングするし…
まったく、アレは立派なロストロギアだよ～！」
「：残念だが、オレにも詳細は分からない。
ただ、ノワールと読んでいた覚えはあるんだが…」
アリアは納得出来ないと言いたげな目で見て来る

とてつもない手間が掛かったのだろう事は明白なのだが、
…そんな顔しないでくれ…分からないものは分からないんだ…
と、心の中で詫びた。
- - - - -
「…それにしても、ここまでする必要があるのか…？
ジークにクロスロードにノワール…
…多くないか…？」
ラグナロクを合わせると、デバイスを四つ所持している事になる。
仕方が無い事とはいえ、やはり思ってしまう…
「マオ君、私達はこれでも少ない位と考えているんですよ？
ラグナロクの制御はレイちゃんとジークフリート、そしてクロスロードが合わさってようやく行える様になるわけですし…」
「…ああ、流石にそれは分かっているのだが…」
「ああ、マオ君のマント…確かノワールでしたね…
このノワールの事を言いたいのですね？」

そう、それだ。それが言いたかったんだ。
ロッテは凄いなと感心しつつ、頷く事で肯定の意を表す。
「説明します、一見防御の面で過剰過ぎる様に見えますが、実はラグナロクの制御時に、ジークフリートとクロスロードは他の行動を一切行えなくなってしまうのですよ。
だから他に防御に特化したデバイスが必要になったと言う事です。」
「…なるほど、よく分かったよ。
やはり全て必要なモノなんだな…
浅はかな質問をして済まなかった。
…分かりやすい説明ありがとう。」
…オレは全てを使いこなせるのか？と言う不安は残るが、まぁいい。
何にせよこれでこちらのラグナロク制御面の準備は万全となった。
残る問題は夜天の魔導書の蒐集と、ラグナロク起動の鍵たる七つの

宝玉…そしてあと一つの宝玉の行方…
…このまま順調に進めば良いが…

「…義父さん、アリア、ロッテ、そしてレイ…
本当にありがとう…
…オレはどう礼をすればいいのか…」
「マオ君。深刻に考える必要は無いよ。
君は私の息子で、アリアとロッテの弟なんだから、気にせず存分に甘えなさい。
私達の事はいいから、レイちゃんの願いを聞いてやってくれないかな？」

…まったく、義父さんには頭が上がらないな…
ああ言われたが、いつこの恩はいつか必ず返さないとな…もちろん利子付きで…
「…レイ、何か願い事があったら言ってくれ…
オレに何が出来るかは分からんが、遠慮せずに言ってくれ…」
優しく頭を撫でながら聞いてみると、レイは少しだけ考えてから答えてくれた。
「……ならマオ、…家に帰るのを、明日にしていただけないでしょうか？」
……

「ああ、構わないぞ…
…どこか行きたい場所があるのか…？」
「いえ、はやて達もマオにお祝いをしたい筈です…
ですから私は一足先に帰ってはやて達とお祝いの準備をしようかと…
ダメ…でしょうか…？」
「…分かった、今日は一週間世話になったアースラの人達に挨拶に

行って来るとするよ。
…ふっ、旨いご馳走を期待してるぞ…」
はやてに会うのが遅れるのは辛いが、レイの願いならば仕方が無い。
明日には会える事だしな…
「さあ皆、そろそろ朝食にしよう！
セイレーンのスタッフ達にもマオ君の合格を知らせなければな！」
「さっ、早く食堂へ行こ～！。
…って、どうしたんだい、マオ坊？
置いてくぞ～！」
「…ああ、直ぐに追い付くから先に行っててくれ…」
「分かった！でも直ぐに来ないとマオ坊の分無くなっちゃうからね！
じゃあ先に行ってるよ～」

グレアム義父さん、ロッテ、レイ、最後にアリアが退出して食堂へ向かった。
オレが残った理由は一つ。
オレの愛機達にもう一度挨拶をしようと思ったのだ。
「…この先、無理をさせるかもしれないが…
宜しく頼むぞ、ジークフリート！
「全ては貴方の願いのままに…」
クロスロード！
「モチロンですよ！」
そしてノワール！ラグナロク！
…家族と、仲間と力を合わせ…オレ達の手ではやてを救うぞ！！」
「「イエス、マイマスター！！」」

第17話～休憩は必然～前

　　１０月１６日ＡＭ７：００
その日、セイレーンの食堂の一角は戦場と化していた…
「甘いよ、マオ坊！これいただき！」
「：くっ！なんというスピードだ…
まるで追いつけない…！」
テーブルに並べられた朝食は５人前、マオ、レイ、グレアム、ロッテ、アリアの５人分だ。
セイレーンの食堂は、とある人物の「より良い結束はより良き食事から」という理念を元に、毎食をスタッフ等が当番制を用いて、一切の妥協をもする事無く調理している。
セイレーンスタッフの作った料理は深い真心が籠っている為、上手くて、美味いのだ。
当然マオはこの食堂の料理が好きだった。
ゆっくり味わって食べたいと思うのは当たり前だろう…
しかしマオに安息は許されない。
何故なら、ロッテが次々とオカズを食べ尽くしてしまうのだ…しかもマオの分だけ…。
マオの食べる速度は遅くはない…だが、既に大半のオカズをロッテに食べられてしまっていた。
この、ロッテの理不尽な行いに、マオは文句の一つも言わずに抗っている。
いつもならアリアやグレアムがロッテを諌める所だが、二人共楽しそうに見ているだけで止めようとする素振りをまるで見せない。
　事の発端。それはとある日の朝、同じ様に５人で朝食を食べていた時の事…
～～～～～
その日はデザートにアップルパイが用意されていた。

「スミマセ～ン、艦長。デザートのアップルパイなんですけど、５等分にするつもりだったのですが、間違えて６等分にしてしまいました～！
…どうしましょうか？」
調理当番のリムリット技師は厨房から顔を出し、ハキハキとした声でグレアムに問う。
「ああ、気にしなくてもいいよ、リムリット君。
アップルパイが一つ余分にあるらしいんだが、誰か食べたい人はいるかい？」
ビシッ！！
ビシッ！！
グレアムが四人に聞いた瞬間、二つの腕がほぼ同時に天上へと向けて突き出された。
高らかに挙手をしたのはマオとロッテ。
共に食への執着の強い両者は、無言のまま睨み合い、火花を散らしている。
そんな二人を見て、片や呆れ、片や驚きの表情を浮かべながら自分はいらないと伝えるアリアとレイ。
二人共今のマオとロッテの間に割って入っていく事の愚かしさを重々承知しているので口を挟む気は無い様だ。
「…マオ坊…ここは姉である私に譲るべきだと思わないかい？」
先に口を開いたのはロッテだった。
姉という目上の立場の存在である事を主張している。
「：姉とは…弟の為に我慢するのが道理だと思うのだが…？」
対するマオは、弟こそが優遇されるべきだと主張する。
お互い平静を装ってはいるが、‘戦ってでもアップルパイを我が物にする’と目が語っていた。
「あ、あの～。
ここは公平に、ジャンケンで決めるというのはどうですか？」
場の空気に耐えられなくなったリムリット技師が恐る恐る提案する。

「‥ジャンケンか…オレは構わないぞ…
これなら確かに‘公平’だからな…」
含みのある言い方は気になったが、マオが賛成した事でリムリット技師は安堵の色を浮かべる。
何しろ、自分のちょっとしたミスが原因で始まったこの静かな戦いが、ようやく終わりを迎えようとしているのだ。
研究室に籠り気味なリムリット技師には、マオとロッテが放つ異様なプレッシャーに耐え続けるのは困難極まりない事だった。
「じゃ、じゃあ、ジャンケンって事で…」
これでようやく開放される…リムリット技師がそう思った時。
「待った！！」
待ったをかけたのは、当然ロッテだった。
「ジャンケンで決めるなんて絶対ゴメンだよ！
まったく、あれのどこが公平なんだか…」
ロッテはジャンケンに恨みでもあるのだろうか、とさえ思わせる程の勢いで否定した。
「ロ、ロッテさん。
ジャンケンが公平じゃないと言うのはどういう事ですか？」
グーかチョキかパー。
このいずれかを出し合って勝敗を決めるジャンケンが不公平と言うのは理解しがたい事だ。
もしやロッテがただジャンケンが弱いだけなのでは無いのか…そうリムリット技師は考えた。
「疑うんならマオ坊とジャンケンしてみるといいよ…解るから。」
表情に出てしまっていたのか…勘ぐっていたのがバレた事に驚きつつも言われた通りにする事にした。
「ではマオ君。お相手お願いします。」
「‥ああ」
ジャン、ケン、ポン！の掛け声で出された二つの手…
マオがグーでリムリットはチョキ。

結果はマオの勝利だ。
ここまでは良い、確率の問題なのだから負けるのは仕方が無い事だろう…
だが、おかしいのはこの先からだった。
ポン！
ポン！
ポン！
何回…何十回やっただろうか…
ポン！
ポン！
ポン！
いくらやっても、ただの一度ですら勝つ事が出来ない…いや、むしろ‘あいこ’にすらなってはいないのではないだろうか…
「……ジャンケンって…いえ、マオ君って…不公平ですね…」
精神的に疲れ切ったリムリット技師は、先程のロッテの憤慨を理解した。
確かに大事な決め事？をマオとのジャンケンで決めろと言われれば全力で拒否するだろう…
マオの性格上イカサマがある可能性はゼロだ。
‘胴体視力と反射神経が高い為に直前で相手の手に対応出来るのではないか’、そう考えて目を塞いで貰ってやってみたが結果は同じ…確率の問題だから次は勝てるかもしれない…この考えが常に頭に浮かぶ。
次こそは、次こそはと、希望を胸に繰り返し挑み、そして負ける。
変に希望がちらつく分、イカサマをしてくれていた方が幾分かマシと言えた。
「もう、当分の間ジャンケンはしたくないです…」
ストレスに耐えられなくなったリムリット技師はとうとう机に伏してしまった。
「リムリット…アンタはよく頑張ったよ、あとはアタシに任せな…

必ずカタキはとって見せるよ！！」
ロッテはまるで、志半ばで倒れた戦友に言うかの様にリムリットに語りかける。
セリフがどこかソレっぽいのは、テレビか何かの影響だろうか…
リムリットに憐れみの視線を送った後、立ち上がったロッテはマオへ向けて指を突き出した。
「マオ坊！！リムリットのカタキ…
この決着…早食い勝負でつけるよ！！」
ロッテが満を持して提示した方法は、早食い、だった。
「より早く食べ終わった者がアップルパイを手にする事が出来る…
…もともと食べ物を巡って始まったこの戦い、これ以上の決め方は他に無いよ！！」

ロッテの言葉には、異様なまでの説得力が込められていて他の誰の介入をも許さない勢いがあった。
「……」
しかし、マオはロッテの勢いに流される事無く冷静に考えていた。
…このままロッテが提案した早食い勝負に乗るのは得策では無い…
…普段の食事から考えてもオレが勝つ確率は相当低い…
…かと言って勝率がゼロという訳でもないのも事実だ…
…なによりも…
「どうしたんだい？マオ坊…
まさか、八神マオともあろう者が敵に背を向けるつもりかい？」
今し方ジャンケン勝負を避けたばかりのロッテだが、そんな事は気にも止めずに全身で残念だと表現している。
そんなロッテを見る皆の思いは一つ。
（お前がそれを言うか！）
自分の事を棚に上げるロッテだが、その言葉はマオの性格を的確に理解した上で放たれたものだった。
「…その勝負…受けて立とう…！

…もし、お前がオレよりも先に完食したならば…今後オレの…オレの分のオカズに手を出しても構わない…！」」
ただでさえ、不利な勝負であっても逃げずに戦うか…またはアップルパイを確実に手にする為に別の勝負方法に替えるかで葛藤していたマオに、家族の証とも言える自らの名…誇りに触れる挑発をすれば、より自分に不利な条件を追加した上で勝負を受諾する事は必定。
ロッテはまんまとマオを丸め込む事に成功したのだ。
まさか、あのマオが自らの食事を差し出すとは誰も思わなかったが、ロッテにとってはまさに棚からぼたもちである。
「マオ坊、その言葉…今なら聞かなかった事にしてあげるよ？」
「…二言は無い…さぁ、飯が冷める…直ぐに始めよう…」
「わかった、だけどこのままじゃ姉としての示しがつかない。だから、私もマオと同じ条件でやるよ！」
早く食べ終わった者がアップルパイを手にする…ただそれだけだった筈の戦いは、日々のオカズを賭けた大規模？な戦いに発展してしまった。
まぁこの後、マオが長期間に渡って泣きを見る事は言うまでも無いだろう…
〜〜〜〜
「…ご馳走さまでした…」
結局今回もマオは半分以上ものオカズを奪われてしまっていた。
「マオ…一体いつまで続けるのですか？…こんな事…私達からロッテお姉様にやめるよう頼んでみましょうか？」
マオを心配するレイは、食器を片付けながら密かに問う。
「…心配するな…レイ…言ったろ？二言は無いと…」
「ですが、このままではマオが栄養失調になってしまいます…！」
毎日全ての食事をロッテと共に摂っている訳では無いので、流石に栄養失調になる事は無いだろう。
だが、そう考えてしまう程にレイはマオを心配しているのだ。

「…確かに今は殆どのオカズを奪われているのが現状…正直、物足りなく思っている…
だがレイ、視野を広くして考えるんだ…
…ロッテはあれ以上の速度を得る事は難しいだろう。
だが、オレはどうだ？
オレはまだまだ発育途上の身…
つまり、近い将来オレの速度がロッテを上回り、今の立場が逆転する可能性が高いと言う事…
…どうだ？今は耐えてこの制度を定着させるべきだと思わないか？」
マオは、呆れ返る程実直な仕返しを考えていた。
この作戦が実を結んだ場合のメリットは相当なものだろうが、逆に失敗に終わった時は…
いや、マオ本人が成功を確信しているのだからきっと上手く行くのだろう。
「わかりました、もう何も言いません。
ただ、マオの勝利が訪れる日を信じています。」
「…大丈夫だ、その日はそう遠くは無い筈…！」
食べ物の恨みは何とやら…
密かに燃えるマオなのであった…
～～～

ないで下さいね？」
グレアム、ロッテ、アリアがそれぞれ見送りの言葉を送る。
「マオ…明日の事ですが、午前８時頃に帰宅されると宜しいかと…」
「…わかったよ、レイ。
はやてに明日帰ると伝えてくれ…
…じゃあ、行って来ます。」
いつものようにレイの頭を優しく撫でてやり、それぞれに返答をしてから四人の見送りの中、一人アースラへと向かった…
～～～～～～
「おっ、来たね！」
アースラに到着したと同時に、その事に最初に気付いたアルフが声を上げる。
「おはよう、マオ。今日は割りと早起きだね」
続くユーノの挨拶に軽く答える。
「…おはよう、みんな…
…わざわざ出迎えてくれなくても良かったんだが…」
朝から手間を掛けさせてしまった事に対して、ほんの少しだけ悪い気がした。
するとクロノが一歩近付いて来て、正面に向き合う形で立った。
「そう言わないでくれ。
少しでも早く君に言いたい事があったんだ…
ゴホンッ！
マオ、執務官試験合格おめでとう…！
同僚として、そして友として祝福するよ…」
そう言ってクロノは、少し照れながら右手を差し出して来た。
「…ありがとう、クロノ…
…クロノがいたからこその結果だ…
オレ一人では合格は有り得なかっただろう…」
クロノへの感謝を述べながら差し出された右手を取り、力強い握手

を交わす。
「合格おめでとう、マオ。
でも、怪我したって聞いたんだけど…平気なの…？」
「：ああ、ありがとう…フェイト…
怪我なら、激しく動いたりしなければ平気だ…」
フェイトが心配そうな顔で体を気遣ってくれたので、軽く体を捻ったりして見せて安心させる。
怪我の事は義父さんと通信したリンディ艦長から聞いたのだろうか…
四人と軽く話をした後、リンディ艦長に挨拶する為に艦長室へと移動した…
～～～～～～
艦長室に着いてからはリンディ艦長やエイミィ通信主任と、先程のフェイト達と同様のやり取りが行われた。
～～～
ひとまず安心したのか、リンディ艦長はエイミィ通信主任が注いだ緑茶の入った湯飲みに手を掛け、何故か隣りに置いてある角砂糖の容器の中身を移す。
一つ…二つ…三つ…四つ…五つ…
（：砂糖を幾ついれようと別に気にはしない…オレも人の事言えないしな…。
だが…やはり緑茶にいれるのは見慣れる者ではないな…）
リンディ艦長は、大量に砂糖を入れた緑茶を掻き混ぜ、それを啜った。
これが日常となっているアースラスタッフは気にも止め無い様子だが、どうにもマオには刺激が強いようだ。
だが、マオは基本的に表情が変わらない為、その心中が誰かに伝わる事は無い…
「ふう…。では、マオ君。
ただいまをもって貴方の所属はアースラからセイレーンへと戻ります。

お疲れ様でした。この一週間、非常に助かりましたよ。」
そう言ってリンディ艦長は微笑んだ。
だが、この一週間でした事と言えば、戦闘訓練かクロノの事務仕事の手伝い位なもの…
感謝されていいものだろうか…？
「ところでマオ君。今日はこの後、何か用事等はありますか？」
……あっ……
はやての待つ我が家に帰れないマオは、今日の予定を、アースラに挨拶に行く，これしか考えていなかった。
しかし、すでに目的を果たしてしまった為にやる事が無くなってしまっていた。
（…そうだ！クロスロードの動作チェックを…
いや、今日は戻らないつもりで出て来たんだ…今直ぐにセイレーンにとんぼ返りと言うのも憚られる…
かと言ってアースラでやるのも迷惑になる恐れが…
…やる事が無くなると言うのも困りものだな…）
「…どうやら、特に用事がある訳では無いみたいですね？」
「…はい、グレアム義父さんからは明日まで休養を取るよう言われているので…」
リンディはマオの僅かな戸惑いからその心中を察して見せた。
この辺りの観察力、洞察力は、流石艦長と言った所か…。
「なら、今日は休養も兼ねて、クロノや皆と街で遊んで来てはいかがですか？」
マオとの生活が終わる事を思い、沈んでいたフェイト達だったが、リンディの言葉を聞いた途端にその表情は明るさを取り戻した。
マオとっても願ったり叶ったりなリンディの申し出、断る理由も無い為に直ぐに了承した。
エイミィは行かないらしく、クロノ、フェイトはリンディに休暇を貰い、ユーノとアルフを合せた5人で行く事となり、マオを除く四人は準備の為に一度部屋へと戻って行き、艦長室にはマオ、リンデ

ィ、エイミィだけが残った。
「ありがとね、マオ君。
クロノ君の事、本当に感謝してるよ。」
エイミィは心底嬉しそうに言う。
エイミィだけじゃない、リンディも同様の事を思っているらしく、
二人ともとても柔らかな笑みを浮かべている。
「‥オレは礼を言われる様な事は何もしていないと思うのだが…？」
それもそうだ。この一週間、自分の目的の為に忙しいであろうクロノを付き合わせてしまったのだ…むしろ礼を言わなければならないのはこちらの筈…
それが何故？
疑問に思うマオに、リンディはクロノの過去を語る。
クロノの父クライドが殉職してしまって以降全く笑う事が無くなってしまった事…
士官学校時代のエイミィとの出会いを経て、少しずつ良い方向に変わって行った事…
「マオ君と知り合ってからのクロノ君、本当によく笑う様になったんだよ？
それにクロノ君が，友達，なんて表現の仕方をしているのなんて始めて聞いたよ…」
「ええ、それに今回は素直に受けてくれましたし…
普段なら「休暇なんていらない」って言うんですよ？」
リンディとエイミィは息子であり、弟分であるクロノの変化をマオに聞かせる。
この二人がどれだけクロノの事を大切に思っているかがしみじみと伝わって来る。
「マオ君。これからもクロノ君と仲良くしてやってね？」
「‥クロノはオレにとっても最初の男友達だ…
気の許せる貴重な存在…心の底から出会えて良かったと思っている…もちろんフェイトや貴方達とも…」

会話の流れでマオが笑みを浮かべたのを見ても二人は驚きはしない。
二人はこの一週間でマオが笑う所を数えられる程だが見て来ているのだ。
あえて言葉にする事は無いが、二人は思う…変わって来ているのは、クロノだけでは無いのだと…
この穏やかな雰囲気に包まれた会話は、四人が戻ってくるまで続いた…

〜〜〜

乗って移動している最中、マオはふと訪ねた。
それを聞いた四人は驚愕のあまり目を丸くしてしまった。
「…前々から頭良いくせに世間知らずだとは思っていたけど…まさかこれほどとはねぇ…」
「アルフ…そんな言い方しちゃダメだよ…
マオはちょっとだけ常識が足りない所があるだけなんだよ…」
「…フェイト…それじゃアルフと言ってる事変わらないよ…」
大変失礼な物言いのアルフ、それを注意するも似た様な事を言うフェイトに、呆れながらユーノはツッコム。
その後マオは自分が軽度の記憶喪失である事、そしてそれに伴い感情と言うものが一部欠落している事を話した。大変驚かれはしたが同時に納得もされ、結局「遊びとは何か？」と言うマオの疑問は言葉では説明しずらいらしく、実際に体験するのが一番という結論に至った。
「…これが…友達か…
…悪くない…」
たわいの無い話をしたり、ユーノを弄ったり…
笑い合う四人を見て、誰にも聞こえ無いように一言呟いたマオの表情は、いつもの無愛想極まりないものでは無く、人間味のある暖かなものだった…

第２０話～休憩は必然～後

１０月１６日ＡＭ９：００
空は晴れ渡り、運動するには丁度いい天気のこの日、マオ、クロノ、ユーノ、フェイト、アルフの５人は管理世界の一つである〈イチコクエノキ〉の首都〈カーンパル〉へとやって来ていた。
街は老若男女が行き交っていて、今日が休日である事が分かる。
何故この５人がこの街にやって来たかというと、ズバリ‘遊ぶ為’である。
理由は様々。
マオの執務官試験合格祝いの意味もあれば、裁判を控えている為に外出の余り無いフェイト達の気分転換の意味もあり、更には普段休暇を取らないクロノに休暇を取って貰うという意図さえある。
この様に遊ぶ為にやって来たのだが、彼等には余りよろしく無い共通点があった。
（：街に娯楽を求めてやって来るのは始めてだな…）
（今まで友人と呼べるのはエイミィ位だったからな…
正直、何をすればいいのか分からない…）
（…友達と一緒に出掛けられるなんて…
次はなのはも一緒にいるといいな…）
（ちょっと前まではフェイトがいればそれだけで良いって考えてたけど、こういうのも案外悪くないねぇ）
（マオには経験するのが一番なんて言ったけど、友達と遊んだ経験なんて僕にも殆ど無いんだった…）

そう、彼等は総じて対人関係に疎く、いざ遊べと言われても何をすればいいのか分からないのだ。
そんな５人の中、取り分け内心の焦りを生じらせていたのはクロノだった。

こういう場合最も頼りにされるのは最年長だ。
そして5人の中の最年長はクロノである。
当然皆はクロノが行き先を決定してくれると考えていて、クロノ自身もそれを分かっている。
それ故に焦り、考えを巡らせているのだ。
（そうだ！）
幸いにもまだ都市交通機関による移動の最中。
もうすぐ終点の首都中央に到着するものの僅かなら時間がある。
クロノは早速自分の思い付いた策を実行に移した。
〜〜〜〜〜
終点に着き、改札を抜けて多少落ち着ける場所へと移動してからクロノは皆に告げる。
「この先に有名な大型ショッピングモールがあるらしいんだ。
今日はそこに行こうと思っている。」
クロノの言葉に全員が頷き、ゆっくりと移動を始める。
　クロノがこの、通称〈ドミノタウン〉と呼ばれるショッピングモールの存在を知ったのは、ほんの数分前だ。
皆を先導する立場であるクロノが、その威厳を保つ為に取った行動はいたって単純。
皆にバレ無い様にエイミィに助けを乞い、調べて貰ったのだ。
クロノがこの管理世界〈イチコクエノキ〉に来た理由は、何も近かったと言うだけでは無い。
他にも理由があるのだが、しかし、よもや遊ぶ事が目的で来る事になるとは思ってもいなかった為に、必要以上の調べをいれてはいなかった。
（流石はエイミィだ。
恐らくこうなる事を予期して、ボクが聞く前から調べていてくれたのだろう…）
エイミィの手際の良さに感謝しながら歩いていると、既にショッピングモールに入っていた事に気付き、楽しげに話をしているフェイ

ト達を促して少し先にあった案内掲示板を確認するべく歩を進めた。
「どこか気になる場所はあるかい？」
案内掲示板を見ると、このショッピングモールがどれ程広い所だったのかを知る事が出来た。
想像以上の広さに全員が言葉を無くし、考えを放棄してしまったので、取り敢えず適当に歩き回る事になった。
「あっ、あそこゲームセンターって書いてあるよ。
ちょっと入ってみない？」
ユーノが指を差した方向の先には、店先にまでクレーンゲームを展開した、かなりの広さを誇るであろうゲームセンターがあった。
「：ゲームセンター…？」
マオ、フェイト、アルフが、頭上にクエスチョンマークを浮かべている。
「まぁ物は試しだ、入ってみよう。」
店内に入ると、奥の方からけたたましい騒音が聞こえて来た。
このゲームセンターは、一階は主にワンコインで遊べる物で纏められており、奥にある階段を上がって二階はメダルゲームのみとなっている。
マオが騒音が苦手な為、二階には行かずに一階をそれぞれで見て回る事にした。
～～～～～
「……」
チャリン…
スタート！！
ガン！ガン！ガン！
ガン！ガン！ガン！
「（マスター、これは何をするゲームなのですか？）」
説明を呼んでから、一人黙々とゲームを始めたマオに、ジークが問う。
「：バイオデストラクションと言うらしいのだが、秘密組織のエー

ジェントとなり、悪の組織の開発したゾンビをこの銃で撃って行くゲームだそうだ。」
喋りながらも撃つ手を止める事無く、正確にゾンビの脳天を打ち抜いていく。
「（マスターってオカネ持っテたんデすね～）」
ガン！ガン！ガン！
ガン！ガン！ガン！
「：まあな…義父さんから多すぎる位に小遣いを貰っていてな…」
敵を倒しながらゲームを進めて行くと、ムービーを挟んでからボスと思われる巨大な敵が画面狭しと現れた。
「（ナンか、スゴくグロテスクな敵デスね～
アっ、シかもデカイ割に速いデスよ～）」

クロスロードは気の抜けた様な声で喋っているが、当のマオはボスのデザインを見て、若干引いていた。
そのボスは3メートルを超えるだろうムキムキの体格で、皮膚は所々ただれていて、色は何故かピンク色。
オマケにチェーンソーを片手で操り、画面を行ったり来たりと動き回っているのだ。
ガン！ガン！ガン！
ガン！ガン！ガン！
ようやく倒した時には、無傷だった為に五つあったライフが二つ削られて三つになっていた。
その後の健闘空しく、第三面のボスにヤられてしまい、全三ステージある中の一ステージすらクリアする事が出来なかった。
コンティニュー？
9、8、7、6、
「（どうしますか、マスター？
今お金を追加すれば、続きからになる様ですが…）」
5、4、3、

「（全ステージをクリアにハ、一体いくらかかルんデすかネ～？）」
2、1、
「…これは決して逃げた訳では無い…
…只の戦略的撤退だ…」
0-ＧａｍｅＯｖｅｒ-
マオは追加の１００円をいれる事はせず、クロノ達を探す事にした。
～～～～
捜すまでも無くクロノとユーノは見つかった。
二人はレーシングゲームで対戦をしていたので少し見ていると、クロノが現在三位でユーノが六位。
まだ半分はあるらしく、この先どう転ぶかは予測しがたい。
二人は完全に集中していた為、邪魔にならない様に移動することにした。
～～～～
「あっ、マオ！丁度呼びに行こうと思ってたんだよ。」
ＵＦＯキャッチャーと書いてある台の前にいるアルフが近付いて来るマオに声を掛ける。
ＵＦＯキャッチャーのガラスの中には、様々な動物のぬいぐるみが山の様につみ上がっていた。
「…どれを取ろうとしていたんだ…？」
説明を読んでやり方を理解したマオは、アルフとその隣りにいるフェイトに訪ねた。
「あの真ん中にあるオレンジ色のイヌを取りたいんだけど、私達じゃ取れなくて…
取れそうかな？」
ぬいぐるみの山の中央辺りには、確かにオレンジ色のイヌらしきものが確認できる。
しかし、別のぬいぐるみが少し重なってしまっているので、取るのは難しいだろう。
フェイトとアルフもそれが分からない筈は無い。ならば何か固執す

る理由があるのではと考え、ある事に気が付いた。
（‥アルフに似ているな…アレ…）
アースラでの戦闘訓練でアルフの狼形態を何度か見ていた為に気付けたが、オレンジの体に獅子のたてがみを思わせる首回りの毛は、狼形態のアルフと瓜二つだった。
「‥任せろ、どうにかとってみるさ…」
チャリーン…
「……」
チャリーン…
「……」
チャリーン…
「……」
チャリーン…
「…よし…」
四回目にして漸くクレーンのアームはぬいぐるみの胴体をしっかりと掴み、
取り出し口へと繋がる穴に落とした。
「やるじゃんかマオ！
やっぱり出来る男は違うね～！」
「‥大袈裟だなアルフは…
‥ほら、フェイト、取れたぞ…」
マオはアルフの賛辞を受けながらぬいぐるみを手に取り、それをフェイトに手渡した。
「あ、ありがとう…
…本当に貰っちゃっていいの？」
「‥何を言っている、フェイトの為に取ったんだ…遠慮はするな…」
人形を受け取ったフェイトは何故か俯いてしまい、人形を胸元で強く抱き締めると、「クロノ達にも見せて来るね」と言い残して、足早に去って行ってしまった。

「……いきなりどうしたんだ…？フェイトは…」
フェイトの後ろ姿を見送りつつ、何故焦っていたのか不思議に思うマオに、アルフは含みのある笑みを向けていた。
「んふふ～、アンタも案外鈍い奴だね～
まぁ、マオらしいって言えばらしいけどさ」
「‥どういう意味だ…？」
「あはは、何でもない、気にしないでおくれよ！」
一人納得したアルフはマオの問いをはぐらかし、フェイトを追って行った。
「‥まぁいいか…
それよりも、アレは絶対取らないとな…」
釈然としない心境のマオだったが何かを思い出したのか、急に真剣な表情になり、ぬいぐるみの山を睨み付ける。
視線の先には青いぬいぐるみ。
アルフの色違いらしくザフィーラに見え無い事も無いが、アルフ似のぬいぐるみとは若干違いがあり、どうにも首回りが淋しい。
それでも構わないのか、マオは目の前の標的をガラス越しに見据えると、財布から小銭を取り出して台に投入した。
「‥取りずらい…」
思わず呟いてしまうマオだが、それもそのはず、標的たる青いぬいぐるみはかなり奥の方にあったのだ。～～
やっとの思いで取った時には、既に二桁を超える枚数の小銭を投資してしまっていた。
「（マスター。そのぬいぐるみはどうするのですか？）」
「（もしかシテ、「‥これはオレの趣味だ…」とか言ったりシテ…）」
何故マオがこれ程苦労してまで青いぬいぐるみを取ったのかが解らないジークは本人に問うが、クロスに至っては主に可愛い物を集める趣味があると勘違いをしている。
「‥そうか…お前達はまだ知らないんだったな…」

マオは何かに浸るかの様に瞼を閉じる。
主が何を思っているのか計りかねる二機だったが、何かを察したのか、黙って主の言葉を待つ。
「：これはな…オレの家族の為の物だ…
：明日にはお前達にも紹介出来る筈だ…しばし待て…」
閉じていた目を開いたマオは、何時もの無愛想な表情でもなければ、時折見せる微笑みでもなく、無邪気な…それこそ年相応の少年の笑みを浮かべていて、口調もいつもより弾んでいる様に聞こえた。
「「（イエス、マイマスター）」」
ほんの数瞬の事だったが、今まで誰も見た事の無いだろう主の姿を前にした二機は、それ以上の質問は不要と考え、同時に忠誠の言葉を発した。
〜〜〜
「：さぁ、オレ達もクロノ達の所に行くか」
既に何時もの無表情を取り戻していたマオは、移動の為に歩き出した。
〜〜〜

フの言葉に籠る真剣味は皆無だった。
それどころか、遠回しに「諦めな」と言っている様にも取れる。
いや、実際にそう言ったいるのだろう。
「……ハァ」
今日もユーノの溜め息は深い…
〜〜〜

「（こんニチは～。
同じくインテリジェントデバイスの、クロスロードって言いマス。
どうぞヨロシク～）」
マオの両手首に付いている二つのデバイスは、それぞれ挨拶をする。
「両方インテリジェントデバイスだったのか！？
と言うか、何故二つも？
一つでも十分過ぎるだろうに」
ユーノの疑問はもっともだが、かと言って本来の用途を開かす訳にもいかない。
しかし、誰もが疑問に思うだろう事に対しての口実を用意していないマオでは無い。
「‥オレの扱う魔法が特殊な、古代ベルカ式と言うのは知っているよな…？」
「ああ、知っている。
その昔ミッドチルダ式と双璧を為したが、先天資質に対する依存性が強い事や、扱いの難しさ、更にはベルカ世界の崩壊が原因で衰退してしまった、今では扱える者の少ない、希少な魔法体系…だったか…」
「おお～」
クロノの解説に思わず感心するユーノを気にせず、マオは頷いて続ける。
「‥そうだ。
そして、このジークフリートは、ベルカ式の魔法を扱う為に特殊な機能、設定を要している。
対してクロスロードは、ミッドチルダ式の魔法を扱う為にと、グレアム義父さんやリーゼ姉さん達が用意してくれたんだ」
「えっ！？マオってミッド式の魔法使えたの！？」
「‥ああ、ミッド式とベルカ式、それぞれ別の師がいてな…どちらも優秀だから助かっている」

マオの一応、偽りのない話に二人は納得してくれたらしく、さして疑問を掘り下げる事は無かった。

その後マオは実技試験でのブレイブ執務官との試験内容などを聞かれたりしたが、それについては答弁を用意していなかった為にはぐらかす他無かった…

〜〜〜〜〜

「マオ〜、ちょっと来ておくれよ〜！」

その後も話題の費える事無く話していた三人の耳に、店の入口から手を振りながら叫ぶアルフの声が聞こえて来た。

「‥今行く…

‥二人は行かないのか…？」

立ち上がって店へと向かうマオは、クロノとユーノが座ったまま動かない事を疑問に思い声を掛ける。

「ああ、僕達はここで待ってるから、それに、マオを呼んでるみたいだしさ」

「‥そうか、じゃあ一人で行くかな…」

一人歩いて行くマオの後ろ姿を見送り、店内に入って姿が見えなくなったのを確認してから、ユーノは口を開く。

「……あんなに分かりやすいのに、なんで気付かないんだろ…」

店の入口から視線を変え、空を見上げながらユーノは呟いた。

「まぁ、そう言う方面に疎いタイプなんだろう…」

二人が話しているのはもちろんマオの事だ。

「気付いてるけど、気付いて無い振りしてるとかは無いかな…？」

「…それはまず無いだろう。

それどころか、そう言った感情を全く知らない可能性も高いしね」

「…たまにいるんだよね…そう言う鈍感な人って…」

溜め息をつくユーノを見て、ある事に気付いたクロノは、若干悪戯を思い付いた様な顔をした。

「そうだね…君ももっと頑張った方がいいんじゃないか？

…鈍感な人はいるものだからね」

「…オイ、それどう言う意味だよ…！」

「さぁね。君が一番よく分かっているんじゃないか？」

「ぐぬぬ…」

この二人のやり取りは、マオ達が出て来るまで続いた…

〜〜〜〜〜〜〜

１２：３０

太陽は既に真上まで到達しており、空腹を告げる腹の音は現在時刻が正午を過ぎている事を知らせていた。

洋服屋から出て来たフェイトは、頬を仄かに染めて明らかに上機嫌で、アルフも楽しそうな、満足している様な表情をしていた。

そしてマオは、両手に紙袋をぶら下げて、無表情を取り繕っていた。

男には解る、いや、男だからこそ知り得る疲労の理由を理解し、店内での出来事を想像したクロノとユーノの二人は、共に心の中で合掌した。

〜〜〜〜〜

昼食を取る事にした５人は、行く場所を決めてあると言うクロノの後に続いた。

『マオ、覚えているかい？

僕達が初めてあった日に交わした約束を』

先頭を歩き、振り返らずにクロノはマオに念話で話し掛けた。

（：クロノと初めてあった日か…

確か、夏の終わる頃、ザフィーラと稽古をしていて、呼ばれるままにレイに出会った日だったな。

確かその後、カイと戦闘している二人を助けたんだったか…？

そして…）

『：ああ、そう言えばあったな…

：確か旨い物を食わせてくれ、とか言ったんだったか…？』

なんとか思い出せたマオは、瞬時にクロノの言わんとしている事を理解した。
『覚えていてくれたか…
そう、今日この〈イチコクエノキ〉に来た本当の理由は、この店〈松岡屋〉があるからだったのさ』
到着したその店は、大きく松岡屋と書かれた看板が特徴的で、店内は一般的なファミリーレストラン程あり、昼時故か多くの家族連れで賑わっていた。
若い男性店員に促されるままにテーブルに移動し、それぞれメニューを選ぶ。
この店は、見た目通りファミリーレストランなのだが、チェーン店では無く、個人が経営している。
更には料理一品一品が店内での手作りと言う近年稀に見る家庭の暖かみ溢れる店として近所から高い人気を得ていた。
なんでも、常にマオの食の好みを研究していたクロノが選んだイチ押しの店だそうな。
ちなみに、それぞれが頼んだメニューは以下の通りだ。
マオ
〈店長のオススメ。
自家製ハンバーグステーキ、諦めんなよ！セット〉
〈アップルパイ〉
〈リンゴジュース〉
フェイト
〈トゥルルってボンゴレパスタ〉
〈チョコレートサンデー〉
〈ミルクティー〉
アルフ
〈もっと熱くなれよステーキBセット
※火傷に注意！！〉
〈チョコレートサンデー〉

〈オレンジジュース〉
クロノ
〈日替わり定食
今日の内容：ネバーギブアップ！〉
〈アイスコーヒー〉
ユーノ
〈今日からお前は富士山だ！セット〉
〈オレンジジュース〉
食べ終わった時には、全員が活力と希望に満ち溢れた何とも言い得ぬ幸福感に包まれていた。
「：オレは諦めない！！
だからお前も諦めんなよ！！」
「なんだか熱くなってきたね！
アンタも熱くなんなよ！！」
「僕は今日から富士山だーーーー！！」
店を出てから暫くはこの状態が続いた為、比較的冷静さを保てたクロノとフェイトはそれぞれ、マオとアルフを人のいない隅の方へ移動させ、服を脱ぎ出さない様止めたり、誰彼構わず励ましに行ってしまうのを止める為に尽力した。
その際一人取り残されたユーノは、叫び回った結果、後日〈富士山少年〉として都市伝説の一つに加えなれる事となった。
〜〜〜

この一日がどれ程充実したものだったかは、疑う余地も無いだろう。
「マオ、君はこの後どうするんだ？
セイレーンに戻るのか？」
両手に荷物を抱えたユーノが訪ねる。
ユーノ以外の四人は荷物を持っていないが、これは先程行われた荷物持ちジャンケンに負けたのがユーノだからだ。
「：いや、今日はこのままアースラで厄介になるつもりだ…
：そして明日の朝に一度自宅に帰ろうと思ってる…」
マオがセイレーンに戻らないと聞いて更に明るくなるフェイトだったが、続く言葉により別れが近い事を思い出して、少し沈んでしまった。
「そっか…マオと一緒にいられるのも…明日の朝までなんだね…」
「フェイト、心配しなくても会おうと思えばいつでも会える。とはいかないだろうけど、また直ぐにでも会えるさ」
クロノの慰めの言葉により、フェイトの顔にはいくらか明るさが戻った。
「そう言えばさ、マオの出身世界って何処なんだい？
てっきりセイレーンに住んでるのかと思っちゃってたよ」
自宅に帰ると言う言葉を聞き、アルフは浮かんで来た素朴な疑問を口にした。
「：オレの出身世界はな…
：知ってるかは分からないが、第９７管理外世界〈地球〉という惑星だ。
更に詳しく言うと〈日本〉と呼ばれる国の〈海鳴市〉と言う所だ…」
「え！？」
「うそ！？」
「本当かい！？」
「驚いたな…」
その言葉を聞いた四人は、それぞれ心の底から驚いた様子で振り向いたので、マオは少々面食らってしまった。

「…ど、どうしたと言うんだ…？急に…」
「いやなに、君と会う少し前にその世界…いや、その街で僕達は出会ったんだよ」
〜〜〜

ドアの前で一度大きく深呼吸をしてから、部屋のドアをノックした。
「マオいる？私だけど、入っていいかな？」
「‥フェイトか…いいぞ、入って来てくれ…」
フェイトの来訪を快く受け入れたマオは、部屋のロックを解除して招入れた。
マオが今いる部屋は、一週間前アースラに来た際、リンディ艦長から自室と思って使っていいと案内を受けた部屋だった。
この部屋は、機密情報の塊であるデバイス、ジークフリートのメンテナンス等をマオ自身が行うにあたって、他の誰かに見られる訳にはいかない事を理解しているリンディによって、内側から掛けるタイプの電子ロックが設けられていた。
もちろん監視カメラ等のプライバシーを侵害する様な物はついてはいない。
「‥どうしたんだ…？
‥そんな所にいないで座るといい…」

部屋には簡素なデスクがあり、あとはベッドがあるだけだった。
そしてデスクにはマオが座っていた為、必然的にフェイトが座る場所はベッドとなる。
「……」
フェイトは素直に座ったはいいが、思い詰めた表情のまま、一向に喋る気配を見せない。
「‥本当にどうしたんだ…？
‥オレに、何か用事があるんだろう…？」

マオは、フェイトの元気が無い事位は分かるのだが、それが何故なのかが全く分からず、更になんと声を掛ければ良いのかも分からないので、無理に詮索はせずにただ用件を聞くことにした。
「……マオ……」
フェイトがマオを訪ねに来た理由…

それは、マオの言う『なにより大事な人』が誰なのかを聞く為だった。
マオがいつもの調子で言っていたならば、恐らくフェイトも、家族か何か等と考えただろう。
だが、その時のマオの表情は、余りにも…余りにも輝いていたのだ。
間違いなくあの表情は無意識だったのだろう…
マオの見せる微笑みの殆どは本人も自覚していないものだろう。
だからこそマオの表情の変化は他者を引付ける魅力がある。
フェイトもマオに惹かれた一人である故に解ってしまった。
見知らぬ誰かに向けられたマオの想い。それは、単なる『大切な人』という枠を超えたものであり、自分の割り込む余地などは、どこにも無いのだと…
フェイトは、一度マオの名を呼び、また暫く口を閉ざしてしまった。
マオは、フェイトの中で自分では計り知れない葛藤が繰り広げられていると悟り、静かに待つ事にした。
～～～

…フェイトが望むのなら、オレは今出せる全力を尽くそう…」
自分自身に答えを出したフェイトの顔つきを見て、その決意を踏み躙る程マオは愚かでは無く、二つ返事で了承した。
その際マオの出した条件は、フェイトを更に奮い立たせるものだった。
条件その一
［この戦いの事は一切他言無用］
条件その二
［今後、フェイトが勝利した場合、何でも言う事を聞いてやる］
一つ目は、諸事情により余り力を見られる訳にはいかない為のもので、二つ目は単純にフェイトへのサービスと取れる。
その後、マオについての事情をある程度知るリンディに話を通して、映像を残さず、誰にも見られない状態を設定した戦闘空間を用意して貰い、そこへと移動した。
～～～

る圧倒をする他は無い。

『きっとマオはこっちの考えなんてお見通しなんだと思う。
でも、今までの傾向からして死角に意識がよる筈…
そのスキを突く！』
『（イエス、サー）』
初動の打ち合わせをし、僅かな可能性に賭けるフェイトだが、その決意を秘めた瞳が見るものは、勝利の更に先にある…
（…マオの大切な人が誰なのか…凄く気にはなるけど、今は聞かないことにする…。
マオがその人を見ている限り、私が割って入る隙間はきっと、いや、絶対に無い…
でも！だったら！振り向かせれば良い！見てもらえる様、私が変われば良い！
私を、知り合いでも、同僚でも、友達でもない、それ以上の存在として見てもらう為に…私は…マオに勝つ…！
全ては、それからだ！！）
限界を超える覚悟のフェイトは、信頼するバルディッシュを握る手に思わず力が入ってしまい、対する閃光の戦斧もまた、主の想いに応える為自身の限界以上の力を発揮する準備を整えた。
先手必勝、一刃に想いを込めて…
次の瞬間、開幕の音が鳴り響いた
〜〜〜

フェイトを見失ったマオは、その圧倒的な反射力を持って、フェイトこちらの死角を狙って襲撃してくると予測した。
反射的にマオは死角への意識を強くしたが、現れたフェイトは目の前、つまりは正面。

振り下ろされたサイスフォームの魔力刃はマオを切裂き、フェイトは離脱と同時にフォトンスフィアを４基設置し、すかさずフォトンランサーを放った。
「（ハーケンセイバー）」
フェイトは離脱後も常に高速で動き続けて攻撃の手を休める事は無い。
この好機を逃せば勝利は絶望的になると分かっているのだ。
「アルカス？クルタス？エイギアス。
疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。
バルエル？ザルエル？ブラウゼル。
フォトンランサー？ファランクスシフト！」
クロノもいたとはいえ、一度はマオを打ち抜いたフェイトの中でも最大級の魔法、ファランクスシフト。
発動までに時間が掛かってしまうのが欠点な魔法だが、今正に放たれんとするこの魔法の準備に掛かった時間は通常の半分以下であり、スフィアの数も最大の３８基を遥かに上回り、倍近い６３基という破格の数が浮かんでいた。
「打ち砕け！ファイアー！！」
６３基ものスフィアから秒間７発で、５秒間継続して発射されたフォトンランサーは、数にして２２０５発。
その全てが只一点、マオだけを目掛けて降り注ぐ。
圧倒的速度と手数による短期決戦こそがフェイトとバルディッシュが出したマオを倒し得る戦略だった。
そして、その作戦は見事に成功した。
……かに見えたが――――

「…オレに同じ手は通じない…
…ノーザン？ストライク…」
それは、衰える事無くフォトンランサーが発射され続けている最中に起きた。
黄色い嵐の中浮かび上がった蒼白い四つの光球は、降り注ぐフォトンランサーを蹴散らしながら直進し、各々一度だけ大きく方向転換しながら駆け、フォトンスフィアを破壊していった。
「そ、そんな……」
フェイトはあまりの出来事に、驚愕を超えて唖然としてしまっていた。
ファランクスシフトは、対絶対防御魔法とも呼べる魔法。当りさえすれば例え防御されていようとも、その防御を突抜けて対象を打ち砕く。それこそがこの魔法を考案した人物の意図。
そして、フェイトは自身の目で命中するのを確認している。防がれたのなら、それこそが狙い。
何故なら一度防御に回れば身動きを取れなくなり、こちらの限界を超える量のフォトンランサーを全て受け切る他は無い。
ならば、何故？
疑問がフェイトの頭を支配する。
ファランクスシフトの射撃が完了するよりも先に、たった四つの魔力弾、マオのノーザンストライクによって６３基ものスフィアが破壊されてしまった。
それはつまり、フェイトにとっての最強の魔法が、マオにとっての基本的な常用魔法に負けたと言う事。
冷静さを取り戻しつつある思考は、残酷な現実を受け止めきれずに再びフリーズする。
「…防御には自信があるんだ…
…フェイト、これがお望み通りのオレの本気…しかとその目に焼き付けろ…！」
フェイトの思考を引き戻したのはマオの声だった。

見ると、無傷のマオは大技を繰り出す気なのか異常に魔力が高まっている。
（一度距離を取らないと……エッ！！）
明らかに危険と思われるマオの魔法を回避するべく動こうとしたフェイトだったが、いつの間に掛けられたのか、三重ものバインドが体中を縛っていて身動ぎ一つする事が出来なかった。
「：蒼氷術式、限定解除（アイスブルー、リミットリリース）…
六式？ライラプス発動…！
：王の名の下に、地を焼き焦がす天狼よ…
今天を貫き、光輝く星と成れ…」
「（蒼氷術式限定解除。
二式？プレアデス〔アルデバラン〕発動します）」
「（アイスブルーリミットリリース
三式？ミュルティロス発動。
対象、〔アルデバラン〕に設定〜）」

マオの呪文詠唱が完了した時には、六式？ライラプスによって強化された魔力集束によって集めた大気中のフェイトの魔力と、自身の魔力を一つにした身の丈を超える程の巨大な魔力球が出来上がっていた。

「：フェイト、これがオレの全力だ…！
：煌めけ…
天狼王輝？〔シリウス〕…！」
未だにバインドから抜け出せないフェイトは、迫り来る極大の魔力をただ見つめるしかなかった。
（前にもあったな…この光景。
なのはと戦ったあの時も、ファランクスシフトを防がれて、その返しにバインドで動きを封じられて…
やっぱり凄いな…マオは…

正面からファランクスを破っただけじゃなく、こんな砲撃まで撃てたなんて…
なのはのスターライトブレイカーより凄いんじゃ無いかな…）
デジャブを感じながら敗北を受け入れたフェイトは、不思議な光景を目にした。
（なんだろ、これ…）
フェイトの視界には幾つかの蒼白い硝子玉の様な物が幾つか映っていた。
フェイトは振り向く事もままならないので確認は出来なかったが、恐らくそれは後方にもあって、自分を囲う様に配置されているのだろうと考えた。
そして次の瞬間にはその考えは確信に変わる。
何故なら、その玉は一つ一つが光で結び付き、フェイトを中心に全方位を覆う多面型バリアタイプの魔法として発動したのだ。
更に各頂点となる玉の部分からはシールドタイプと思われる防御魔法が発生した。
（…マオ……）
そして、フェイトを覆う様に展開された防壁は、到達した極大の砲撃に飲み込まれた――――――
～～～

それでも…いつか…）
落下を始めたフェイトは、自分が落下している事など気にもならないらしく、手のひらを見つめて思いに耽っていた。
このままでは間違いなく地面に叩き付けられてしまう筈だが、その事態はこの場にいるもう一人によって阻止される。
「‥大丈夫か…怪我は無いか…？フェイト…」
背中から落下していたフェイトを、マオは両腕で背中、膝裏を抱える形で受け止めて、そのまま着地した。
「ありがとう、マオ…
怪我とかは無いよ…ちょっとびっくりしちゃって…
それより平気？私、重かったりしないかな…？」
「‥そうだな…少し重いかな…」
「ふえぇっ！？」
「‥冗談だよ…」
「…もう、マオってば真顔で言うから…」
「‥スマン。
‥降ろすぞ、フェイト…」
壁際まで歩いたマオは、フェイトを壁に寄り掛からせる様に座らせると、自分もその横に座った。
「‥それにしても、さっきのは凄かったな…
‥速さといい、魔力量といい、もしあれが初見だったなら対処出来なかったよ…」
「ありがとう、マオ。
でも、通じなかった…」
フェイトはマオの称賛の言葉を素直に受け止めたが、やはり自身の十二分に発揮出来た力が通じなかった悔しさは拭い切れない。
「‥気に止む事は無いさ。
オレ達はまだまだ若く、発展途上の身だ…
今はオレの方が上回っているが、それは単純に魔力量の差が出ているだけの事。

基本的な魔法技術の一つ一つは、フェイトの方が上なんだ、焦る事は無い。
それに、なにもこれが最後と言う訳じゃない…問題なのはフェイト、お前が為すこれからなんだよ…
…だから、元気だせ…フェイトに暗い表情は似合わない…」
魔法技術がマオより自分の方が上や、魔力量の差が勝敗を決めた、等の部分に疑問を持ってしまうフェイトだったが、どこと無く必死な様子のマオが、自分を励まそうとしてくれているのだと気付き、その不器用な優しさに思わず笑みを零していた。
「ふふ、ありがとう、マオ。
そうだよね、まだまだこれからだよね…！」
自然と出たのは何度目か分からないありがとうの言葉。
決意は変わらず胸の内に秘めているフェイトだが、マオについて一つ勘違いをしてしまっていたと反省する。
（私はなんて馬鹿なんだろう…
大切な人がいるって語った時の横顔を見て、勝手に思い込んじゃってた…
マオはその人だけを見てて、私の事を見てくれていないんだって…
それで落ち込んじゃって、気にかけてくれている素振りも見えなくて、更に沈んじゃってたけど…
マオは見てくれてた、気付いてくれていたんだ…
私がそれに気付かなかっただけなんだ…！）
フェイトは、もう心配をかけない様にと心からの笑顔をマオに送り、対するマオも安心から微笑みを浮かべる。
（…分かってるよ、マオの一番はその〔大切な人〕であって、私では無い。
この微笑みも、私だけのものでは無くて、大多数の人に向けられるものと同じ…特別なものという訳じゃない。
だから、いつか必ずマオの隣りに立つ、マオにとっての特別な存在になってみせる…）

お互いに黙り込んでしまっている為、この空間には、ただただ静寂のみが漂っていた。
双方ともそれを苦に思うことは無く、ずっとこのままの状態が続いてもおかしくは無かったが、膝を抱えている金の少女、その小さな体が傾いた事により少し変化した。
マオの肩に頭を凭れかけさせたフェイトは、自身の体重を預け、安心しきった表情で瞳を閉じる。
「マオ…あなたを超える事が…私の目標…
だから…私がマオを超えるまで、誰にも負ないでほしい…
マオが他の誰かに負ける所なんて…私は見たくないし、想像も出来ない…
だからお願い…マオ…誰よりも…誰よりも強い…私の憧れでいて…」
この誰も見ていない完全に二人だけの空間であっても、どこか気恥ずかしさを感じているフェイトは、消え入りそうな声で自身の望みを伝えた。
「（…願いを聞くのはオレが負けた時だった筈だが…まぁいい。）
…分かったよ、フェイト…
もとよりオレは、この先一切の負けも許されぬ身…
…約束する…オレはもう、誰にも負けはしない…そしてフェイトの目標であり続けると…
…だからフェイト、お前はもっと強くなれ…オレを超える程にな…」

「うん、約束…
…それとマオ…最後に、もう一つだけ我儘を言ってもいいかな…？」
一度身を離したフェイトは、その両目で真っ直ぐマオを見つめると、本日最後となる願いを口にした。
「今は、今だけは…他の全てを忘れて、私だけを見ていてほしい…」
しばらくの沈黙の後、開かれんとするマオの口を人差し指で制したフェイトは、答えを聞かないまま再びマオに体重を預けると、間も

無く浅い寝息をたてて眠りについた。
（……）
自身に寄り掛かり、静かに眠るフェイトを見つめるマオ。
彼は一体なんと答えようとしたのか…
その答えは、本人のみぞ知る…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2838m/

魔法少女リリカルなのはA's～夜天の王と無窮の魔王～

2011年9月28日21時16分発行